筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日中離脱を表す動詞の意味論的研究

李　響

２０１９年度

【目次】

第１章　序論

1.　本研究の背景と目的 1
2.　本研究の対象 4
3.　意味の分析方法 6
4.　本論文の構成と各章の概要 8

第２章　先行研究と問題の所在

1.　はじめに 11
2.　離脱動詞について 11
2.1　村木（2000） 11
2.2　日本語記述文法研究会編（2009） 13
2.3　村木（2000）、日本語記述文法研究会編（2009）の問題点について 13
2.4　BENOM（2012） 14
2.5　森田（2017） 15
3.　壁塗り構文について 15
4.　問題の所在と本論文の内容 16

第３章　日本語の各離脱動詞の意味分析及び離脱動詞の内部体系

1.　はじめに 19
2.　分析対象と比較するグループ 19
2.1　分析対象 19
2.2　比較するグループの設定 20
3.　「とれる、おちる」の意味分析 21
3.1　先行研究 22
3.1.1　柴田編（1976） 22
3.1.2　森田（1977） 22

3.1.3 BENOM (2012) 26
3.2 離脱物と離脱元の関係 26
3.3 離脱動作 30
3.3.1 離脱動作の目的 30
3.3.2 離脱事態の起因 31
3.4 まとめ 31
4. 「ぬける、はずれる、もげる」の意味分析 32
4.1 先行研究 32
4.1.1 柴田編 (1976) 32
4.1.2 森田 (1977) 33
4.1.3 國廣編 (1982) 33
4.1.4 杉本 (1983) 34
4.1.5 国広 (2006) 34
4.1.6 BENOM (2012) 36
4.2 離脱物と離脱元の関係 38
4.2.1 「ぬける」について 38
4.2.2 「はずれる」について 40
4.2.3 「もげる」について 41
4.3 離脱動作 42
4.3.1 離脱動作のマイナス性 42
4.3.2 離脱事態の起因 43
4.4 まとめ 44
5. 「むける、はがれる、はげる」の意味分析 45
5.1 先行研究 45
5.1.1 「むく」について 45
5.1.2 「はがす」について 47
5.1.3 離脱動作の焦点 47
5.1.4 先行研究のまとめ 48
5.2 構文的な特徴 48
5.3 離脱物と離脱元の関係 50

5.4　離脱動作 53
5.4.1　離脱の焦点 53
5.4.2　離脱事態の起因 55
5.5　まとめ 56
6.　日本語の離脱動詞の内部体系 56
6.1　離脱物と離脱元の関係 56
6.2　構文的な特徴 58
6.3　意味的な特徴 64
7.　まとめ 66

第４章　日本語の離脱動詞と移動動詞、状態変化動詞との関係

1.　はじめに 68
2.　位置変化が焦点化された離脱動詞と移動動詞の比較 68
2.1　「～ガ V」におけるずれ 69
2.2　ニ格との共起及びテイル形の解釈のずれ 71
2.3　起点を示すヲ格との共起のずれ 74
2.4　移動動詞と離脱動詞の境界 76
3.　状態変化が焦点化された離脱動詞と状態変化動詞の比較 77
3.1　「離脱物が V」と「離脱元が V」におけるずれ 78
3.2　結果補語の修飾先の曖昧性 80
4.　離脱動詞と移動動詞、状態変化動詞との関係 81
5.　まとめ 82

第５章　中国語の離脱動詞“掉”の意味分析及び日本語との対応

1.　はじめに 83
2.　先行研究 84
3.　“落”について 85
4.　離脱動詞である“掉”の文法的振る舞いについて 86
4.1　移動動詞の“掉”と離脱動詞の“掉”について 86

4.2　離脱動詞である“掉”の文法的振る舞いについて 88
5.　日本語との対応関係 93
6.　まとめ 97

第６章　離脱動詞“V 掉”、及び“掉”“V 掉”と移動動詞、状態変化動詞との関係

1.　はじめに 99
2.　“V 掉”と“掉”、日本語の離脱動詞との対応関係 99
3.　“掉”“V 掉”が取る構文について 105
4.　「離脱物＋V」と移動動詞について 108
5.　「離脱元＋V」と状態変化動詞について 112
6.　その他の“V 掉”について 117
6.1　“V 掉”の先行研究 117
6.2　離脱動詞である“V 掉” 121
6.3　位置変化、状態変化の有無とその他の“V 掉” 122
7.　まとめ 125

第７章　離脱動詞の日中対照

1.　はじめに 126
2.　位置変化が焦点化された場合 126
3.　状態変化が焦点化された場合 128
4.　日中離脱動詞における自動詞と他動詞のずれ 130
4.1　日本語の無対他動詞 130
4.2　日中離脱動詞における自動詞と他動詞のずれについて 131
4.2.1　反使役化と脱使役化について 132
4.2.2　ナル型言語とスル型言語 137
5.　まとめ 138

第８章　結論

1.　各章のまとめ 140
2.　今後の課題と展望 142

参考文献 143

各章と既発表論文及び口頭発表の関係 149

第１章　序論

1. 本研究の背景と目的

従来、移動動詞[1]として扱われてきた動詞の中には、日本語では「とれる、とる、おちる、おとす、ぬける、ぬく、はずれる、はずす、もげる、もぐ、はがれる、はがす、むける、むく、はげる、はぐ」、中国語では“掉”“V 掉”などがあり、「あるもの A があるもの B から離脱する」、または、「あるもの A をあるもの B から離脱させる」という意味を表す。本論文は、この一類の動詞を「離脱動詞」[2]と呼び、その特徴や移動動詞、状態変化動詞との関係を考察する。

上に挙げたような離脱動詞は、次のように、接触動詞[3]と反義的な意味をなすと考えられる。

（１）　a.　ボタンがシャツに付いた。

　　b.　シャツのボタンが／ボタンがシャツから　とれた。

（２）　a.　ボタンをシャツに付けた。

　　b.　シャツのボタンを／ボタンをシャツから　とった。

（３）　a.　ペンキをベンチに塗った。

　　b.　ベンチのペンキがはげた。[4]

（４）　a.　壁紙　貼　　在　墻　上　了。

　　壁紙　貼る　ニ　壁　上　た

　　（壁紙を壁に貼った。）

---

[1] 移動動詞は「主体の位置を変えるような動作・作用を表す動詞」であるとされる (森田 1989)。本研究は位置変化のみを表すものを移動動詞とみなす。

[2] 本研究で「離脱動詞」と呼ぶものには、自動詞も他動詞も含まれるが、本論文では自動詞のみを分析対象とする。

[3] 国立国語研究所 (1964) には、「触れる、さわる、接す、付く、付ける、くっつく、くっつける、ひっつく」などが「2.1560 接触 ・接近」に挙げられている。このような動詞は、離脱動詞と反義をなす、付着を表す接触動詞であると考える。

[4] ただし、「塗る」は自動詞を持たず、「はげる」と意味的に反義になるような自動詞の接触動詞はない。

b. 墙　的　壁纸　掉　　了。

壁　の　壁紙　diao　た[5]

（壁の壁紙がはがれた。）

（5）　a. 油漆　　涂　在　桌子　上　了。

ペンキ　塗る　ニ　机　上　た

（ペンキを机に塗った。）

b. 桌子　的　油漆　　掉　　了。

机　の　ペンキ　diao　た

（机のペンキがはげた。）

(a) は接触動詞の文であり、あるものがあるものに接触する、もしくは接触させる動作を表す。また (b) は離脱動詞の文であり、あるものがあるものから離脱する、もしくは離脱させる動作を表し、(a) の逆の動作になる。そして、接触動詞の文の付着点は、日本語の文では、ニ格で示し、中国語の文では、“在”で示す[6]。一方、離脱動詞の文の離脱元は、日本語ではカラ格、または「～の」という形式、中国語の文では“的”で示す。離脱動詞の離脱物と離脱元は「全体―部分」の関係にあり、そして、離脱元から離脱するため、「～の」と起点を示すカラ格を言い換えられる場合が多い。

以上から、離脱動詞は付着を表す接触動詞と反義的であると考えられるが、着点に焦点を当てる接触動詞に関する研究、特に、格交替現象（いわゆる壁塗り交替現象）をめぐる研究 (奥津 1981、岸本 2001、川野 1997、2006、2009、2017) は豊富である。従来の研究によれば、壁塗り交替する動詞は位置変化と状態変化の両方を表すと指摘されている。

一方、以下から、離脱動詞も位置変化と状態変化を含むと考えられる。まず、

---

[5] “掉”は日本語の多数の離脱動詞に対応し、ガ格名詞により対応する動詞が変わってくるため（詳細は第 5 章で後述する）、ピンインの“diao”で表記する。

[6] 本論文では、離脱動詞と反義的な関係にある付着を表す接触動詞を、ほかの動詞と分けるため、「ボタンがシャツに付く」のような接触動詞文におけるニ格名詞を付着点と呼ぶ。上記の文では、ニ格名詞の「シャツ」は「ボタン」の付着点である。それに対し、「ボタンがシャツからとれた」のような離脱動詞文におけるカラ格名詞を起点と呼ぶ。(1b) では、カラ格で「ボタン」の起点である「シャツ」を示す。また、以下では、移動動詞の場合は、ニ格名詞を着点と呼ぶことにする。

意味的には、離脱動詞は、位置変化と状態変化の事象を含んでいると言える。例えば、(6) の文は、「ボタン」が「シャツ」から位置変化することを表すのに加え、「シャツ」の「ボタン」がなくなったという状態変化、つまり一部分が失われるという離脱元の状態変化を表すことができる。そして、中国語の (7) の文も同様であり、「毛」が「うさぎ」から位置変化することを表し、さらに「うさぎ」自身の状態変化を表す。

（6）　シャツのボタンがとれた。
（7）　兔子　　毛　掉　　了。
　　うさぎ　毛　diao　た

次に、構文的に見ると、(8) (9) のように、離脱動詞には、起点を示すカラ格と状態変化の結果を示す結果補語を取れる動詞が存在する。このことからも、離脱動詞は位置変化と状態変化を含むと考える。

（8）　a.　かさぶたが肩からむけた。
　　b.　肩の皮が赤くむけた。
（9）　a.　角質が表面からはがれた。
　　b.　気道の内側の皮が薄くはがれた。

また、典型的な格交替ではないが、離脱動詞は、以下の 2 種類のパターンを取ることができる。一つ目のパターンは、(10) (11) に示すようなものである。(10) の「シャツ」は、(10a) では所有のノ格を取り、(10b) では起点のカラ格を取る。(11) の「車」も同様に、ノ格とカラ格を取れる。そして、(a) 文と (b) 文は同義であると考えられ、(10) の文はいずれも「ボタン」が「シャツ」から離脱することを表す。(11) も同様であり、「タイヤ」が「車」から離脱することを表す。

(10)　a. シャツのボタンがとれた。
　　b. ボタンがシャツからとれた。
(11)　a. 車のタイヤがはずれた。

b. タイヤが車からはずれた。

もう一つのパターンは、(12) (13) に示されるようなものである。(12) の「踵」は、(12a) では所有のノ格を取り、(12b) では主格のガ格を取る。(13) の「メタル」も同様に、ノ格とガ格を取れる。そして、(a) 文と(b) 文は同義であると考えられる。(12) のいずれの文も「皮」が「踵」から離脱したことで、「踵」が状態変化することを表す。(13ab) も同様であり、「メッキ」が「メタル」から離脱したことで、「メタル」が状態変化することを表す。

(12) a. 踵の皮がむけた。
b. 踵がむけた。
(13) a. メタルのメッキがはげた。
b. メタルがはげた。

以上から、離脱動詞は、接触動詞と反義的な関係をなし、また、ある種の交替が生じる動詞であることから、壁塗り構文に関係する動詞と相似した振る舞いを持つと考えられる。しかし、離脱動詞に関する研究は僅少であり、未だ語彙の意味分析の段階に留まると言える。

そこで、本論文は離脱動詞の全体像を把握することを目的とし、日本語の各離脱動詞の意味分析、離脱動詞の特徴及び内部体系を考察し、移動動詞、状態変化動詞との関係を考察する。さらに、日本語の離脱動詞に対応する中国語の離脱動詞の用法と移動動詞、状態変化動詞との関係を論じる。

2. 本研究の対象

「あるものAがあるものBから離脱する」という意味を表し、接触動詞と反義的な関係をなす自動詞の離脱動詞を対象とする。具体的には、以下に挙げる日本語の「とれる、おちる、ぬける、はずれる、もげる、はがれる、むける、はげる」という8語と中国語の“掉”“V掉”を研究対象とする。

(14)　とれる：シャツのボタンがとれた。

(15)　おちる：シャツの汚れがおちた。

(16)　ぬける：瓶の栓がぬけた。

(17)　はずれる：車のタイヤがはずれた。

(18)　もげる：ぬいぐるみの足がもげた。

(19)　はがれる：壁紙がはがれた。

(20)　むける：みかんの皮がむけた。

(21)　はげる：ベンチのペンキがはげた。

(22)　掉：兔子毛掉了。（うさぎの毛がぬけた。）

(23)　V 掉：布娃娃的头被拧掉了。（ぬいぐるみの頭がもがれた。）

(23) に示されるように、“V 掉”の用法には離脱動詞の用法がある。“V 掉”は、ある動作 V を行い、対象物を離脱させることを表す他動詞であるが、受身形式を取り、対格を昇格することで、以下のように、日本語の自動詞の離脱動詞と対応する。このため、“V 掉”も研究対象とする。

(24)　a. みかんの皮がむけた。

b. 橘子　皮　被　剥掉　了。

みかん　皮　られる　V（剥く）diao　た

(25)　a. 爆発で、彼の足がもげた。

b. 因为　爆炸、他　的　腿　被　炸掉　了。

から　爆発　彼　の　足　られる　V（爆破する）diao　た

なお、(26) の「おちる、ぬける、はずれる」は接触動詞と反義的であるとは考えにくい。本研究では、このような用法を離脱動詞としての用法ではなく、移動動詞としての用法であると考える。

(26)　a.　太郎が馬からおちた。

b.　列車がトンネルをぬけた。

c.　惑星が軌道からはずれた。

3.　意味の分析方法

まず、意味論研究の観点を概観する。池上 (1975) は、音韻論で使われる「示差的特徴」を意味論に導入している。これは、語は他の語と区別されることが重要であるため、語の意味を記述するには、その他の語と区別される特徴である「示差的特徴」だけを認めれば良いとする考え方である。つまり、「示差的特徴」は語の意味にとって、本質的に重要なものであり、語の意味は「示差的特徴」によって構成されていると指摘している (池上 1975: 86)。

一方、國廣 (1982) は、従来の意味論研究を批判的に概観した上で、服部 (1968) で指摘された意義素を厳密化し、動詞の意味を考察するにあたって、「弁別的な特徴」（＝「示差的特徴」）のほか、“relevant” な特徴も考える必要があると指摘し、池上説との考え方の相違を以下のように述べている。

> 服部四郎 (1964)「言語の音声と意味」には、意義素がさらに小さい「弁別的意味特徴」に分析されることが示されている。これは「英語で言えば、distinctive feature よりもむしろ relevant feature とすべきである（私に従えば、前者は後者に含まれる）。relevant は『社会習慣的特徴として問題になる』の意である。」(1968: 40、脚注 3) と説明される。これは池上嘉彦説の「示差的特徴」と異なる重要な点である。　(國廣 1982: 35)

次に、意味分析の方法を述べていく。國廣 (1982) は、服部 (1968) が指定している文脈的作業原則に基づき、対照的作業原則の有効性を指摘し、つまり、語を単独に分析するのではなく、意味、用法が近い語と比較しながら分析する方法が効果的であることを示している。

(27)　同じ文法的位置に立ち得る形式は同じ文法的意義特徴を共有する。
（同位置の作業原則）
同じ統合型・文型によって互いに統合され得る形式（音調型を含む）はお互いに呼応する文法的意義特徴を有する。（相互呼応の作業原則）
(服部 1968: 61)

(28)　同位置の作業原則：同じ自立語と同じ統合型・文型によって統合される自立語は同じ語義的意義特徴を共有する。これは、パラディグマティックな関係に基づくものである。

呼応の作業原則：互いに統合され得る自立語は、互いに呼応する語義的意義特徴を有する。これは、シンタグマティックな関係に基づくものである。

(國廣 1982: 201-202)

また、宮島 (1972) は、語の意味を区別する意味特徴を見つける手法については以下のように述べている。

> A・B という 1 対の単語（または単語群）をとって考える。この両者は、ある文脈では、おたがいにおきかえても、ほぼおなじ事実をあらわすものとする。このような文脈は、1 つにはかぎらない。すなわち A・B をおたがいにおきかえても、おなじ事実をつたえるような短文は幾組かつくることができる。このように A・B にとっていわばおなじ環境をなす例文のグループを例（AB）とあらわすことにする。一方、B の例文としては使えるが A を B のかわりに代入することはできない、という文もあるはずである。これを例（B）であらわす。A・B の意味の差は、この例（B）と例（AB）とを比較することによってえられる。すなわち、A が例（B）に現れないのは、A の意味がこの点で積極的な制限をもっているからである。この制限が、A にとっての意味的な特徴を示していると考える。
>
> (宮島 1972: 14)

この点について、國廣 (1982) も、類義語を比較する際には、一方の語は用いられるが他方の語は用いられないという「対照的文脈」（あるいは「最小対立的文脈」）を使うのが効果的であると述べている。

本論文では、弁別的でない特徴も含めて考慮する国広説の立場を取り、服部 (1968)、國廣 (1982) が指摘する作業原則に従う。具体的に意味分析を行う際に、

「同位置の作業原則」により、各離脱動詞の離脱物になるものを整理する。次に、その離脱物全体に見られる共通の特徴を探し出す。さらに、「相互呼応の作業原則」により、離脱物に認められた特徴を動詞の意味特徴の一部として記述する。また、動詞の意味を分析する際には、意味的に近い動詞でグループを組み、「対照的文脈」を使用する。

4. 本論文の構成と各章の概要

本論文は、全 8 章から構成される。

第１章　序論
第２章　先行研究と問題の所在
第３章　日本語の各離脱動詞の意味分析及び離脱動詞の内部体系
第４章　日本語の離脱動詞と移動動詞、状態変化動詞との関係
第５章　中国語の離脱動詞“掉”の意味分析及び日本語との対応
第６章　離脱動詞“V 掉”、及び“掉”“V 掉”と移動動詞、状態変化動詞との関係
第７章　離脱動詞の日中対照
第８章　結論

第 1 章では、本研究の目的、研究対象及び意味分析の方法について述べる。

第 2 章では、先行研究を踏まえて、その問題点と本論文の内容を述べる。

第 3 章では、まず、離脱物と離脱元の関係、離脱動作の観点から日本語の各動詞の意味を分析する。次に、日本語の離脱動詞は、構文、意味において、共通の特徴を持つことから、一類の動詞をなすことを示す。構文的には、「(離脱元）の（離脱物）が V」という構文を取り、離脱元と離脱物は「全体－部分」の関係にあることを明らかにする。意味的には「離脱物が離脱元から位置変化する」という事象Ⅰと、「離脱物がなくなったことで離脱元が状態変化する」という事象Ⅱを表すことを示す。離脱動詞の主語に立てる名詞は「全体（離脱元）－部分（離脱物)」の関係にある名詞であるため、事象Ⅰと事象Ⅱは連動することを主張する。最後に、離脱動詞の内部はカラ格、結果補語を取ることが可能であるかとい

う観点から、位置変化が焦点化された類（例：とれる、はずれる）と状態変化が焦点化された類（例：はげる）に分けられることを示す。

第 4 章では、位置変化が焦点化された離脱動詞と移動動詞、状態変化が焦点化された離脱動詞と状態変化動詞を比較し、それぞれの共通点と相違点を示す。位置変化が焦点化された類は、離脱後の段階を表さず、過程を持たない点で移動動詞と異なる一方で、状態変化が焦点化された類は、離脱元と離脱物のいずれの状態変化も表せる点で状態変化動詞と異なることを明らかにする。以上の点から、離脱動詞は独自の一類をなしているが、それぞれ移動動詞、状態変化動詞と共通点、相違点を持つことから、移動動詞と異なる動詞であること、状態変化動詞と接点があることを主張する。

第 5 章では、離脱を表す中国語の一文字動詞である“掉”の文法的な振る舞い、離脱物との共起における日本語との対応関係を論じる。まず、“掉”の類義語である“落”は「花、葉」しか離脱物に取らず、非常に限定された用法しか持たないことを述べる。このことから、本研究は“掉”だけを離脱動詞とみなすことを主張する。次に、文法的な振る舞いを確認し、“掉”は時間の幅を持たないことを示す。さらに、離脱物との組み合わせという点から日中離脱動詞を比較し、“掉”は外力がないと離脱ができない場合には用いられないことを明らかにする。さらに、日本語の複数の離脱動詞は離脱物の種類により使い分けられる一方、“掉”はより包括的に使われ、日本語の複数の動詞と一対多の対応関係を持つことを提示する。

第 6 章では、中国語には、「何らかの行為により離脱物を離脱させる」動作を表す他動詞の離脱動詞“V 掉”が存在することを示す。“掉”は外力がないと離脱できない動作を表さない一方、“V 掉”は V という外力を通して、離脱動作を起こすことを表す。さらに、構文的な観点から“掉”“V 掉”を考察し、移動動詞、状態変化動詞と比較することで、“掉”“V 掉”は、離脱物、離脱元のいずれも主語の位置に立つことが可能であることを確認した上で、「離脱物＋V」と移動動詞、「離脱元＋V」と状態変化動詞の関係を示す。「離脱物＋V」は物の位置変化の出発段階を表す点において、起点指向移動動詞と共通し、“从”、「V＋トコロ」を取りにくい点において、起点指向移動動詞と異なることを示した。また、「離脱元＋V」は、離脱元の状態変化を表す点で状態変化動詞と共通し、「離

脱物＋V」「離脱元＋V」が表す事柄が同様であるかどうかという点で異なることを示した。このように、“掉”“V 掉”は独自の一類をなしているが、それぞれ移動動詞、移動動詞と共通点、相違点を持つことから、移動動詞、状態変化動詞と接点があることを主張する。また、“V 掉”の先行研究を踏まえた上で、位置変化、状態変化の観点から“V 掉”を検討し、“V 掉”が連続体である可能性を示唆する。

第 7 章では、日本語と中国語を比較し、位置変化が焦点化された類においては、日本語は起点を示すカラ格を取ることができる一方、中国語は“从”を取らないことを示す。また、状態変化が焦点化された類においては、日本語は全体的解釈を取る一方、中国語の場合は、全体的解釈、部分的解釈のいずれも取ることが可能である。これは、中国語の場合では、離脱物が目的語であり、全体的解釈を受けるため、離脱元の状態変化が部分的解釈でも、全体的解釈でも良いことを述べる。さらに、日本語と中国語における自動詞、他動詞のずれが存在することを示し、反使役化、脱使役化とナル型言語、スル型言語という観点から説明を与える。

第 8 章では、本論文の成果をまとめた上で、日中離脱動詞は並行的であり、いずれも移動動詞、状態変化動詞と共通点、相違点を持ち、一類の動詞をなすことを指摘し、今後の課題について述べる。

第２章　先行研究と問題の所在

1.　はじめに

本章では、離脱動詞に関する先行研究を概観した上で、その問題点を指摘し、本論文の立場を述べる。2 節で離脱動詞に関係する先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。3 節で離脱動詞が起こす格交替と関連する壁塗り構文について紹介する。4 節で日中離脱動詞の格交替現象を示した上で、本論文の内容を述べる。

2.　離脱動詞について

離脱動詞を中心に考察する研究は管見の限りほとんど見当たらないが、離脱動詞に関係する記述は、村木 (2000)、日本語記述文法研究会編 (2009)、Benom (2012)、森田 (2017) に見られる。

2.1　村木 (2000)

村木 (2000)、日本語記述文法研究会編 (2009) は動詞を格支配の観点から考察しているが、離脱動詞と関連する記述は以下のようにまとめられる。

村木 (2000) は、名詞と動詞の間に成り立つ意味的関係（叙述素）は動詞の構造を考察する一種の手がかりであるとし、意味的関係の具体例として、離脱動詞の例を取り上げている[7]。

（１）　〈空間的起点〉LS_1　N_j は、N_i (＋con) が起点となるところである。

［N_i：＋con、　N_j：＋loc］

｛移動｝弟が　部屋から　出る。

社長が　会議室から　戻る。

（娘が学校から帰る／手紙が外国から来る／みんなが二階から（屋上まで）上がる／妻が客間から（奥に）下がる／男が座敷から（庭に）降りる／猿が木の枝から落ちる／名物教授が大学から去る）

[7] 村木 (2000) は、〈空間的起点〉を LS で表し、主格が介在するものを添字 1 で、対格が介在するものを添字 2 で表すとしている。

｛離脱｝矢が　弓から　離れる。

切手が　封筒から　はがれる。

（鍵がドアからはずれる／壁からポスターがはがれる／頭から髪の毛がぬける／頭から帽子がぬげる／上着から袖がとれる／皮膚から傷口のかさぶたがめくれる）

｛消滅｝書類が　かばんから　なくなる。

会社から　彼（の姿）が　消える。

（電車の窓から富士山が消える／財布がわが身からうせる／侍が殿の御前からしりぞく）

(村木 2000: 91)

（２）　〈空間的起点〉LS_2　N_j は、N_i (＋con) が起点となるところである。

［N_i：＋con、 N_j：＋loc］

｛移動｝荷物を　二階から　おろす。

箱の中から　球を　とりだす。

（生徒を教室から（グランドに）移す／荷物を下宿からはこぶ／包を二階の窓からおとす／品物を店頭から（倉庫に）下げる／贈り物を自宅から（友人に）とどける）

｛離脱｝柱から　釘を　ぬく。

封筒から　切手を　はがす。

（壁からポスターをはがす／風船から空気をぬく／壁から額をはずす）

｛消滅｝部屋から　書類を　なくす。

（グランドから石ころを除く／この世からじゃま物を消す）

(村木 2000: 92)

以上から、村木 (2000) は、離脱動詞を、移動動詞などと区別しているが、その格構造の違いについては触れていないと言える。

2.2　日本語記述文法研究会編（2009）

日本語記述文法研究会編 (2009) は構文から動詞を分析し、そのうち、離脱動詞に関連する記述としては、以下のような記述が見られる。

［が、から］文型

1）主体移動（起点明示）型：出る、取れる、など

2）構成型：できる、なる、など　　(日本語記述文法研究会編 2009: 17)

日本語記述文法研究会編 (2009) は、移動動詞「出る」と離脱動詞「とれる」は主体の移動を表す動詞とし、カラ格で起点を明示すると説明している。これは、村木 (2000) と同様に、離脱動詞を移動動詞として扱っていることになる。

2.3　村木（2000）、日本語記述文法研究会編（2009）の問題点について

村木 (2000)、日本語記述文法研究会編 (2009) は格の観点から、離脱動詞を移動動詞として扱っている。この場合、(3) のように、一見すると、カラ格で起点を示す点においては、両者が共通すると思われる。

（3）　a.　ボタンがシャツからとれた。　【離脱動詞】

　　b.　彼が家から出た。　【移動動詞】

しかし、両者はニ格を取るかどうかという文法的な振る舞いにおいて差異が見られる。以下に示すように、離脱動詞はニ格を取らないのに対し、移動動詞はニ格を取ることができる。

（4）　a.＊ボタンが地面にとれた。

　　b.＊タイヤが地面にはずれた。

　　c.＊木の皮が地面にむけた。

（5）　a.　太郎は沖にはなれた。

　　b.　彼が庭にでた。

　　c.　太郎が学校に行く／来る。

動詞の意味は構文の違いに反映していると考えられる。離脱動詞はあるものAがBから位置変化するという意味を表すが、そのほか、B自身の状態変化も表す。一方、移動動詞はあるものAがBから位置変化することのみを表す動詞であると考える。以上から、本研究では、離脱動詞が移動動詞と異なる類であり、区別して考える必要があることを主張する。

2.4 Benom (2012)

Benom (2012) は、ソシュールが主張する "everything depends on relations (Benom 2012: 107)" という問題を考察し、類似している語彙体系における意味の分布を調査している。具体的には、離脱事象を表す語彙体系について、(6) の項目を考察している。その結果、「ぬける、とれる、はずれる」の意味特徴をそれぞれ (7) のように記述している。

（６）

1）3語と関係がある意味素性 (categories of meaning) は何か。

2）体系の中にどのように分布するのか。

3）3語の意味的な「真の重複」と「見かけ上の重複」は、どのようになっているか。

4）3語はお互いにどのように影響を受けているのか、または、体系の中で消極的に定義されている証拠は何か。

（７）　3語の意味特徴

Nukeru: to exit from an IN relationship, broadly construed, involving tight fit.

Toreru: to separate by overcoming resistance (Force Dynamics).

Hazureru: to separate by "unlocking". (Benom 2012: 124)

(7) の記述では、"overcoming resistance" と "unlocking" の違いは明確とは言えない。また、"IN relationship" と "ON relationship" は連続しているため、曖昧な例が存在する。

2.5　森田（2017）

森田 (2017) は動詞の中止形の用例の分析・記述を行い、そのうち、装着動詞の例を以下のように取り上げている。装着動詞は、動詞の語彙的な意味として主体への衣服の着脱を表すとしている。

> とりつけ：
> (眼鏡を)かける、(コートを)ひっかける、(バッジを)つける、(指輪を)はめる、(入れ 歯を)入れる、(ネクタイを)締める、(マフラーを)巻く、(口紅を)塗る など
> とりはずし：
> (ネクタイを)外す、(スカーフを)とる、(マニキュアを)落とす など
>
> (森田 2017: 70)

森田 (2017) は、服類を体に付着する、または服類を体から離脱するという意味を表す装着動詞を「とりつけ」類と「とりはずし」類に分けているが、これは、両者が反義的な関係にあることを示していると考えられる。

3.　壁塗り構文について

奥津 (1981)、Pinker (1989) では、次のような格交替現象が指摘されており、壁塗り交替と呼ばれている。奥津 (1981) によると、壁塗り交替が起きる動詞は、位置変化と場所の状態変化の両方の意味を持つ。

（8）　a. 壁をペンキで（白く）塗った。
　　b. 壁にペンキを塗った。

奥津 (1981) は、(8a) のヲ・デ型は、「壁」が「ペンキ」という手段によって、「白く」状態変化することを表すのに対し、(8b) のニ・ヲ型は、「ペンキ」を「壁」という着点に移動させることを表すと指摘している。この点に関しては、岸本 (2001) でも指摘がある。岸本 (2001) では、動詞がその語彙の意味として、移動物の動きを指定する意味と、移動の結果として場所に影響を及ぼすという意味

との二面性を持つことができるときに、壁塗り交替が可能であると指摘されている (岸本 2001: 126)。さらに、行為連鎖の意味構造から見ると、壁塗り交替が起きる動詞は、「移動物の動き」と「場所の結果状態」を焦点化することができると指摘している。

また、岸本 (2001) は、壁塗り交替が起きる代表的な動詞について、英語と日本語それぞれの動詞を「取り付け・詰め込みを表す動詞」、「除去を表す動詞」などに分けて提示している。日本語において、以下のように分類された［除去］［漏出］［その他］の動詞は交替が起きる除去を表すものとして挙げられている。

［除去］空ける／空く、空になる、片付ける／片付く、（川を）さらう、涸れる、飲み干す、干し上がる、あさる、ぬぐう
［漏出］漏れる、漏る、流す、絞る、溢れる、氾濫する
［その他］かえる (岸本 2001: 106)

川野 (2017) は、以下のような、「離脱型」[8]の動詞も二種類の格体制を取ることを提示し、壁塗り代換を起こす「付着・移入型」の動詞の条件と共通すると指摘している。つまり、交替を起こす動詞は位置変化と場所の状態変化という二重の意味構造を持つ。

（9） a. グラスから水を空ける。
b. グラスを空ける。 (川野 2017: 121)
（10） a. テーブルから皿を片付ける。
b. テーブルを片付ける。 (川野 2017: 121)

4. 問題の所在と本論文の内容

離脱動詞は A が B から位置変化するという意味を表すが、そのほか、B の状態変化も表す。しかし、各離脱動詞は、以下に示すように、構文的には異なった表れ方をしている。(11) (12) に示す「むける、はがれる」は、カラ格と結果補語

[8] この類の動詞は岸本 (2001) で挙げた「除去を表す動詞」と同類であると思われる。本論文でいう「離脱」の用語とは異なる。

のいずれも取ることができるが、(13) (14) に示す「とれる、はげる」などはカラ格もしくは結果補語の一方しか取ることができない。このように、離脱動詞であると言っても、動詞によって異なる特徴を持つと考えらえる。

(11)　a.　かさぶたが肩からむけた。
　　b.　肩の皮が赤くむけた。
(12)　a.　ポスターが壁からはがれた。
　　b.　気道の内側の皮が薄くはがれた。
(13)　a.　ボタンがシャツからとれた。
　　b.＊ボタンがボロボロにとれた。
(14)　a.＊メッキがメタルからはげた。[9]
　　b.　メタルのメッキがまだらにはげた。

なお、「むける、はがれる」はカラ格と結果補語を取れることから、位置変化と状態変化を表すと考える。前節で提示したように、先行研究によれば、壁塗り交替が起きる動詞は位置変化と場所の状態変化を表す動詞である。しかし、(17) (18) のように、「むける、はがれる」は、(15) (16) の壁塗り交替を起こす動詞と同様の格交替は起きない。先行研究では、このような現象を説明できる記述は、管見の限りでは見当たらなかった。

(15)　a.　グラスから水を空ける。
　　b.　グラスを空ける。　(川野 2017: 121)
(16)　a.　テーブルから皿を片付ける。
　　b.　テーブルを片付ける。　(川野 2017: 121)
(17)　a.＊踵から皮がむけた。
　　b.　踵がむけた。

[9] NINJAL-LWP for BCCWJ、NINJAL-LWP for TWC で確認した結果、「はげる」はカラ格を取る例は見当たらなかった。

(18)　a.　壁からポスターがはがれた。

b.＊壁がはがれた。[10]

そこで、本論文では、日本語の各離脱動詞の構文的な特徴を確認した上で、離脱動詞の内部体系を検討する。さらに、位置変化を表す移動動詞、状態変化を表す状態変化動詞との関係を考察する。

また、中国語においては、離脱動詞が一つの動詞類として分類されておらず、従来は一括して移動動詞として扱われてきた。

以下に示されるように、中国語の離脱動詞は“掉”と“V 掉”があり、意味的にはあるもの A が B から位置変化すること、B が状態変化することを表す。そして、構文的には、A と B のいずれも主語に立つことができる。

(19)　a.　兔子毛　　掉　　了。

うさぎの毛　diao　た

（うさぎの毛がぬけた。）

b.　布娃娃的头　　被　　拧掉　　了。

ぬいぐるみの頭　られる　　V（もぐ）diao　　た

（ぬいぐるみの頭がもがれた。）

(20)　a.　兔子　　掉　　毛　了。

うさぎ　diao　毛　た

（うさぎは毛がぬけた。）

b.　布娃娃　　被　　拧掉　　了　头。

ぬいぐるみ　られる　　V（もぐ）diao　た　頭

（ぬいぐるみは頭をもがれた。）

本論文では、日本語の離脱動詞に対応して、中国語にも離脱動詞が存在することを示し、その内部体系、及び移動動詞、状態変化動詞との関係を検討する。

---

[10] 「ポスターがはがれた」という場面では「壁がはがれた」は言えず、つまり離脱元が主語に立つことができないと考え、＊を付けた。地震で「壁がはがれた」といった場合には離脱物として取ることはできる。

第３章
日本語の各離脱動詞の意味分析及び離脱動詞の内部体系

1. はじめに

本章では、あるものがあるものに付着するという意味を表す自動詞の接触動詞と反義をなし、「離脱物が離脱元から離脱する」動作を表す日本語の離脱動詞を考察する。そこで、離脱動詞全体の特徴を把握するために、また、中国語の離脱動詞との対応関係を考察する基礎として、日本語の各離脱動詞の意味特徴を分析する必要がある。具体的には、離脱物と離脱元の関係、離脱事態の起因という 2 点から考察する。そのうち、離脱事態の起因は中国語の離脱動詞にとって弁別的な特徴であるため、日本語の離脱動詞にとって有意義な特徴となるのかを検討する。

本章の構成は以下の通りである。2 節で本研究の分析対象を明確にする。3 節～5 節では、離脱物と離脱元の関係、離脱の起因の観点から、また、先行研究で指摘されている意味特徴を含めて、各動詞の意味分析を行う。6 節で離脱動詞の内部体系を検討する。

2. 分析対象と比較するグループ

2.1 分析対象

本章では、具体的に「とれる、おちる、ぬける、はずれる、もげる、はがれる、むける、はげる」といった 8 語の日本語の離脱動詞の意味を分析する。それぞれの例を以下に挙げる。

（1） a. シャツのボタンがとれた。
b. シャツの汚れがおちた。
c. 瓶の栓がぬけた。
d. 車のタイヤがはずれた。
e. ぬいぐるみの足がもげた。
f. 壁紙がはがれた。

g.　みかんの皮がむけた。

h.　ベンチのペンキがはげた。

このうち、「とれる、おちる」の用法は多様であり、本研究では、(2) のように、離脱物が離脱元から離脱するという意味を表す「とれる、おちる」のみを分析対象とする。一方、(3) のような、移動に重点がある用法を表す場合は離脱動詞と見なさない。本研究では、離脱動詞は、あるものがあるものに付着する意味を表す接触動詞と反義的な関係をなすと捉え、接触動詞は、到達段階を表すのに対し、離脱動詞は離脱（出発）段階を表すと考える。しかし、(3) のような「おちる、ぬける、はずれる」は、対象物の離脱段階より、到達段階、または経過段階を表すと考えられることから離脱動詞ではなく、移動動詞とする。

（２）　a.　シャツのボタンがとれた。

b.　シャツの汚れがおちた。

（３）　a.　携帯が床におちた。

b.　彼は商店街をぬけた。

c.　彼が脇道にはずれた。

また、(4) のような例は、物の離脱動作を表さないため、分析対象としない。

（４）　a.　連絡がとれた。

b.　城がおちた。

2.2　比較するグループの設定

動詞の意味分析に際しては、1 対、または 1 グループの動詞を比較して意味分析を行うのが効果的である。従って、本論文では、離脱物と離脱元の関係により、8 語を 3 つのグループに分けて意味分析を行う。

ここでは、言い換えられるかどうかという基準で、2 つのグループを設定する。

（５）　a.　服の汚れがとれた。

　　b.　服の汚れがおちた。

（６）　a.　皮がはがれた。

　　b.　皮がむけた。

　　c.　皮がはげた。

「とれる、おちる」は、離脱元の表面に付いているものをガ格に取ることができる。(5) のように、「汚れ」を離脱物に取る際に両者の動詞は言い換えられる。「はがれる、むける、はげる」は、離脱元の表面を覆っているものをガ格に取ることができる。(6) のように、「皮」を離脱物に取る際に言い換えられる。また、(7) に示すように、「ぬける、はずれる、もげる」が取る離脱物は離脱元の表面にある物ではないという点で、別のグループに入れる。以上から、本章では、8 語を (8) に示す 3 グループに分け、グループごとに比較して意味分析を行う。

（７）　a.　瓶の栓がぬけた。

　　b.　自転車のチェーンがはずれた。

　　c.　ぬいぐるみの足がもげた。

（８）　・「とれる、おちる」

　　・「ぬける、はずれる、もげる」

　　・「はがれる、むける、はげる」

3.　「とれる、おちる」の意味分析

本節では、離脱物と離脱元の関係、離脱の起因から「とれる、おちる」を考察する。3.1 節では、「とれる、おちる」の意味分析に関する先行研究を紹介する。3.2 節では、離脱物と離脱元の関係からその特徴を分析し、3.3 節では、まず先行研究で記述される「とる」の目的が「とれる」に適合するかを確認し、次に、「とれる、おちる」の起因は自然なものでも、外力でも良いことを述べる。

3.1　先行研究

3.1.1　柴田編（1976）

柴田編 (1976)では、「おちる」を「さがる、おりる、くだる」と比較し、「おちる」が典型的な移動を表す場合を中心に論じている。「おちる」は「意図的でない」という点で「おりる」と区別され、「到達点に焦点を合わせる」という点で「さがる」と区別されている。その他、「おちる」は「重力によって移動することを表す」「直線的で急速」という特徴を持つと述べている。柴田編 (1976) で指摘された移動動詞である「おちる」の「意図的でない」「到達点に焦点を合わせる」「重力による移動」「直線的で急速」という特徴は離脱動詞である「おちる」も持つとは言いがたい。

（9）　シャツの汚れがおちた。

3.1.2　森田（1977）

森田 (1977) では、主に、「とる」について記述し、「とれる」は「とる」の関連語として扱っている。まず、「とる」については、以下のように述べている。

> 対象とする事物に作用・行為を加えて、自己側の領域にうつす。その結果、対象がその位置から失せたり、減じたりする場合と、なんら移動を生じない場合とがある。その対象とうつし方によって、種々の漢字表記が使い分けられている。　(森田 1977: 333)

そして、対象のうつし方および目的により、2 通りの種類分けがあると述べている。

まず、森田 (1977) では、対象のうつし方には三段階があるとしている。以下のように述べている。

①「B カラ C ヲとる／C ヲ E ニとる」

「眼鏡、帽子、雑草、魚、命、血、痛み、汚れ、……をとる」「料理を皿にとる」「蓋をとってあける」

事物そのものをその位置から除き、他の場所に移し動かす場合には、当然、そこから事物が一部もしくは全部消え去る。

②「C ヲとる／E ニとる」

「メモ、寸法、指紋、脈、録音、写真、言葉の意味、型……をとる」「形を画用紙にとる」「ノート、テープ……にとる」

事物そのものの位置は変えずに、また、手を加えずに、その形や内容をそっくり他にひかえる。［略］

③「C ヲとる」

ある目的から事物に手を触れ、手をつけ、その事物を操作して事を行う。

「舵、鍬、ハンドル、教鞭、指揮、事務……をとる」「手に手をとって駆け落ちする」

(森田 1977: 333)

森田 (1977) によれば、以下の (10a) のような②は「事物そのものの位置は変えず」、(10b) のような③は「事物に手を触れ、手をつけ、その事物を操作して」ということから、事物そのものの物理的な位置は変わらないと考えられる。このような用法は離脱の用法と齟齬があるため、本研究の研究対象から除外する。従って、本研究は①のみを研究対象とする。

(10) a. 形を画用紙にとる。 (森田 1977: 333)

b. ハンドルを手にとる。

次に、2 つ目の種類の分け方を見ていく。「とる」は意識としては、「事物 C を B から離して E の方へ移行させる」行為・作用であるとし、その目的から 5 つの種類が生ずるとしている。本研究では、そのうち、次のような a 類のみを離脱と見なす。b～e 類は、「税をとる」のように、すべての用法が位置変化を含むとは言えず、また位置変化を含む場合でも、「巣箱から卵をとる」のように、あくまでも手に入れるという到達段階を表すため、本研究の研究対象から除外する。

(11)　a.　B を正常にするため、B から C を除き去ることに意図がある。（意志的）

「痛みをとる」「着物のしみをとる」「雑草を取る」「猿が毛からノミをとっている」

b.　A が C を手に入れるため、B から C を一方的、強制的に持ち去る。（意志的）

「人の金をとる」「魚をとって食う」「巣箱から卵をとる」「税をとる」「トンボや蟬をとる」「猫が鼠をとる」「使用料をとる」「代金をとる」「礼金をとる」

c.　A・B 了解ずくで、または A 自身のため、B に迷惑の及ばぬ形で C を手に入れ成立させる。（意志的）

「講義をノートにとる」「写真をとる」「新聞をとる」「席をとる」「注文をとる」「客をとる」「店屋物をとる」「婿をとる」「弟子をとる」

d.　A 自身の働きかけで C を手に入れ、また、身に引き受ける。B を設定しない。（意志的、無意志的）

「朝食をとる」「栄養をとる」「仲介の労をとる」「責任をとる」「休暇をとる」「いい成績をとる」「悪い点をとる」「不覚をとる」「年をとる」

e.　A の行為・作用により結果的に C を奪い去る。（無意志的）

「かなりの場所をとる」「時間をとる」「手間をとる」

(森田　1977: 334)

また、森田 (1977) は、「とる」の関連語として扱う「とれる」は、「物がおのずと、とった状態になること (森田　1977: 334)」を表すと述べている。つまり、B に付いて “B のもの” となっていた C が、自然に B から離れる作用であるということを表すと記述している。そのような分離作用が物理的に可能な場合は「とる」①に限られ、しかも分離・脱落作用が生じるのは「C が B に付属している固体」（例えば、眼鏡のレンズがとれた）と「B に付着している事物」（例えば、痛みがとれる）などであるとしている。

次に、「おちる」について、森田 (1977) では、「ある位置（上の位置）を占めていたものが、何かの理由、他の力によってそこから離され、行き着くところ

（下端）まで一挙に移ること (森田 1977: 132)」と記述されている。そして、「おちる」には 3 つの条件があると以下のように述べている。

①ある位置にあったものが、そこから離れ去る作用。
②そこを離れてから（引力などによって）行き着くところまで移動する作用。（主として上から下へ）
③それが結局のところまで行き着くこと。 (森田 1977: 132)

さらに、この 3 つの段階「離脱→移動→到達」のどこを強調するかで「おちる」に種々の意味が出てくるとされる。①には 2 つの意味があると以下のように記述している。

> “ある位置から離れ去る作用”には二つある。一つは、そのもの全体がその位置（上位）を離れ、落下する場合、いま一つは、全体から一部が分かれて離脱する場合である。
>
> 「二階から落ちる」「砂漠に日が落ちる」「滝が落ちている」「城が落ちる」「都を落ちる」「人手に落ちる」などは前者の全体動作。“上から下へ”ないしは“上位者から下位者へ”の方向性がある。到達点は「……に」で示される。
>
> いま一つの部分離脱は、その事物が付着していた本体から離れ取れる作用。
>
> 「歯、色、ペンキ、汚れ、匂い、香り、憑きもの……が落ちる」
>
> ［中略］
>
> 事柄によってそれぞれ“抜ける、取れる、欠ける、漏れる”といった語に置き換えられる。それが離れおちることによってマイナス状態になる場合が多い（「汚れ」などプラス状態もあるが）。こうした「落ちる」は①の離脱のみが強調されて、③の到達点は意識しない。「……に落ちる」と「に」格を立てることができない。
>
> (森田 1977: 133-134)

上記のように、「おちる」は「部分離脱」を表す場合には、事柄によってそれぞれ「抜ける、取れる、欠ける、漏れる」といった語に置き換えられると述べている。「とれる、おちる」の意味には重なる部分があることについては本研究も同意する。しかし、森田 (1977)では、「とれる、おちる」を個別に記述し、比較していないため、両者の共通点と相違点が明らかになっていないと考えられる。

3.1.3 Benom (2012)

Benom (2012) は、意志性、離脱物と離脱元の性質、動作の様態などの幾つかの側面から、「とれる」と「はずれる」を考察している。「とれる」は "exit a spatial relationship by overcoming resistance (Benom 2012: 110)" と述べている。「とれる」に関する特徴は以下のようにまとめられる。

・Caused motion (such as a cup on a table, *toreru* is permitted to be used with caused motion.)
・Unanimacy of Figure (with a toy spider that moves spontaneously falls, *toreru* is permitted to be used.)
・Sticky attachment (It was accepted significantly more often when flue was applied to both the ladder and the shoe.) (Benom 2012: 113-114)

しかし、Benom (2012) でも "*toreru* involves preference for sticky attachment… However, it is not clear if it is the fact of sticky attachment that is motivating this, or simply the fact that separation involves overcoming resistance (Benom 2012: 120)." と述べられているように、何が "sticky attachment" を起こすのかという点は明確ではない。また、Benom (2012) では「とれる」が外力により行われる動作であると指摘しており、森田 (1977) とは異なった主張をしている。

3.2 離脱物と離脱元の関係

本節では、「とれる、おちる」が取る離脱物をまとめる。まず、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」で検索し、離脱動詞である「とれる、おち

る」が取る離脱物を頻度の上位順で挙げる[11]。

(12)　とれる：疲れ、痛み、汚れ、匂い、熱、かさぶた、染み、疲れ、角質、脂肪、ボタン、毛、底、黒ずみ、歯…

(13)　おちる：葉、汚れ、瓦、葉っぱ、木の葉、髪の毛、枝、髪、油、毛、粉、羽根、枯れ葉、メイク、入れ歯…

(12) (13) を見ると、(14) (15) のように、両語が言い換えられる場合が存在する。一方で、(16) のように、言い換えられない場合もある。

(14)　a.　汚れがとれた。
　　b.　汚れがおちた。

(15)　a.　毛がとれた。
　　b.　毛がおちた。

(16)　a.　疲れがとれた。
　　b.＊疲れがおちた。

そこで、言い換えられる離脱物と言い換えられない離脱物に分けて整理し、さらに、森田 (1977) の記述を参考にし、離脱元に「付属している固体」と離脱元に「付着している事物」で分けると以下のようになる。

(17)　言い換えられる離脱物：

　　a.　離脱物が離脱元に付属している固体：

　ボタン、毛、歯、髪の毛、皮、入れ歯、詰め物、取っ手、かさぶた…

　　b.　離脱物が離脱元に付着している事物：

　汚れ、染み、角質、匂い、濁り、メイク、色、垢、化粧…

---

[11] 本論文では、検索システムとしては、NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) を用いた。
http://nlb.ninjal.ac.jp/
用例が少ない場合は、NINJAL-LWP for TWC (NLT) を用いた。
http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/

(18)　言い換えられない離脱物（「おちる」が取れない）：

疲れ[12]、粗熱、痛み、疲労、気疲れ、しびれ、炎症、痒み、冷え、麻痺…[13]

(17a) に挙げた離脱物は、固体であり[14]、離脱元に付属するものである。一方、(17b) の離脱物は、まとまった形を持たず、離脱元に付着するものである。(18) は、離脱元の中に滲み込んで、すでに離脱元の一種の状態になったものであり、形を持たない物である。

以下では、言い換えられる離脱物を中心に取り上げ、まず、離脱元に付属している固体という離脱物を取る場合を見ていく。

(19)　a.　歯の詰め物がとれた。

　　b.　歯の詰め物がおちた。

(20)　a.　ボタンがとれた。

　　b.　ボタンがおちた。

(19) (20) のように、両語ともこのような離脱物を取ることができるが、解釈の違いは多少ある。「とれる」を用いることで、「歯の詰め物、ボタン」が「歯」や「シャツ」から離脱するのに加え、「歯、シャツ」の「詰め物、ボタン」がなくなったという状態変化も表す。一方、「おちる」の場合は、「とれる」と同様の解釈は取れないというわけではないが、「詰め物、ボタン」が「床」などにおちたという解釈も可能である。この場合は、離脱元である「歯、シャツ」の変化を含まず、(21) の文の「携帯」と同様に、「おちた」ことで、「詰め物、ボタン、携帯」以外の他の物、つまり離脱元に何の影響も与えていないと考えられる。本研

---

[12] 「疲れがとれた」のような例は「疲れ」が「体」から離脱すると捉えることも可能であり、「疲れ」が「消えた」のように消滅と捉えることも可能である。このため、このような用法を周辺的なものと見なす。そこで、離脱動詞と移動動詞、状態変化動詞との関係を考察するにあたり、このような周辺的なものを除いて考察する。また、離脱動詞と消滅動詞との関係については今後の課題とする。

[13] 「つきものがおちる」の例が存在するが、慣用句的な用法であると考え、動詞の意味を記述する際に除外する。

[14] 森田 (1977) の「固体」という言い方を使用するが、「固体」をあるまとまった形を成している物であると考える。

究では、このような解釈を取る「おちる」を (21) と同様に移動動詞と捉える[15]。

(21)　携帯がおちた。

上記から、離脱元に付属している固体である離脱物は、離脱動詞である「とれる、おちる」のいずれも取ることができるが、「おちる」の場合には、移動動詞と解釈される場合もある。

次に、離脱物が離脱元に付着しているものである場合を見ていく。

(22)　a.　汚れがとれた。
　　b.　汚れがおちた。

(22) は離脱動作を表すにあたって、意味の差がほぼないと思われる。「汚れ」が離脱元から位置変化することと離脱元がきれいになるという状態変化を表す。この場合は、両語の意味が重なる部分である。ただし、両語は言い換えられるが、NLT を確認した結果、それぞれ「とれる」は 180／28269、0.6%（汚れがとれる／～がとれる）、「おちる」は 471／30322、1.5%（汚れがおちる／～がおちる）であり、頻度には大きな差が見られなかった。しかし、「汚れがおちる」と「汚れがとれる」の 100 例を確認したところ、「汚れの種類」により差が多少あることがわかった。「歯」や「毛穴」のような「汚れ」を取る用例の数は、「とれる」が 35 件、「おちる」は 18 件であり、「とれる」が好まれる。一方、「床」のような「汚れ」を取る用例の数は、「とれる」が 16 件、「おちる」は 29 件であり、「おちる」が好まれる。このように、両語はいずれの種類の「汚れ」も取ることが可能であるが、それぞれ取る離脱物に傾向があるように思われる。これは、Benom (2012) で述べられているように、語は競合関係にあり、一方が多用されると他方の頻度が低くなるという指摘に沿うと考えられるが、本論文では示唆に留めたい。

[15] 離脱動詞と移動動詞の文法的な振る舞いにおける差異を第 4 章に述べる。ここでは、意味的な解釈では違いがあることを示すだけに留める。

3.3　離脱動作

本節では、まず、森田 (1977) が指摘した「とる」の目的が「離脱元を正常にする (森田 1977: 334)」ことにあることが「とれる」に適用できるかを検討する。次に、離脱の起因を考える。

3.3.1　離脱動作の目的

森田 (1977) は、「とる」は、「事物 C を B から離して E の方へ移行させる (森田 1977: 334)」行為・作用であり、その目的からいくつかの種類が生ずると述べている。そのうち、以下は離脱動作の場合である。

> B を正常にするため、B から C を除き去ることに意図がある。(意志的)
> 「痛みをとる」「着物のしみをとる」「雑草をとる」「猿が毛からノミをとっている」　(森田 1977: 334)

森田 (1977) は、「とる」動作の目的が「離脱元を正常にする」ことにあると述べている。以下の (23) (24) は、動作の目的が、離脱元を正常にすることであり、離脱物がなくなると離脱元が正常に戻る。一方、(25) (26) のような、離脱物がなくなると離脱元が好ましくない状態になる場合は、動作の目的は離脱元を正常にすることではない。

(23)　週 2〜3 回ピーリングしているうちに、不要な角質が取れ、肌が生まれ変わり白くなることも期待できますよ。
(Yahoo!知恵袋、2005、コスメ、美容)

(24)　また上気道のたるみや下顎のずれによって、顔もゆがんで見えるようになります。負担がかかりますから眠りも浅くなり、疲れが取れにくくなります。閉じて寝る習慣をつけましょう。
(Yahoo!知恵袋、2005、健康、病気、ダイエット)

(25)　ボタンが取れたので、服に付けたいです。

(26)　それで、日焼け止めや化粧が取れて、日焼けして、結局はシミになってるんです。　(Yahoo!知恵袋、2005、コスメ、美容)

このように、(23) (24) のような、「角質、疲れ」など、なくなると離脱元が好ましくなる場合は、離脱の目的は離脱元を正常にすることにある。ところが、離脱物が (25) (26) の「ボタン、取手」のような、離脱元の付属品、又は「化粧」のような、なくなると離脱元が好ましくなくなる場合は、当然目的は離脱元を正常にすることではない。従って、森田 (1977) の提示している「とる」動作の目的が離脱元を正常にすることにあるという特徴は、離脱物の性格によると考える。

3.3.2　離脱事態の起因

動詞が表している事態という観点から (23) ～ (26) を再び考えると、(23) (24) のような、離脱物がなくなると離脱元が好ましくなる場合は、離脱物が何かの外力で離脱すると考えられる。例えば、(23) では、ピーリング治療法を使い、離脱物を離脱させる事態を表している。一方、(25) (26) の場合は、離脱物が自然に離脱する事態であると考えられる。このように、「とれる」が表す事態は、「自然に離脱する」もしくは「外力により離脱する」であると考える。同じ観点から「おちる」を検討すると同様の結果になる。

(27)　化粧がおちた。
(28)　シャツの汚れがおちた。

(27) は、顔を洗って、その結果が「化粧がおちた」とも言え、一日経って、自然におちた場合にも言える。つまり、自然的なものによる離脱か外力による離脱かのいずれの場合にも使われる。(28) も同様である。「洗濯機で洗う」のように、外力を利用し、離脱動作を引き起こす場合でも、長い時間経って「汚れ」がだんだん薄くなり、自然におちたというような場合でも言える。

3.4　まとめ

両語が取る離脱物の特徴と離脱の起因を考察した結果、以下の 3 点にまとめる。

(29)　「とれる、おちる」のいずれも、離脱元に「付着している事物」を取ることができ、両者は言い換えられるが、動詞を選択する際に一定の傾向がある。

(30)　「とれる」は、離脱元に「付属している固体」と「一種の状態」を離脱物として取ることができる。

(31)　両語は自然的なものによる離脱でも、外力による離脱でも表せる。

4.　「ぬける、はずれる、もげる」の意味分析

本節では、離脱物と離脱元の関係、離脱の起因から「ぬける、はずれる、もげる」を考察する。4.1 節では、「ぬける、はずれる、もげる」の意味分析に関する先行研究を紹介する。4.2 節では、先行研究で記述された意味特徴を検討し、離脱物と離脱元の関係から分析する。4.3 節では、先行研究で指摘される「はずれる」のマイナス性を確認し、「ぬける、はずれる、もげる」の起因は自然なものでも、外力でも良いことを述べる。

4.1　先行研究

4.1.1　柴田編 (1976)

柴田編 (1976) は、「もぐ、ちぎる、むしる、つむ、ぬく」について対象物の違いを中心に考察している[16]。柴田編 (1976) では、「ぬく」については、以下のように述べている。

> 「ぬく」動作は二つの物体が関与している。[略] 両者を仮に〈容器〉、〈内容〉と呼ぶと、ヌク動作は簡単に言えば、容器から内容を引き出すことである。内容物が細長い形をしているときは力はその軸の方向に加えられる。道具には限定がない。　(柴田編 1976: 153-154)

[16] 本研究は、このうち「ちぎる」「むしる」「つむ」を離脱動詞とみなす。「ちぎれる」は「紙がちぎれる」のような、分離動作であり、離脱動作と言いにくい場合が多いため、除外する。

また、「引き出す」と比較し、「ぬく」は「完全分離」という特徴を持つとしている。さらに、「ぬく」について、「容器と内容が本来一体となって一つの完全な構成体をなす場合について用いられるらしい (柴田編 1976: 154)」と述べている。そして、「ぬく」は容器と内容が本来一体となって一つの完全な構成体をなす場合に用いられるという点を確かめるには転用法を吟味してみるのが有効であると述べている。例えば、「朝食をぬく」は 1 日 3 食という食事体系の一部を省くという意味を表し、「塩漬の魚の塩をぬく」は、魚の中に深く入り込んでいるものを取り出す場合で、容器と内容は非常に緊密に結びついていると述べている。

また、「競争相手をぬく」「城を守り抜く」など、「限界を突破する」という意味を表すことから、「ぬく」は「完全分離」を表すと述べている。

「もぐ」については、柴田編 (1976) では、「もぐ」の離脱元と離脱物が大きく 2 つのグループに分けられると指摘している。

・柿· リンゴ· きゅうり· バナナ· 梅· 花· 葡萄の房· ボタン
・指· そで· 人形の足 (柴田編 1976: 149)

1 つ目は、「大きな本体と細い部分でつながっているもの」、2 つ目は「本体（指の場合は掌、袖の場合は胴の部分）につながる部分は先端部分よりむしろ太いくらいではあるが、形の上で本体からはっきり独立した別個の部分をなしているもの」であると述べている。つまり、「もぐ」の対象物は本体につながりながらも形の上で独立の存在であると述べている。

4.1.2 森田 (1977)

森田 (1977) は、「あたる」の反義語として、「はずれる」を記述し、「予想、予報、予言、山、宝くじ･･･があたる／はずれる」という意味を表す「はずれる」を中心に述べている。

4.1.3 國廣編 (1982)

國廣編 (1982) は「はずれる」を「はなれる」と比較し、「はずれる」の用法は、大きく以下の 2 つの場合に分けられるとしている。

(32)　a.　すでに場所に固定していたものが離れる。

（例：ボタンがはずれる。）

b.　場所に固定することが期待されていたのみで、結局固定しない。

（例：きみの行いは常識をはずれている）

(國廣編 1982: 32-33)

さらに、(32) から「はずれる」の意味が〈物が固定していることが期待されている場所に固定していない状態になる〉であると述べている。詳しくは以下のようになる。

> (1)［=(32a)］(2)［=(32b)］は「固定が一度は実現している」、「固定が一度も実現しない」という点で大きく相違している。しかし、結果的状態の段階に焦点を合わせてみると、両方共、物が場所に固定していない点では一致している。ハズレルがその「結果状態」を表わす動詞であると考えるならば、その本質的意味を一つにまとめて、〈物が固定していることが期待されている場所に固定していない状態になる〉とすることができる。
>
> (國廣編 1982: 32-33)

4.1.4　杉本 (1983)

杉本 (1983) は、國廣編 (1982) が記述していた「はずれる」は〈物が、固定していることが期待されている場所に固定していない状態になる〉の中の「期待されている」という要素が必要ではないと述べ、「はずれる」の意義素を〈あるものがあるもの・場所に固定されていない状態になる〉と記述している。

そして、杉本 (1983) にも述べられているように、どの範囲を「固定」と定義するか、どの範囲内を「近接、接触」と定義するかはまだ検討すべき余地がある。

4.1.5　国広 (2006)

国広 (2006) は、現象素的な考え方を導入し、「はずれる」の分析を行っている。国広 (2006) は、「はずれる」を大きく「基本移動用法（静止対象物の場合）」「派生移動用法（移動対象物の場合）」「時間的派生用法」という 3 つの用法に分

けている。詳しくは以下のようである。

・基本移動用法

「はずれる」という出来事の背後にある現象素は三つの要素からなっている。中心となる対象物は対象格として捉えられるので、P で表わす。対象物は起点を離れてある位置、着点に達する。

(国広 2006: 188)

この用法が下の図で示される。例文としては、「入れ歯が外れた」などが挙げられる。そして、国広 (2006) は、起点が自明でない場合は、文型が「P ガ S ヲ／カラ V」(S＝Source) となり、文型が「P ガ V」である場合は、起点が表現されていないが、それは対象物の性質と動詞の意味から容易に推定されるためであると考えられると述べている。

図 1 「はずれる」の現象素

・派生移動用法

これは対象物 P が起点 S を目標として進んで行く場合で、P は途中で進むべき進路から徐々に離れてある時点で着点 G (Gold) に達する。P が G に達した結果段階だけを見るならば、S にある（＝達する）べき物が G の位置に移動していることになるので、本質的には図 1 と同じということになる。

(国広 2006: 191)

「弾がはずれた」、「弾が急所をはずれた」、「宇宙船は軌道からはずれた」などが、この用法の例である。

・時間的派生用法

移動対象物の場合は P の空間移動（および時間経過）が加わったが、その同じ派生的現象素がさらに時間的移動に派生していく場合がある。［略］この場合の対象物 P は予想のたぐいの心的内容である。この心的内容は未来に属するものであり、「予想・当て・ねらい・期待・予報・予測・予言・思惑・目算」などで表現される。

(国広 2006: 192)

派生的現象素は本質的には図 1 と同じである。「あてがはずれた」、「予想がはずれた」などが、この用法の例である。

4.1.6 Benom (2012)

Benom (2012) は、「ぬける、とれる、はずれる」を比較しながら 3 語の意味特徴を以下のように指摘している。

(33) ぬける：to exit from an IN relationship, broadly construed, involving tight fit.
とれる：to separate by overcoming resistance (Force Dynamics).
はずれる：to separate by “unlocking”. (Benom 2012: 124)

Benom (2012) は「ぬける」に関しては、まず、TRPS (Topological Relations Picture Series) を用いて、離脱動作を行う前に二つのものが IN 関係にあるという特徴が「むける」にとって有意義であると指摘している。そして、「指輪」が「指」とぴったり合う場合は「ぬける」を使用できるが、そうでない場合は言えないとし、“a tight fit before the separation event（ぴったり合う）” という特徴も必要であると指摘している。さらに、「ぬける」は、“Figure and Ground must be easily cognizable, and therefore that the shape of the Ground must be maintained, even after the event.” という特徴も持つとしている。(34) は 1000 人から抜けるという場合には使用できるが、18 人から抜ける状況では用いることができない。これは、18 人であると、10 人もしくは 15 人が抜けた後、“Ground” は 8 人もしくは 3 人のみ残され、認識しにくくなる (no longer easily conceptualizable as a larger) た

めであるとしている。(35) に関しては、一般的には自然であるが、離脱動作した後、瓶の首が壊れた場合 (if the separation event inbolbed the neck of the bottle breaking) は言えなくなるとしている。これは離脱後に、“Ground” の形が崩れたため、(34) と同様に認識しにくくなると説明している。

(34)　みんなすごくよかったけど、10 人か 15 人抜けないといけない。

（Benom 2012: 113　英語表記を日本語表記に改めた）

(35)　栓が抜ける。

しかし、(36a) のような実例があるため、“a tight fit before the separation event” という特徴は「ぬける」にとって必要ではないと考えられる。また、(36b) のように「底が抜ける」という事柄は、必ず “Ground” の形が崩れることを意味するが、自然である。このため、”Figure and Ground must be easily cognizable, and therefore that the shape of the Ground must be maintained, even after the event.” という特徴も検討する余地があると考える。

(36)　a.　ジャストサイズで買ったはずの指輪がゆるくなった…。ゆるくてまわる、<u>抜けてしまう</u>くらいぶかぶかの指輪をなんとかしたい！

(https://lamire.jp/49256)

b.　瓶／グラス／箱　の底がぬけた。

また、Benom (2012) は、「とれる」と比較しながら、「はずれる」の意味特徴を考察し、(33) に挙げた特徴のほかに、(37) に示される特徴も適用すると指摘している。その中、「はずれる」も “Caused vs. Spontaneous motion” と関係するとしているが、明確な説明が見当たらない。そして、「靴底が完全にはずれた」が言えるため、(36) と同様に “The shape of the Ground and/ or relationship between Figure and Ground must be maintained” は必要ではないと考えられる。

(37)　その他の意味特徴

-Caused vs. Spontaneous motion (all three verbs)

-The shape of the Ground and/ or relationship between Figure and Ground must be maintained, even after the event (all three verbs)

-Animacy of Figure (*toreru* and *hazureru*)（両語とも無生物）

-Animacy of Ground (*toreru* and *hazureru*)（両語とも無生物）

4.2　離脱物と離脱元の関係

本節では、「ぬける、はずれる、もげる」が取る離脱物を整理する。以下では「ぬける、はずれる、もげる」の順に、先行研究を検討し、それぞれが取る離脱物の特徴を述べる。

4.2.1　「ぬける」について

NLB から、離脱動詞である「ぬける」[17]の離脱物になるものを、頻度の上位順で挙げる。

(38)　ぬける：空気、歯、髪の毛、毛、底、髪、水分、疲れ、色、乳歯…

(38) に挙げている離脱物は、「歯、毛」のような、離脱元の構成部分であるものもあれば、「空気、疲れ」のような、離脱元の構成部分ではなく、何らかの作用で、離脱元に入り込んでいたものもある。

Benom (2012) では、「ぬける」の意味特徴は、“to exit from an IN relationship” であると指摘している。そして、IN から ON までの空間関係を連続体として取り上げ、「ぬける」が使える範囲を記述している。空間関係と「ぬける」の使用に関しては、以下のように説明している。

[17] 「ぬける」は「列車がトンネルから抜けた」のように、典型的な移動動詞の用法がある。この場合は接触動詞と反義ではなく、「トンネル」の状態変化を含まないため、離脱動詞と捉えない。

(39)　「ぬける」が使用できる空間関係

Inclusion eg: Apple in bowl

Partial inclusion eg: Flowers in vase

Pierces through eg: Stick in apple

Impaled/ spitted on eg: Apple on stick

Encircling with contact eg: Ribbon around candle

(40)　「ぬける」が使用できない空間関係

Point-to-point attachment eg: Apple on branch

Fixed attachment eg: Doorknob on door

Hanging over/ against eg: Picture hanging on wall

Clingy attachment eg: Spider on ceiling

Marks on a surface eg: Image on postage stamp

Support from below eg: Cup on table

柴田編 (1976) は、「ヌクは、容器と内容が本来一体となって一つの完全な構成体をなす場合について用いられるらしいということである (柴田編 1976: 154)」と述べ、「塩漬けの魚の塩をヌク」のような場合は、魚の中に深く入り込んでいるものを取り出すという点から、容器と内容は非常に緊密に結びついていると記述している。これに従えば、以下の (41) の「栓」と「瓶」は「緊密に結びついて、一体化している」と考えられ、そのためにこれらの文が言える理由が説明できる。すなわち、柴田編 (1976) が指摘している「一体化」は「ぬける」の本質的な意味特徴であると考える。(38) に取り上げた離脱物は、「歯、毛」のような、離脱元の構成部分であるものもあれば、「空気、疲れ」のような、離脱元の構成部分ではなく、何らかの作用で、離脱元に入り込んでいたものもあるが、いずれも離脱元への一体化とみなすことができるものであると捉えられる。

(41)　瓶の栓がぬけた。

(42)　a.　風船の空気がぬけた。

b.　足の疲れがぬけた。

4.2.2 「はずれる」について

NLT[18]から、離脱動詞である「はずれる」の離脱物になるものを、以下のように頻度の上位順で挙げる。

(43) はずれる：チェーン、ボタン、ふた、板、カバー、ひも、タイヤ、前輪、瓦、車輪

まず、「はずれる」と「ぬける」の離脱物（具体物の場合）を比較してみると、(44) ～ (46) のように、固体、液体、気体のいずれも「ぬける」の離脱物になれるのに対し、(47) ～ (49) のように、「はずれる」は固体しか離脱物になれない。

(44) 二階へテレビを見に人が集まり過ぎて床板が抜けるという事件が報道された頃である。 (能村庸一著 『実録テレビ時代劇史』、1999、778)

(45) 内服薬、耳鼻科で通気治療をします。 水が抜けるまでの期間は、急性中耳炎より長く、1ヶ月～2ヶ月掛かります。
(Yahoo!知恵袋、2005、健康、病気、ダイエット)

(46) 一度、沸騰させることで水の中に含まれる空気が抜け、不純物が少なくなっているから。
(Yahoo!知恵袋、2005、料理、グルメ、レシピ)

(47) 艇庫の底板がはずれて、パトロール艇が海中にむかってカタパルトで打ち出されたのだ。 (福島正実作 『フェニックス作戦発令』、1986)

(48) ＊水がはずれた。

(49) ＊空気がはずれた。

また、國廣編 (1982) では、「はずれる」の本質的な意味は、物が固定していることが期待されている場所に固定していない状態になることとされている。一方、杉本 (1983) では、「はずれる」の意義素をあるものがあるもの・場所に固定

[18] NLB の例は少ないため、NLT を参考にした。

されていない状態になると記述している。さらに、Benom (2012) は、「はずれる」の意味のポイントは “unlocking（固定していない状態になる）” ということにあると述べている。以上の研究からは「固定された状態から固定されていない状態へ」という点では一致していると考えられる。本研究では、NLT の用例を確認した結果、この記述に同意する。つまり、「はずれる」の離脱物になるものは離脱する前に、離脱元に固定された状態にある。言い換えれば、「はずれる」の離脱物は事前に固定される必要がある。このことから考えると、「はずれる」が固体以外の離脱物を取れないのは、液体や気体は固定できる物であると想定しにくく、どこかに固定することには無理があるためと考えられる。

4.2.3 「もげる」について

NLT から、「もげる」の離脱物になるものを以下のように頻度の上位順で挙げる。

(50) もげる：首、羽根、足、手足、指、脚、頭、片足、片手、翼、触角…

これらの離脱物を一見すると、「首、足」のような、体の一部である物がほとんどであり、そのほか、「（飛行機の）翼」のような離脱元の構成部分であるものもある。これらは全て離脱元の一部分であると捉えられる。しかし、離脱元の一部分のみが「もげる」の離脱物となると考えた場合、以下の例文のように、説明できない現象が存在する。

(51) a.＊瓶の栓がもげた。
b.＊鍋の蓋がもげた。

(51) の離脱物はいずれも離脱元「瓶、鍋」の構成部分であると考えられるが、「もげる」を使うと不自然である。それは、(51) の離脱物と比較するとわかるように、「もげる」が要求する離脱物は常に離脱元に繋がっている連続体でなければならないためである。そして、以下のように、(52a) は言える一方で (52b) が言えないのは、離脱元と独立していないためであると考えられる。この点に関

しては、(53) のように、柴田編 (1976) も同様の指摘を行っている。以上から、「もげる」は離脱元に繋がっている連続体でありながら、それとは独立しているものを離脱物に取る。

(52)　a.　木の枝がもげた。

　　b.＊枝の一部分がもげた。

(53)　1 つ目は、大きな本体と細い部分でつながっているもの、2 つ目は本体（指の場合は掌、袖の場合は胴の部分）につながる部分は先端部分よりむしろ太いくらいではあるが、形の上で本体からはっきり独立した別個の部分をなしているものである。　(柴田編 1976: 149)

4.3　離脱動作

本節では、まず、「はずれる」に関する先行研究で指摘されるマイナスのニュアンスを検討し、この特徴は離脱物の性格から導き出される二次的な特徴であることを示す。次に、「ぬける、はずれる、もげる」が表す離脱動作の起因を検討する。

4.3.1　離脱動作のマイナス性

離脱動作はあるもの A が B から離脱する動作を表すため、基本的には、離脱することは、B の何かが「減る」ことなり、好ましくない状況が多いと考えられる。ただし、このことが動詞の意味として必要であるかどうかは一概には言えず、その点について検討を行う。まず、「はずれる、もげる」の離脱動作は好ましくない場合が多く見られる。例えば、國廣編 (1982) は、「はずれる」が、「期待されている場所から離れる」という意味を表し、「マイナス」のニュアンスを伴うとしている。

(54)　今日は朝からチェーンがはずれて遅刻･･･。　(Yahoo!ブログ、2008)

(55)　本棚の仕切り板がはずれた。

(54) (55)は、「はずれる」が好ましくない離脱動作を表すものである。一方、「はずれる」は好ましい離脱も表すことができる。例えば、以下の (56) は、ギプスは患者の身体の一部分を固定、保護する機能を果たすが、体が良くなり、ギプスがもう必要なくなった時にも「はずれる」と言える。

(56)　ギプスがはずれた。

しかし、「はずれる」が好ましい事態を表す場合より、好ましくない事態を表す場合が圧倒的に多い。これはなぜかというと、「はずれる」の離脱物が離脱元に固定されるものであるためと考える。このような離脱物は、元々離脱元の一部分ではないが、後から離脱元に固定されるものであり、一般的には何らかの機能を果たすために、離脱元に固定すると思われる。そのため、離脱すると望ましくない状況になる。このように、「はずれる」が好ましくない状況を表す傾向があるのは離脱物の特徴から導き出される二次的、派生的な特徴であると考える。

4.3.2　離脱事態の起因

この節では、「ぬける、はずれる、もげる」が自然に離脱する事態を表すか、外力によって離脱する事態を表すかという点を検討する。以下の例から考えると、「ぬける、はずれる、もげる」は、いずれの事態も表現可能である。

(57)　髪がぬけた。
(58)　チェーンがはずれた。
(59)　人形の足がもげた。

(57) は、髪が自然にぬけたという事態も、髪を強く梳かして、何本かぬけたという外力によって離脱させる事態も表せる。(58) (59) の「はずれる、もげる」の場合も同様である。(58) は、自転車が壊れて、チャーンが自然に外れたという自然な事態を表すことも、誰かに引っ張られてはずれたという外力によって引き起こされる事態を表すことも可能である。(59) は、人形が古くなり、すでにボロボロになり、足が自然にもげたという場合でも良く、「もぐ」動作により、

「もげた」という場合でも良い。このように、「ぬける、はずれる、もげる」は自然な事態でも、外力によって離脱させる場合でも表すことができる。

また、4.3.1 節で議論した「好ましくない」という特徴は離脱の起因とも関係がある。(57) ～ (59) に関しても、自然に離脱する場合は、好ましくない事態を表すのがほとんどであるのに対し、外力により離脱する場合は、好ましい事態を表す場合が多い。例えば、「チェーン」を引っ張ることにより、「チェーン」を離脱させるという場合は、好ましいことであるように考える。これは、あるものに対し動作を行う場合は、その物を変化させるということが望ましいことであることが普通であるためと考えられる。この点については、前に挙げた例からもうかがえる。

(60)　今日は朝からチェーンがはずれて遅刻･･･。

(61)　ギプスがはずれた。

(62)　髪がぬけた。

好ましくない場合である (60) は、自然に離脱する事柄であるように考える。一方、好ましい場合である (61) は、外力が存在する事柄である。ただし、(62) のように「髪」をきれいにするため「梳かす」という動作を行い、つまり、「髪をぬく」ことを意識していないのに、「髪が抜けた」という結果をもたらす場合は、「外力」と「好ましい」という二つの特徴は結びつかない。このように、外力が意図せずに離脱を引き起こす場合以外は、「外力による離脱」と「好ましい事態」、「自然な力による離脱」と「好ましくない事態」は相関する傾向があると考える。

4.4　まとめ

3 語が取る離脱物の特徴と離脱の起因から考察した結果、以下の 2 点が結論付けられる。

(63)　「ぬける、はずれる、もげる」が取る離脱物

「ぬける」: 離脱元と一体化したもの。

「はずれる」: 離脱元に固定されたもの。

「もげる」: 離脱元に繋がっている連続体でありながら、それとは独立しているもの。

(64)　この 3 語が表す離脱動作の起因は自然な離脱でも良く、外力による離脱でも良い。そして、事態の「好ましさ」と離脱の起因は関係があると言える。

5.　「むける、はがれる、はげる」の意味分析

本節では、離脱物と離脱元の関係、離脱の起因から「むける、はがれる、はげる」を考察する。5.1 節では、3 語の意味分析に関する先行研究を紹介する。5.2 節では、3 語が取る構文を確認し、5.3 節では、離脱物と離脱元の関係から 3 語を分析する。5.4 節では、まず先行研究で記述された「はがす、むく」の焦点が「はがれる、むける」の意味特徴であるか確認し、次に、3 語が表す離脱動作の起因は自然なものでも、外力でも良いことを述べる。

5.1　先行研究

他動詞「はがす、むく」に関する記述は、宮島 (1972)、柴田編 (1976)、鈴木 (1981) が挙げられる。宮島 (1972) は「ぬぐ／はぐ／むしる／むく／はがす／そぐ、けずる」を、対象の特徴の点から考察している。柴田編 (1976) は、「めくる、まくる、はがす、はぐ、むく」を「何か薄手のものを、指先か手を使って本体から分離する」という行為を表す動詞として挙げ、そのうち、「はがす、はぐ、むく」を比較し、行為それ自体、対象物になる物、対象物の状態などの観点から考察している。鈴木 (1981) は、主に「はぐ」と「そぐ」を考察し、「むく、はがす」については、関連語として触れている。以下では、離脱物の種類、動作の焦点という 2 つの観点から、宮島 (1972)、柴田編 (1976)、鈴木 (1981) の分析の共通点と相違点を整理する。

5.1.1　「むく」について

宮島 (1972) は、「むく」の対象は、あるものの表面に近いところに、薄くあるという点では範囲が限られ、そして、その表面に密着しているものでなければならないと述べている。さらに、肉や骨のように内部的なものは「むく」の対象物

になれないと指摘している。

柴田編 (1976) は、「むく」の対象物の種類を以下のように列挙している。また、「むく」は本体の一部としての表面を分離することであると述べている。

ムク： ①木の皮
②芋・玉ねぎ・豆などの野菜・りんご・栗などの果物の表皮
③ゆで卵・貝の殻
④指・ひざの皮
⑤キャラメルの皮・鮨を包んだ笹の葉
⑥歯・目（玉） (柴田編 1976: 144)

鈴木 (1981) は、「はぐ」の対象物を考察し、本体との関係を以下のように述べている。さらに、これらのものは、「むく」という表現も使われるとしている。

「はぐ」の対象物は、本体の一部ではあるが密着してはいないもの、
(40) エビの殻をはぐ。
もしくは、対象物の部分だけ離れやすい状態になっているもの、
(41) みかんの皮をはぐ。
(42) バナナの皮をはぐ。
あるいは、その部分を離すことが通常の用いられ方であるもの
(43) リンゴの皮をはぐ。
(鈴木 1981: 26)

本論文では、「離脱元と離脱物の一体化」を「密着」と規定し、この点に関しては、NLT の用例から「むける」の離脱物を考察し、宮島 (1972) に同意することを述べる。しかし、宮島 (1972) は、「表面に近いところ」や「薄くある」などで「むく」の対象物を記述しているが、どのぐらい近いか、薄いかについては、説明を与えていない。また、「近い」「薄い」などはある参照物と比べて初めて言えると思われるが、何と参照するのかは明確に記述されていないため、より詳細な記述が必要であると言える。

5.1.2 「はがす」について

宮島 (1972) は、「はがす」は、密着しているものをはなすという点で、「むく」に近いとし、「むく」の場合は、「かなりの面積をおおっているもの」について言うのに対し、「はがす」は、「わずかの面積しか占めていない」ものについても言えると指摘している。

柴田編 (1976) は「はがす」の対象物になるものを以下のように列挙している。

ハガス：①こうやく・障子紙・パスター・切手・テープなど
②木の皮・たけのこの皮
③爪・肉
④ペンキ・塗料
⑤屋根の瓦
⑥布団・着物
⑦仮面 (柴田編 1976: 144)

「はがす」の対象の状態は、〈くっついて（くっつけて）ある〉状態であると述べている。さらに、朝子供を起こす際に、「布団をはがす」という言い方ができるのに対し、「布団をむく」は言えないという現象を指摘しているが、「はがす」「むく」の対象の明確な違いについて述べていない。

5.1.3 離脱動作の焦点

「はがす」という動作の焦点について、宮島 (1972) と柴田編 (1976)、鈴木 (1981) は食い違いがある。宮島 (1972) では、「はがす」の焦点は、取り去るということよりも、密着している物を引き離す点にあると指摘している。柴田編 (1976) は、宮島 (1972) と異なり、「はがす」が、「本体から完全に分離・除去する行為で、焦点が〈除去する〉ことにある (柴田編 1976: 140)」と述べている。鈴木 (1981) は柴田編 (1976) と同じ立場で、「はがす」の焦点は「除去する」ことにあるとしている。一方、「むく」の焦点については、柴田編 (1976) では、〈本体（中身）取り出す〉ことにあると指摘されている。

5.1.4　先行研究のまとめ

以上の先行研究を離脱物の特徴（表 1）と動作の焦点（表 2）に分けて以下のようにまとめる。

表 1　「はがす、むく」が取る離脱物に関する先行研究の記述

	はがす	むく
宮島 (1972)	離脱元に密着する わずかの面積しか占めていない	離脱元の表面に密着する かなりの面積を覆う
柴田編 (1976)	くっついて（くっつけて）ある	離脱元の一部としての表面
鈴木 (1981)		離脱元の一部 離脱元に密着していないもの

表 2　「はがす、むく」動作の焦点に関する先行研究の記述

	はがす	むく
宮島 (1972)	引き離すこと	
柴田編 (1976)	除去すること	本体（中身）取り出すこと
鈴木 (1981)	除去すること	

5.2　構文的な特徴

NLB、NLT のデータを参考にし、「はがれる、むける、はげる」が取る構文を確認する。

(65)　皮がはがれた。

(66)　足のかさぶたがはがれた。

(67)　細胞膜が細胞壁からはがれた。

(68)　骨と身がきれいにはがれた。

(65) ～ (68) から、「はがれる」は以下の構文を取ることができることがわかる。

・～が V
（～の～が V[19]）
・～が～から V
・～と～が V

次に、「むける」を見ていく。「むける」は主に (69) (70) のように、「～の～が V」と「～が V」を取る。

(69)　踵の皮がむけた。
(70)　皮がむけた。

ただし、(71) (72) に示すように、数は少ないが、「むける」はカラ格を取ることが可能である。

(71)　かさぶたが肩からむけた。
(72)　まさか足の甲から剥けるとは。

(http://hanakosouji.blog78.fc2.com/blog-date-200910.html)[20]

ここから、「むける」は以下のような構文を取ると言える。

・～が V
（～の～が V）
・～が～から V

---

[19] 6 節で述べるが、離脱動詞が取る離脱物は離脱元と「全体―部分」の関係にある。このため、「～の～」という形式で両者を結ぶことができる。そして、離脱物が離脱元から離脱するため、離脱元をカラ格に取ることができる。このように、離脱動詞の場合は起点のカラ格に相当する「～の～」の「～の」という形式を取ることができる。
[20] 「国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)」から抽出した文である。

最後に、「はげる」は以下のような構文を取ることが確認できる。

・～が V
（～の～が V）

(73)　ベンチの塗りがはげた。
(74)　塗りがはげた。

このように、「はがれる、むける、はげる」は、「～の～が V」と「～が V」を取ることにおいて共通する。一方、カラ格に関しては、「はがれる」は取ることができる一方で、「むける」は取らないことはないものの、「はげる」は取れないことがわかる。「ト」に関しては、後述するように「はがれる」は取るが、「むける、はげる」は取らない。

5.3　離脱物と離脱元の関係

本節では、NLT から「むける、はがれる、はげる」が取る離脱物に基づき、先行研究で述べられた各動詞の特徴を検討する。

まず、NLT から、「むける、はがれる、はげる」の離脱物になるものを、頻度の上位順で挙げる。

(75)　むける：皮、皮膚、角質、かさぶた、包皮、薄皮、樹皮、表皮、表面…
　　はがれる：化けの皮、膜、塗装、胎盤、皮、メッキ、網膜、爪…
　　はげる：塗装、メッキ、皮、化けの皮、表面、塗料、色、絵具、…

以上の離脱物は離脱元自身の一部分であるか、後に離脱元に付けられたものであるかにより、(76) のようにまとめられる。また、「シール、ポスター」などは上位ではないが、「はがれる」の離脱物になれることが確認できた。

(76)　むける：a. 皮、皮膚、角質、包皮、薄皮、樹皮、表皮、表面…

はがれる：a. 化けの皮、膜、胎盤、網膜、爪…

b. 塗装、メッキ…

c. ポスター、シール…

はげる：a. 皮、化けの皮、表面…

b. 塗装、メッキ、塗料、色、絵具、ペンキ…

a 類は「皮、殻、かさぶた」のような、離脱元自身の一部であり、離脱元の表面に付いているもの、表皮のようなものであり、b 類は、もともとは離脱元の一部ではなく、後で加えられて、離脱元の表面に付いているものである。c 類は、b 類と同様に離脱元の本来的なものではないが、b 類よりさらに外側にあるものであるように考えられる。「むける」は a 類のものしか取れず、「はげる」は ab 類を取ることができ、「はがれる」は abc 類を取れる。このことから、「むける」の離脱物は離脱元の表面に付いている離脱元の一部であるもの、「はがれる」は、「はげる」と比べると離脱元の表面に付いているものより外側のものを取ることができると言える。

次に、「本体に密着している」という特徴を考察していく。「むける」は前に述べたように、離脱元の表面に付いている表皮といった離脱元の一部であるものが離脱物になる。このことから、「むける」の離脱物は「本体に密着している」という特徴もあると考えられる。ただし、離脱元の表面に付き、しかも離脱元の一部であるものは、一般的には、離脱元に密着しているため、「本体に密着している」という特徴は「離脱物が離脱元の表面に付いている離脱元の一部である」という特徴から導き出される二次的な特徴であると考える。

続いて、「はがれる、はげる」が「離脱元に密着している」という特徴を持つのかを見ていく。

(77)　a. 皮がはがれた。

b. 皮がはげた。

(78)　a. 塗装がはがれた。

b. 塗装がはげた。

「皮」の場合は、離脱元に密着していることは当然である。「塗装、ポスター」などの場合も、離脱物の全てが離脱元の表面に接触し、離脱元に密着していると考える。このことから、「はがれる、はげる」は「離脱物が離脱元に密着しているものである」という特徴を持つことがわかる。

次に、宮島 (1972) は「はがす」と比べ、「むく」は「かなりの面積を覆う」という特徴があると指摘しており、以下ではこの点について考察する。この「かなり」とは一体どれだけの大きさなのかは不明である。例えば、「むける」は、(79) (80) のように、「みかん」の全体を覆う「皮」や「足」のわずかな面積を覆う「かさぶた」のいずれも取ることができる。このことから、離脱元の全部であれ、部分であれ、離脱元の一部であれ、表面についているものであれば、「むける」の離脱物になることがわかる。ここから、「かなりの面積を覆う」という特徴は「むける」について、必要がないと考える。

(79)　みかんの皮がむけた。

(80)　足のかさぶたがむけた。

また、「はがれる」は以下に示されるように、並列のトを取ることができる[21]。

(81)　炭と鯛が近かったようで、鯛の表面が焼けてしまい、鯛の旨みと水分を閉じ込めてしまい、焼いているうちに鯛の身と骨が剥がれてきました。　(http://shin.blog.eonet.jp/default/2015/01/01/)

(81) では、離脱動作に参加する「身」と「骨」のどちらを離脱物とみなすか、どちらを離脱元とみなすかは曖昧である。これは、両者が「ト」で結びつき、同等であるものと捉えられるためである。そして、(82) を見ると、「はがれる」は離脱物と離脱元を同質なものとして捉えられる。

[21] NLT では「はげる」が並列のトと共起する例は見当たらなかった。また「??／?下地と塗装がはげた」のような文は揺れが見られるため、言えないと考える。

(82)　a.　くっついていた紙がはがれた。

　　b.　癒着した組織がはがれた。

この点に関しては、杉本 (2005) は以下のように指摘している。上記の現象より、本研究もこの指摘に同意する。

> 2 枚の「紙」や二つの「組織」は、どちらが主で、どちらが従ということはなく、先の本体と付着物という関係にはないと考えられる。つまり、本体と付着物の区別のない、単に付着した二つの物体を分離した状態にするという動作の場合には、「はがす」は使えるが、「むく」は使えないことがわかる。　(杉本 2005: 37)

5.4　離脱動作

5.4.1　離脱の焦点

先行研究では、「はがす」の焦点に対する見解が一致しているわけではなく、必ずしも「除去」を焦点としているわけではない。例えば、柴田編 (1976) は「むく」のポイントは「本体（中身）取り出す」ということにあるとしている。本論文は自動詞を考察するため、他動詞「はがす、むく」の特徴が自動詞に適用するかどうかを検討する。

まず、「はがす」の焦点が「除去」にあるという点が、「はがれる」に必要かどうかを見ていく。

(83)　ターンオーバーが進めば古い角質が剥がれるため、くすみも消えてきます。　(肌断食とは、美肌スキンケア)

(84)　すすいたあとに体から垢がポロポロ剥がれてきます。

(Yahoo!知恵袋、2005、コスメ、美容)

(83) (84) において、離脱物である「角質」と「垢」は確かに除去することが望まれると言えるが、下の (85) (86) の場合は、除去することが望ましいとは考えにくい。

(85)　天井が剥がれてきて、一度直してもらったのですが。

（Yahoo!ブログ、2008、住まい）

(86)　お風呂に入れると結構な頻度で爪が少し剥がれ、血が滲んだ痕があります。　(Yahoo!知恵袋、2005、子育て、出産)

(85) (86) の場合は、文脈から、離脱物の「天井」と「爪」は、除去すべきものではなく、必要とされるものであることがわかる。従って、「除去」に関しては自動詞「はがれる」の場合は関係ないとしておく。

次に、「むける」は「本体（中身）を取り出す」という特徴を持つことについて検討する。この点について、杉本 (2005) は他動詞の例を示し、「本体を取り出す」というより、「本体をあらわな状態にする」と記述する方が妥当であると述べている。(88) のように自動詞も問題なく言えるため、この記述が妥当であると考える。

(87)　バナナの皮を（半分まで）むいた。

(88)　皮が半分むけた。

この点について、構文的な観点から検討する。まず、起点を示すカラ格については、前述したが、「はがれる」は問題なく取り、「むける」も稀であるが存在する。一方で「はげる」はカラ格を取らない。このように、構文的な表れ方を見ると、「はがれる、むける」は起点を示すカラ格を取ることから、物が起点から出発するという位置変化を表すことができる。一方、以下のように、この 3 語は結果補語を取ることができる。「むける」と「はげる」は問題なくとれ、「はがれる」に関しては結果補語を取る例が稀であるが存在する。結果補語はものの状態変化の結果を表すという点から、この 3 語は状態変化を表すことができると言える。

(89)　気道の皮が薄くはがれた。

(90)　a.　ペンキがまだらにはげた。

b.　顔が赤くむけた。

ただし、「むける」がカラ格、「はがれる」が結果補語を取る例は僅少であるため、意味記述をするにあたり、「むける」は状態変化を表す動詞、「はがれる」は位置変化を表す動詞として扱うことにする。以上から、本研究は、「むける」にとって、「本体が取り出される」という位置変化より、「本体があらわな状態になる」という状態変化の方が妥当であると考え、杉本 (2005) に同意する。また、この特徴は、第 4 章で述べる「はげる」が状態変化、「はがれる」が位置変化に焦点を置く動詞であることと関連する。

5.4.2 離脱事態の起因

この節では、自然に離脱する事態を表すか、外力により離脱させる事態を表すかという点を検討する。以下の例から考えると、「はがれる、むける、はげる」は、どちらの事態も表現することが可能である。

(91) 樹皮がむけた。
(92) メッキがはげた。

(91) は、「樹皮をむく」動作が「皮がむけた」ことを引き起こすと考えても良く、乾いた樹皮が自然にむけたと考えても良い。(92) は誰かが擦ることで「メッキがはげた」でも良く、メタルが古くなったため、「メッキがはげた」でも良い。また、「はがれる」も同様であり、自然に起きる事態と外力により引き起こされる事態を表すことができる。

(93) a. そっとでも無理に剥がすと爪の表面が一緒に剥がれます。
(Yahoo! 知恵袋、2005、コスメ、美容)
b. わかりやすくえば、歯も皮膚のように、古い表面がはがれ、新しい表面ができるあの（再石灰化）と新陳代謝を繰り返し返っているのです。 (花田信弘著「もう虫歯にならない！」、2002、497)

(93a) は無理に力を使うことにより、「爪の表面がはがれる」ことを引き起こしており、つまり外力により引き起こされる事態であると考えられる。一方、

(93b) は、文脈から見ると、自然にはがれたという解釈がしやすく、つまり自然に離脱するという事態であると考えられる。このように、「はがれる」は自然な事態でも外力により引き起こされる事態でも表すことが可能であると考える。

5.5 まとめ

「むける、はがれる、はげる」の 3 語が取る離脱物の特徴と離脱の起因から考察した結果、以下の 3 点が言える。

(94) 「むける、はがれる、はげる」が取る離脱物

「むける」: 離脱元の表面に付いている離脱元の一部分。

「はがれる」: 密着的に接触しているもの。

「はげる」: 離脱元に密着的に接触しているもの。

(95) 3 語の離脱動作の起因は自然な離脱でも、外力による離脱でも良い。

(96) 「むける、はげる」は状態変化に焦点を置くのに対し、「はがれる」は位置変化に焦点を置く。

6. 日本語の離脱動詞の内部体系

6.1 離脱物と離脱元の関係

以下では日本語の各離脱動詞が取る離脱物を離脱元との密着度合い順で整理し、離脱動詞における離脱物と離脱元の関係をまとめる。1 番密着度が低いのは、「汚れ、メイク」のような離脱元の表面に付着しているもの、後から付けられているものである。2 番目は「ボタン、チェーン、詰め物」など離脱元に固定されているもの、または離脱元の付属品である。離脱元との接触は点的であるため、密着度が低いと考える。3 番目は「シール、ポスター」のような後から付けたものであるが、離脱元と面的に接触しているため 2 番目よりは密着度が高い。4 番目は「塗装、ペンキ」など離脱元の表面に付けられたものである。3 番目と同様に離脱元と面的に接触しているため、密着度が高いと考える。また、「塗装、ペンキ」などは後から付けたものと捉えても良い一方で、すでに離脱元と一体化しているとも考えられる点で、3 番目よりは密着度が高い。5 番目は「皮、表面」など離脱元の表皮のようなものである。6 番目は「首、足」や「歯」など、離脱

元の身体部分である。7番目は「空気、水分」など、離脱元の内部に入っているものであるため、密着度が高いと考える。各離脱動詞が取ることができるものに○を付け、取らないものを空白にする。

表 3 各離脱動詞が取る離脱物の特徴

密着度		おちる	とれる	はずれる	はがれる	はげる	むける	もげる	ぬける
低	付着しているもの 「汚れ、メイク」	○	○						
	付属している固体 「ボタン、チェーン、詰め物」		○	○					
	密着的に接触しているもの 「シール、ポスター」				○				
	密着的に接触しているもの 「塗装、ペンキ」				○	○			
	表面に付いている離脱元の一部分 「皮、表面」				○	○	○		
	離脱元の一部分；中に入っているもの 「首、足；歯」							○	○
高	中に入っているもの 「空気、水分」								○

以上から、多少重なりがあるものの、各離脱動詞は離脱物と離脱元の関係によって使い分けられていることがわかる。例えば、「おちる」は、離脱元と密着度が低い離脱物しか取らない。また、「とれる」は「おちる」より離脱元と密着している離脱物を取り、「はずれる」は、「とれる」と重なりがあるが、密着度が一番低いものは取りにくい。「はがれる、はげる、むける」には重なりが見られるが、「はげる」が取る離脱物の種類は限定され、「皮」や「塗装」のようなより密

着している離脱物しか取らない。「むける」はさらに限定的であり、「皮」のようなものしか取らない。最後に、「ぬける」は前述した物より内側にある離脱物を取り、「もげる」は一番内側にある離脱物を取る。

6.2　構文的な特徴

「とれる、おちる、ぬける、はずれる、もげる、むける、はがれる、もげる」は以下のように「(離脱元）の（離脱物）ガ V」という構文を取り、「～の」の形で離脱元（起点）を明示する。

(97)　a.　シャツのボタンがとれた。
　　b.　シャツの汚れがおちた。
　　c.　瓶の栓がぬけた。
　　d.　車のタイヤがはずれた。
　　e.　ぬいぐるみの指がもげた。
　　f.　指の皮がむけた。
　　g.　壁の壁紙がはがれた。
　　h.　ベンチのペンキがはげた。

これまでまとめた離脱物と離脱元の関係を見ると、各離脱動詞が取る離脱物は異なるが、全体的な特徴として、離脱元と離脱物が「全体－部分」の関係にあることが挙げられる。角田 (2009) は所有物の種類と所有者敬語の関係を考察している。自動詞主語の場合、所有物が身体部分である場合が、最も自然であり、属性である場合は、全体的に所有者敬語の自然さは身体部分の場合よりやや低く、衣類である場合は属性の場合よりやや落ち、愛玩動物、その他の所有物の場合は自然さが非常に低いと指摘している。つまり、所有傾斜が高い程、所有者敬語の自然さの度合いが高くなる。

(98)　所有傾斜：

身体部分 ＞ 属性 ＞ 衣類 ＞（親族）＞ 愛玩動物 ＞ 作品 ＞ その他の所有物[22]　(角田 2009: 127)

所有物が衣類である場合は自然度が高いとは言えないが、衣類が体に密着するため、身体部分同然であるという記述が見られる。

> 「衣類」の類は、衣服、ネクタイ、帽子、眼鏡、靴等が身に付けてある時に、この類に属す。この類は従来の分類では分離可能所有物と見なすのであろう。しかし、この類は身に付けた時は所有者に密着していて、殆ど身体部分同然である。（しかし、身に付けてないで、どこかにしまってある時には「衣類」ではなく、「その他の所有物」の類に属す。）
>
> (角田 2009: 128)

以上から、所有傾斜が高い所有物に尊敬表現を付けることで、全体への尊敬を表すことができると言える。また衣類は自然度が高くないものの、身体部分と同然に扱うことができる点から、本研究は「衣類」までを所有傾斜が高い所有物であると考える。3〜5 節で検討した日本語の各離脱動詞の離脱物と離脱元の関係を (99) にまとめる。確認すると、離脱動詞の主語に立てる名詞は、角田 (2009) の「衣類」までの記述に当てはまり、「全体」に密着する名詞であるといえる。

(99)　離脱物と離脱元の関係

とれる：離脱元に付属している固体、離脱元に付着しているもの、一種の状態

　例：表紙、メイク、疲れ…

おちる：離脱元に付着しているもの

　例：葉っぱ、メイク…

ぬける：離脱元と一体化しているもの

　例：髪の毛、空気…

---

[22] 角田 (2009) において、親族が括弧に入れてあるのは、この調査の目的に合った例文が見つからなかった、作れなかったためである。詳しくは角田 (2009) を参照されたい。

はずれる：離脱元に固定されたもの

例：チェーン、タイヤ…

もげる：離脱元に繋がっている連続体でありながら、それとは独立しているもの

例：首、足…

むける：離脱元の表面に付いている離脱元の一部分

例：皮、かさぶた…

はがれる：密着的に接触しているもの

例：皮、塗装、ポスター…

はげる：離脱元に密着的に接触しているもの

例：塗装、ペンキ…

(100) a. ぬいぐるみの足がもげた。

b. シャツのボタンがとれた。

(101) a. 太郎のコンタクトがはずれた／とれた。

b. 壁のポスターがはがれた／とれた。

(100a) の離脱物である「足」は、離脱元である「ぬいぐるみ」の身体部分であり、(100b) の「ボタン」も「シャツ」を構成する一部分であり、身体部分相当と考えられる。(101a) はすでに付けられたコンタクトが「離脱」することを表すため、角田 (2009) が述べるように「全体（所有者）」に密着し、身体部分同然と捉えられる。(101b) の「ポスター」も同様に考えられ、もともとは壁の一部分ではないが、貼られた時点で壁に密着しており、壁の一部分同然と捉えることが可能である。

また、角田 (2009) で指摘される「所有傾斜で高くなる程、所有者敬語の自然さの度合いが高くなる」に従って、離脱動詞を考えたい。つまり、離脱動詞において、離脱物が変化する場合は、所有傾斜が高くなる程、全体が変化すると見なす度合いが高くなると考えられる。言い換えれば、所有傾斜が高い離脱物では、離脱元と密着し、両者を一体と見なす度合いが高いため、離脱物が離脱すると、離脱元も変化すると考える。このため、密着度がより高い離脱物を取る場合は、

離脱元が変化するというように捉えやすいと考えられる。

次に、離脱動詞が取る構文を見ていく。以下のように、「(離脱物) ガ V」構文を取ることができる。ただし、離脱動詞が離脱段階を表すには、離脱元 (起点) を何らかの形式で示す必要があると考えられるが、離脱物によっては、「(離脱物) ガ V」のみで表現しても文としては十分である場合がある。

(102) a. ボタンがとれた。
b.? 汚れがとれた。
(103) a. 入れ歯がおちた。
b.? 汚れがおちた。
(104) a. 栓がぬけた。
b.? 底がぬけた。
(105) a. タイヤがはずれた。
b.? ネジがはずれた。
(106) a. リンゴがもげた。
b.? 足がもげた。
(107) a. 爪がむけた。
b.? 皮がむけた。
(108) a. 壁紙がはがれた。
b.? 膜がはがれた。
(109) a. マニュキュアがはげた。
b.? ペンキがはげた。

(a) の文は離脱元が明示されないが、「なんの？」と反問誘発することはなく、文としては十分であると考えられる。これは、このような名詞から全体である離脱元を限定しやすいためと考える。一方、(b) の文は「なんの？」と反問誘発することが多く、これは、このような離脱物から離脱元を限定しにくいため、離脱元の明示が要求される。このように、離脱動詞が「(離脱物) ガ V」という構文を取るかどうかは離脱物から離脱元を限定できるかによると考える。このように、離脱元が「～の」で明示される、もしくは場面から推測されると考えられる。

以上から、離脱動詞は「(離脱元）の（離脱物）ガ V」と「(離脱物）ガ V」の構文を取ることができるが、「(離脱元）の（離脱物）ガ V」が本来の構文であると考える。また、離脱物と離脱元が「全体―部分」の関係にあるため、「～の」という形で、全体であり起点でもある離脱元を示すことができ、カラ格と言い換えられるものが多い[23]。以下では、便宜上「～の～」は起点を示す形式と呼ぶことがある。

一方、各離脱動詞には、起点を示すカラ格を取るか、結果補語を取るかにおいて相違が見られる[24]。

(110) a. ボタンがシャツからとれた。

b. 汚れがシャツからおちた。

c. 栓が瓶からぬけた。

d. タイヤが車からはずれた。

e. 手足が肉体からもげた。

f. かさぶたが肩からむけた。[25]

g. ポスターが壁からはがれた。

h.＊ペンキがベンチからはげた。[26]

(111) a.＊ボタンがボロボロにとれた。[27]

b.＊汚れがきれいにおちた。(様態副詞の解釈のみ可能)

c.＊空気がぺちゃんこにぬけた。

---

[23] (i) a. 袖口からシャツのボタンがとれた。

b. 両手から指の汚れがとれた。

のように、カラ格と「～の」を分けて、起点と全体を示すものも存在する。

[24] 二次述部は主語の結果のみを表すことが可能であるが、ここで挙げる結果補語は二次述部と異なり、主語の一部分の状態変化を表すことも可能である。なぜ可能であるかという問題は課題として残る。

[25] カラ格の内省が揺れ、「?」と判断する話者も存在する。

[26] 「??」という内省も存在するが、「むける」と比べ、カラ格を取りにくいことが確認できた。また、NLB、NLT において、「はげる」がカラ格を取る用例が見当たらなかった。

[27] NLB を確認したところ、「とれる」は「漆喰、壁紙、ペンキ、塗装」などを取る例が見当たらず、しかも結果補語を取る例も見当たらなかったため、「とれる」は結果補語を取らないと考える。ただし、「壁の漆喰がボロボロにとれた」のような、離脱元との密着度がより高いものを取る場合は、(111a) より容認度が高い。これはガ格名詞に原因があると考える。6.2 節では述べたが、より密着度が高い離脱物を取る場合は離脱元の変化を表しやすいため、このような場合は結果補語を取る場合の容認も高くなると考えられる。

d.＊靴の底がボロボロにはずれた。

e.＊ぬいぐるみの足がボロボロにもげた。

f.　顔の皮がまだらにむけた。

g.　軌道の内側の皮が薄くはがれた。

h.　メッキがまだらにはげた。

(110) (111) のように、離脱動詞にはカラ格しか取らない「とれる、おちる、ぬける、はずれる、もげる」[28]、結果補語しか取らない「はげる」、両方を取ることが可能である「むける、はがれる」の 3 グループが存在する。離脱動詞の内部体系を以下のように示す[29]。

カラ格のみ	カラ格・結果補語	結果補語のみ
とれる、おちる、ぬける、はずれる、もげる	はがれる むける	はげる

図 2 離脱動詞の内部体系

ここで、表 3 で取り上げた離脱物と離脱元の関係を再び見られたい。離脱物と離脱元との密着度から見ると、離脱動詞は「おちる＞とれる＞はずれる＞はがれる＞はげる＞むける＞もげる＞ぬける」という順に並べられる。また、密着度がより高い離脱物を取る場合は、離脱元の変化が捉えやすいと述べた。図 2 と合わせて考えると、「とれる、おちる、はずれる、はがれる、はげる、むける」では密着度がより高いものを取るほど、結果補語を自然に取ることができるという傾向があると考えられる[30]。しかし、「もげる、ぬける」は離脱元と密着度が

[28] NLB を確認した結果、「とれる、おちる、ぬける、はずれる、もげる」は結果補語を取る例が見当たらなかったため、カラ格しか取らないと考える。

[29] 離脱動詞の内部体系は 3 つあると考える。ただし、「むける」がカラ格、「はがれる」が結果補語を取る場合は稀であるため、離脱動詞と移動動詞、状態変化動詞と比較する場合では、それぞれ状態変化が焦点化された離脱動詞と位置変化が焦点化された離脱動詞に入れて考察する。

[30] ただし、「むける」は密着度が高い物を取る一方、カラ格を取ることも可能である。

高い離脱物を取るが、結果補語を取りにくい。これは、「もげる」の場合は、離脱物と離脱元は繋がっているものの、それぞれ独立しているため、密着度が高い離脱物であっても、離脱するにあたり離脱元が変化するとは想定しづらいと言える。また、「ぬける」が結果補語を取りにくいのは、移動動詞と離脱動詞の用法を持つため、移動動詞の性質が残されていると考えられる。

6.3　意味的な特徴

岸本 (2001) では、以下のような行為連鎖の意味構造を用い、壁塗り交替できる動詞と pour 型、fill 型を考察し、壁塗り交替の全体・部分の解釈を説明づけている。

(112)　〈行為〉　→　〈変化（動き)〉　→〈結果状態〉

(岸本 2001: 109)

「pour は、水が重量によって空中を上から下へ落ちてグラスの中に入ったという状況を表し、そして、pour という動詞の意味として重要なのは、水の落ち方ーー液体が分断されずに、1 つの流れとなって落ちていくという様態ーーである (岸本 2001: 109)」とされ、(112) の意味構造に当てはめて説明すると、意味構造の中で〈動き〉の様態に重点を置いて表現するものと指摘されている。

(113)　a.　John poured water into the glass.

b.* John poured the glass with water.　(岸本 2001: 109)

一方、“fill” は、移動物の動き方より、それが付着する場所の状態に重点を置く動詞であるとされ、“fill” は容器がいっぱいになるという状態変化を描写するとされている。

(114)　a.　John filled the glass with water.

b. *John filled water into the glass.　(岸本 2001: 109)

さらに、以下のような壁塗り交替が起きる動詞は、pour 型と fill 型の両方の性質を備えている動詞であると述べている。

(115) a. She emptied garbage from the can.

b. She emptied the can of garbage. (岸本 2001: 112)

岸本 (2001) は、意味的に重視（焦点化）される部分を XXX で表示し、行為連鎖の意味構造の中で pour 型、fill 型、交替型を以下のように示している。

(116)

	〈行為〉	→	〈移動物の動き〉	→	〈場所の結果状態〉
pour 型			XXX		
fill 型					XXX
交替型			XXX		XXX

(岸本 2001: 111)

本研究では、この壁塗り交替での分析を参考に、離脱動詞それぞれの特徴を捉えていく。なお、前述したが、本研究が扱う離脱動詞は、カラ格しか取らない「とれる、おちる、ぬける、はずれる、もげる」、結果補語しか取らない「はげる」、両方を取ることが可能である「むける、はがれる」の 3 グループが存在する。起点を示すカラ格を取る動詞は、離脱物が離脱元から位置変化することを焦点化しているため、pour 型に相似すると考えられる。一方、離脱元の状態変化の結果を表す結果補語を取る動詞は、離脱元の結果状態を焦点化しているため、fill 型に相似すると考えられる。そして、「むける、はがれる」はいずれも取ることができることから、この 2 類の動詞の性質を備えていると考えられ、交替型と相似し、離脱物の位置変化と離脱元の状態変化を焦点化することができると考える。以下では、「とれる」のような動詞を「位置変化が焦点化された離脱動詞」、「はげる」を「状態変化が焦点化された離脱動詞」と呼ぶ。そこで、(116) に従い、離脱動詞を以下のように表示する。行為連鎖では、他動詞の場合は〈行為〉を入れるが、自動詞の場合は〈行為〉を外して、〈移動物の動き〉→〈場所の結果状態〉だけになる (岸本 2001: 111)。焦点化された部分を◯で表示する。

(117)

	〈離脱物の動き〉	〈離脱元の状態変化〉
「とれる」類	○	
「はげる」類		○
交替型	○	○

しかし、離脱動詞には、構文的には現れていないものの、焦点化されていない事象も含まれていると考える。もし、位置変化が焦点化された離脱動詞に状態変化が含まれていないとすれば、位置変化のみを含む移動動詞と違いがないはずである。また、状態変化が焦点化された離脱動詞も同様に、もし位置変化の事象が含まれていないとすれば、状態変化動詞と同様の振る舞いをするはずである。このことから、(118a) は「ボタン」が「シャツ」から位置変化するということを含むのに加え、「シャツ」の「ボタン」がなくなる状態変化するということも含むと考える。(118bc) も同様である。このように、離脱動詞には (119) に示される 2 つの事象が含まれると考えられる。事象Ⅰは (117) の〈離脱物の動き〉、事象Ⅱは〈離脱元の状態変化〉に相当する。また、離脱物と離脱元が「全体－部分」の関係にあるため、事象Ⅰと事象Ⅱは連動している。

(118) a. シャツのボタンがとれた。

b. 顔の皮がむけた。

c. メタルのメッキがはげた。

(119) 事象Ⅰ：離脱物が離脱元から位置変化する。

事象Ⅱ：離脱物がなくなることで離脱元が状態変化する。

7. まとめ

本章では、主に離脱物と離脱元の関係から、日本語の各離脱動詞の意味を検討した。また、離脱動詞の共通の特徴は、「(離脱元) の (離脱物) ガ V」という構文を取ること、離脱物と離脱元が「全体－部分」の関係にあるということである。意味の観点から見ると、離脱動詞は 2 つの事象を含むということを明らかにした。さらに、離脱動詞には、カラ格を取ることができる「とれる」のような位置変化が焦点化された離脱動詞と、結果補語を取ることできる「はげる」のような

状態変化が焦点化された離脱動詞と、「むける、はがれる」のような 2 つの事象を焦点化できる離脱動詞があることを明らかにした。

なお、焦点化されていない事象は構文的には現れていないが、存在すると考える。そこで、次章では、位置変化が焦点化された離脱動詞と移動動詞、状態変化が焦点化された離脱動詞と状態変化動詞には違いがあることを議論する。

第４章
日本語の離脱動詞と移動動詞、状態変化動詞との関係

1. はじめに

第 2 章で述べたように、従来の研究では離脱動詞は移動動詞と区別せずに扱われてきた。しかし、これまで検討したように、離脱動詞は、2 つの事象を含むと考える。このことから、位置変化、状態変化の一方のみを含む移動動詞、状態変化動詞と異なる振る舞いをすると考えられる。

本章では、位置変化が焦点化された離脱動詞を移動動詞と状態変化が焦点化された離脱動詞を状態変化動詞と比較し、お互いの共通点に触れた上で、相違点を検討する。

2. 位置変化が焦点化された離脱動詞と移動動詞の比較

宮島 (1972) は移動動詞を移動のどの段階に重点があるかにより「出発の段階に重点があるもの」、「経過の段階に重点があるもの」、「到着の段階に重点があるもの」、「移動の前段階を含むもの」という 4 類に分けている。位置変化が焦点化された離脱動詞は「離脱物が離脱元から移動する」という事象 I を焦点化し、出発段階に重点があると考えられるため、ここでは宮島 (1972) の「出発の段階に重点がある」移動動詞「はなれる、でる」と比較していく。寺村 (1982) は、「でどころ」と縁の深い移動動詞は、ヲ格、カラ格を取ると指摘している。「はなれる、でる」と位置変化が焦点化された離脱動詞は、以下のように、起点を示すカラ格を取り、物が移動するという意味を表す点で共通する。

（１） a. 太郎が故郷からはなれた。
　　 b. 太郎が家からでた。

（２） a. ボタンがシャツからとれた。
　　 b. 汚れがシャツからおちた。
　　 c. 栓が瓶からぬけた。
　　 d. タイヤが車からはずれた。

e. 手足が肉体からもげた。

f.　ポスターが壁からはがれた。

(1) は移動主体が「故郷、家」から離れる動作を表し、(2) は離脱物が離脱元から離脱する動作に重点をおいて表現している。一見すると、両者は同様であるように見えるが、本論文は構文的な観点から位置変化が焦点化された離脱動詞と出発の段階に重点がある移動動詞の差異を指摘し、過程性の観点から議論を行う。

2.1　「～ガ V」におけるずれ

まず、ガ格名詞のみを取る文を見る。

（３）　a.　ボタンがとれた。

b.? 汚れがおちた。

c.　栓がぬけた。

d.　タイヤがはずれた。

e.　指がもげた。

f.　壁紙がはがれた。

（４）　a.??太郎がはなれた。

b.??太郎がでた。

第 3 章 6.2 節で述べたが、離脱動詞は「(離脱物) ガ V」という構文を取ることができ、しかも離脱物と離脱元が「全体－部分」の関係にあるため、離脱元が明示されなくとも文としては十分である。一方、(3b) のような離脱元を限定しにくい場合は、「何から？」または「どこから？」より、「なんの？」と反問すると思われる。それに対し、「はなれる、でる」の場合は、起点が明示されない文に対し、「どこから？」と反問誘発する場合がほとんどであると考えられる。このように、離脱動詞の場合は離脱元を明示しなくとも文は十分であると思われ、そして、離脱動詞にとって、離脱元を明示する仕方はカラ格より「～の」の方が本来的である。一方、移動動詞の場合は起点を明示する形式はカラ格であり、そ

して、起点を明示しない場合は、文としては十分ではない。以上から、位置変化が焦点化された離脱動詞と出発の段階に重点がある移動動詞のいずれもカラ格を取ることができるが、位置変化が焦点化された離脱動詞にとっては、必須成分ではない一方で、出発の段階に重点がある移動動詞にとって、必須成分であると考えられる。

なお、位置変化が焦点化された離脱動詞と出発の段階に重点がある移動動詞がカラ格を取る頻度はこの問題の一種の裏づけになる。以下では、NLB から、各動詞の「～から」の頻度を「～から総数／動詞総数　比率」で列挙する。

（５）　はなれる：2747／9267　29.6%

でる：6657／74409　8.9%

（６）　とれる：93／3922　2.3%

おちる：696／9138　7.6%

ぬける：517／4789　10.7%

はずれる：566／1994　28.3%

もげる：2／51　3.9%

はがれる：21／441　4.7%

(5) を見ると、「はなれる」が「～から」を取る頻度は高いと言える。一方、「でる」は高いとは言いがたいが、「でる」が取るコロケーションを確認すると、「～に」が、22119／74409、29.7%で頻度が高い。そのうち、「結果／言葉／症状／影響が出る」のような出現を表す例が極めて多い。(6) を見ると、位置変化が焦点化された離脱動詞がカラ格と共起する頻度が低いと言えないものもある。だが、「おちる、むける、はずれる」には、(7a) のような慣用的な用法、(7bcd) のような典型的な移動の用法と (7e) の可能の用法も含まれ、それらを除外し再計算し、その数値を (8) に挙げる。一方、「はなれる、でる」の頻度が高いものは慣用的な用法や典型的な用法から逸脱するものが見られないので、そのまま示す。

（７）　a.　目から鱗がおちる。　(Yahoo!知恵袋、2005、Yahoo!知恵袋)

b.　顔の上から、雑誌が畳におちる。

(伊達将範著『Daddyface 冬海の人魚』、2001、913)

c.　甲子園口から商店街抜け２号線渡り旧電車道でいけます。

(Yahoo!知恵袋、2005、交通、地図)

d.　火の馬は軌道をはずれ、天を焦がし地を焼いて世界を大混乱に陥れる。

(牛島信明責任編集『スペイン中世・黄金世紀文学選集』、1994、968)

e.　電話会社から、通信履歴も取れるし。

(Yahoo!知恵袋、2005、恋愛相談、人間関係の悩み)

（８）　とれる：37／3922　0.9%

おちる：113／9138　1.2%

ぬける：134／4789　2.7%

はずれる：17／1994　0.8%

(6) に挙げた「もげる、はがれる」と (8) を合わせて見ると、「はなれる、でる」と比べ、離脱動詞の場合はカラ格を取る頻度が低いと言える。以上から、カラ格は「はなれる、でる」にとっては必須成分であるが、離脱動詞の必須成分ではないと考える[31]。

2.2　ニ格との共起及びテイル形の解釈のずれ

池上 (1975) は、起点と到着点は論理的には対等であるが、言語表現に反映された限りでは心理的には決して対等には扱われないと指摘している。以下のように、中立的である移動動詞 “move” と変化動詞 “change” の例を取り上げ、到着点が優位であることを提示している。

[31] 離脱物と離脱元の密着度から考えると、密着度がより高いものを取る離脱動詞は離脱元の状態変化を表しやすいと考えられる。このことから、密着度がより低いものを取る離脱動詞は離脱物の位置変化を表しやすいと仮定できる。したがって、「とれる、おちる、はずれる」を離脱物と離脱元との密着度の高さから並べると、「はずれる＞とれる＞おちる」になり、「おちる」は離脱物の位置変化を一番表しやすいと予測される。これは (8) に示した頻度と合致する。ただし、ここに挙げた頻度の差はわずかであるため、指摘に留める。

（９）　a.　John moved to the pole.

b.　John changed into a dog.

c.？ John moved from the pole.

d.？ John changed from a dog.　(池上 1975: 330)

さらに、(10) のような起点だけが示されている表現に関しては、「問題となっている場所へ」ということが含まれているため起点だけで十分であるとしている。

（10）　John came from London.

（11）　a.　John parted from Mary.

b.* John parted (from Mary) to Jane.　(池上 1975: 331)

さらに、(11) のような起点だけ示され、到達点を加えると言えなくなる表現に関しては、以下のように説明している。

> このような場合は一見上で述べた〈到達点〉優位の原則に反するように思える。しかし、これは実は〈～と別れる〉ということが〈～のないところへ行く〉（あるいは〈～のない状態になる〉）ということと同等と感じられているからで、後者の解釈だとすでに言わば否定の〈到達点〉が含まれているわけであり、それ以上さらに〈到達点〉をつけ加えることができなくなっているのである。　(池上 1975: 331)

池上 (1975) の説明から、言語一般の傾向から考えると、物の移動を述べる際には起点より着点が重視されると言える。このため、(12) のように、出発段階に重点がある「はなれる、でる」でも、着点または方向を示すニ格を取ることができ、出発以降の段階を表すことが可能である。一方、(13) に示されるように、離脱動詞は着点または方向を示すニ格を取らない。

(12)　a.　太郎が沖にはなれた。

　　b.　太郎が庭にでた。

(13)　a.＊ボタンが椅子にとれた。

　　b.*?汚れが水槽におちた。

　　c.*?栓が机にぬけた。

　　d.*?タイヤが地面にはずれた。

　　e.＊ぬいぐるみの足が下にもげた。

　　f.＊壁紙が地面にはがれた。

ただし、(13) において、(13bcd) の「おちる、ぬける、はずれた」は他の動詞より、若干許容度が上がるが、これは、これらの離脱動詞が移動動詞の用法も持つためであると考えられる。このように (13bcd) がニ格を取る場合には、物がどこかに、またはどちらかの方向へ向かい移動することを表し、離脱元から離脱するという段階の意味が含まれなくなる。つまり、離脱動詞でなくなると思われる。従って、離脱動詞は、ニ格を取れず、離脱段階以降の段階を表せないと考える。

このことは、離脱動詞と移動動詞がテイル形の解釈において差異を示すことからもうかがえる。

(14)　a.　船が港からはなれている。

　　b.　煙が煙突からでている。[32]

(15)　a.　ボタンがとれている。[33]

　　b.　壁紙がはがれている。

(14a) は「船」が移動した結果、すでに「港」以外の所にいるという結果相の解釈が可能であり、また「船」がだんだん「港」から遠ざかっているという進行

[32] 同じ「出る」という動詞であっても、「情報が画面に出ている」のような文は出現を表す。出現は一種の移動であるというような見方もあるが、典型的な移動とは言えないと考える。また本研究は出現・消滅を表す動詞は状態変化動詞であるという立場を取る。

[33] ただし、「だんだん」のような副詞を付けると進行相の読みが不可能というわけではないが、これは「だんだん」が動詞に過程性をもたらすこととともかかわると考える。

相の解釈も可能である。(14b) は、「煙」が移動した結果、すでに「煙突」以外のところにあるという結果相の解釈が可能であり、「煙」がだんだん「煙突」から遠ざかっているという進行相の解釈も可能である。一方、(15a) は「ボタン」が「シャツ」からなくなったという結果相の解釈は可能であるが、「ボタン」が「シャツ」からだんだんはなれているという進行相の解釈はできない。(15b) も同様に結果相の解釈しかできない。

なお、下のように、巨大な壁紙が離脱している場合は、いま進行しているという意味合いも出てくるが、眼前描写という状況に限られるため、本研究では、進行相を表さないと捉える。

(16)　壁紙がだんだんはがれている。

2.3　起点を示すヲ格との共起のずれ

起点を示すヲ格が共起すると、出発の段階に重点を置く移動動詞と位置変化が焦点化された離脱動詞には、以下のように相違が見られる。すなわち、(17a) において、「はなれる、でる」はヲ格を取り、移動の起点を示すことができるが、離脱動詞の場合は非文になる[34]。

(17)　a.　太郎が家をはなれた。
　　b.　太郎が家をでた。

(18)　a.＊ボタンが服をとれた。
　　b.＊汚れがシャツをおちた。
　　c.＊栓が瓶をぬけた。
　　d.＊タイヤが車をはずれた。
　　e.＊足がぬいぐるみをもげた。

---

[34] 「はずれる、ぬける」などはヲ格を取る例は存在するが、その場合、離脱動詞が取る「B の A ガ V」構文を取らないという点から、この場合の「はずれる、ぬける」は離脱動詞と見なさない。

(i)　a.　悠二は道を外れ、灌木の茂みの中に分け入った。
　　b.＊道の悠二は外れ、灌木の茂みの中に分け入った。

(ii)　a.　車がトンネルをぬけた。
　　b.＊トンネルの車がぬけた。

f.＊細胞壁が細胞をはがれた。

起点を示すヲ格に関しては、寺村 (1982) と三宅 (1995) は、意志性の観点から、丹保 (1998) と菅井 (1999) は移動が継続されるかという過程性の観点から説明している。

寺村 (1982) は、「生き物、有情物の意識的な動き」の場合は、出発点としてヲ格もカラ格も取れるが、「自然な動き」の場合は「～カラ」しか取らないとしている。

(19)　a.＊煙ガ部屋ヲ出ル／出てイク。
　　b.　煙ガ部屋カラ出ル／出てイク。
(20)　a.　彼ガ部屋ヲ出ル／出てイク。
　　b.　彼ガ部屋カラ出ル／出てイク。　(寺村 1982: 107)

三宅 (1995) は以下の例を挙げ、意志的にコントロールされない移動の場合は、ヲ格を使うことができないと主張している。

(21)　煙が煙突｛＊を/から｝出た。
(22)　太郎が部屋｛を/から｝出た。

それに対し、丹保 (1998) は、(23) に示すような意志性では説明できない例を挙げ、(24) のように、移動が継続されると予想できる場合にはヲ格の使用が可能になると指摘している。

(23)　そう思って見ていると、いままで立昇っていた<u>煙突の煙が</u>、<u>煙突を出た</u>ところで、渦を巻き出したのである。
(24)　a.　チリ沖を出た津波は…
　　b.　心臓を出た血液は…
　　c.　陽極を出た電流は…
　　d.　東京を出た荷物は…

e.　銀河系を出た光は…

f.? 水中を出た泡が…　(丹保 1998: 19)

(25)　「N2 ガ N1 ヲ出ル」において、N2 が無情物であっても、その状況下において、N2 が方向性を持ち、その後（出た後）も移動が継続されると予想される場合は、「を」との共起が可能である。　(丹保 1998: 19)

このように、丹保 (1998) は、出発後に移動が継続されるかどうかという点から説明している。同様の指摘として、菅井 (1999) は過程性の観点から、「過程」にあるものや空間をプロファイルする場合にはヲ格が使用できるとし、起点の標示に流用されうると述べている。そしてガ格名詞が「－意志性」の場合に起点のヲ格が使用されないのは、「－意志性」であるガ格名詞は内在的に可動力を持たず、外的な力だけで自然に離れる「過程」をプロファイルすることが困難であるためと説明づけている。

本論文では、丹保 (1998)、菅井 (1999) の立場を取り、離脱動詞がヲ格を取らない現象を過程性の観点から説明する。前述したように、離脱動詞はニ格を取らず、離脱後の段階を表さないことを合わせて考えると、離脱動詞は、離脱という瞬間的な段階のみ表し、離脱後の段階を表さないため、過程性を持たないと考える。

2.4　移動動詞と離脱動詞の境界

前にも述べたが、本研究が扱う離脱動詞には離脱動詞の用法と移動動詞の用法を持つ動詞がある。

(26)　a.　シャツの汚れがおちた。

b.　携帯が床におちた。

(27)　a.　瓶の栓がぬけた。

b.　台風が海にぬけた。

(28)　a.　タイヤがはずれた。

b.　脇道にはずれた。

(26) ～ (28) において、(a) の文は離脱動詞の用法であり、(b) の文は移動動詞の用法であると考えられる。意味的な観点から見ると、これらの動詞は移動動詞と解釈される場合は、離脱元から位置変化することしか含まず、そして、構文的な観点から見ると、移動動詞の用法では、着点または方向を示すニ格を取ることができる。

なお、同じ動詞が場面により、離脱と移動のいずれの解釈も取れる場合がある。

(29)　木の葉がおちた。

(29) は、「葉」、「木」のどちらに注目するかにより、「おちる」の解釈が異なってくる。もし、「葉」を見て、「あっ、葉がおちた」と発話するような場合には、「葉が地面におちた」のように、ニ格を取ることができ、「葉」の位置変化を表し、移動動詞と解釈される。一方、木の葉が全てなくなった「木」を見て、葉がなくなった木の状態変化に焦点を当てて、「(すべての) 葉がおちた」と発話するような場合には、ニ格を取らず、「葉がおちている」のテイル形が結果と解釈されることから、「おちる」は離脱動詞と解釈される。以上から、離脱動詞と移動動詞の境界は一線で区切ることはできず、「おちる」のような両方の用法持つ動詞が存在すると言える。

3. 状態変化が焦点化された離脱動詞と状態変化動詞の比較

状態変化が焦点化された離脱動詞は状態変化動詞と同様に、結果補語を取り、物の状態変化を表せる。(30) は典型的な状態変化動詞の例であり、結果補語を取り、「木の枝、木の葉」が「折れた、枯れた」結果、「三つ、褐色」になったという状態変化を表す。(31) は状態変化が焦点化された離脱動詞の例であり、結果補語を取り、「みかんの皮、壁紙」が「むけた、はげた」結果、「千切れ千切れ、鱗状」になったという形状の状態変化を表す。

(30)　a.　木の枝が三つに折れた。

　　b.　木の葉が褐色に枯れた。

(31)　a.　みかんの皮が千切れ千切れにむけた。

　　b.　壁紙が鱗状にはげた。

3.1　「離脱物が V」と「離脱元が V」におけるずれ

本節では、構文的な観点から状態変化が焦点化された離脱動詞と状態変化動詞との違いを見ていく。まず、離脱動詞の独自の特徴としては「(離脱元) の (離脱物) が V」と「(離脱元) が V」という二つの構文で言い換えられる点が挙げられる。

(32)　a.　踵の皮がむけた。

　　b.　踵がむけた。

(33)　a.　メタルのメッキがはげた。

　　b.　メタルがはげた[35]。

(32) では「皮」がなくなることで、「踵」が「皮」で覆われなくなるという同一の事柄を表す。(33) も同様に、「メッキ」がなくなることで、「メタル」が「塗装」で覆われなくなることを表す。すなわち、(a) (b) がそれぞれ表す事柄は同様であると言える。

一方、状態変化動詞の場合はそれぞれ異なる事柄を表す。

(34)　a.　木の枝が折れた。

　　b.　木が折れた。

(35)　a.　木の葉が枯れた。

　　b.　木が枯れた。

「木の枝が折れた」という「木の枝」の状態変化は「木が折れた」という「木」の状態変化まで表さない。逆も同様で「木が折れた」という「木」の状態変化は「木の枝」の状態変化を表さない。このように、状態変化動詞と異なり、離脱動

[35] 「剥げる」と「禿げる」は別語であると考える。

詞は「部分」の状態変化と同時に「全体」の状態変化も意味する。

このような現象が起こるのは、離脱動詞では「部分」がなくなることで「全体」が状態変化するという意味を表し、「部分」がなくなるという位置変化と「全体」がその一部分を失うという状態変化が連動するためであると考えられる。ただし、「（離脱元）の（離脱物）が V」と「（離脱元）が V」は部分的解釈、全体的解釈とも関連する。

岸本 (2001) では、壁塗り構文の部分的解釈、全体的解釈に関する記述がなされている。次の (36a) は、ペンキが壁のどの部分に塗られたかは不明瞭であり、壁の一部分だけが塗られるという部分的解釈でも良いし、壁の全体が塗られたという全体的解釈でも良いと指摘している。一方、(36b) のように、場所名詞が直接目的語になると、壁全体がペンキで覆い尽くされると言う全体的解釈が強く表れる。

(36)　a.　ペンキを壁に塗った。

　　b.　ペンキで壁を塗った。

離脱動詞の「（離脱元）の（離脱物）が V」、「（離脱元）が V」の交替は、(37) のように、「踵、指」のような面積が狭いものによく起きる。一方、「顔、手、足」のような面積が広い離脱元であると、(38) のように、許容度が落ちる。これは、面積が狭い離脱元の場合は、離脱物が離脱すると、全体的な解釈と捉えやすいからである。それに対し、「顔」のようなより大きく、面積が広いものは、部分の微小な変化、例えば、皮が一箇所むけた、のような変化では、全体までは状態変化するとは考えにくい。

(37)　a.　指の皮がむけた。

　　b.　指がむけた。

(38)　a.　顔の皮がむけた。

　　b.??顔がむけた。

このように、(39) (40) は、「（離脱元）が V」を取り、離脱物がすべて離脱した

という離脱元の全体的な状態変化を表す。(39) では、「踵」の「皮」が全て離脱したという「踵」の全体的な状態変化を表し、(40) は、「メタル」の「メッキ」が全て離脱したという「メタル」の全体的な状態変化を表す。

(39)　踵がむけた。

(40)　メタルがはげた。

以上から、状態変化が焦点化された離脱動詞は、離脱物、離脱元のいずれの状態変化も表すことができるのに対し、状態変化動詞はこの特徴を持たない[36]。

3.2　結果補語の修飾先の曖昧性

本節では、離脱動詞が結果補語を取る場合に、修飾先がどのようになるかを見ていく。これまで述べたように、「むける、はがる」は結果補語を取ることができる。

(41)　a.　みかんの皮が汚くむけた。

　　b.? みかんの皮が千切れ千切れにむけた。[37]

(42)　a.　壁紙がまだらにはげた。

　　b.　壁紙が鱗状にはげた。

(41a) の「汚く」は、様態副詞と捉えやすいが、「皮」が離脱後の「みかん」の様子の変化結果を表すとも捉えられる。(41b) の「千切れ千切れ」は「皮」が離脱後の「皮」の様子の変化結果を表す。(42) も同様で、(42a) の「まだらに」が修飾するのは「全体」である「壁」、(42b) の「鱗状」が修飾するのは「部分」

---

[36] (i)　a.　庭の芝生が茶色に枯れた。
　　b.　本の表紙がどろどろに汚れた。
　　c.　タイヤの表面がざらざらに削れた。
(i) のようなものは全体も状態変化しているように見えるが、(a) は「庭が茶色に枯れた」は言えない。(b) は「本がどろどろに汚れた」は必ずしも「本の表紙が汚れた」ということではないため、両者は同じ意味を表すとは言いにくい。(c) は「タイヤの表面」と「タイヤ」が分離できないものであり、つまり「タイヤの表面」を言う際には「タイヤ」を指すとも考えられる。

[37] 意味的にはほかに適切な例がないため、若干不自然な例になる。

である「壁紙」である。まとめると、離脱動詞が結果補語を取る場合、結果補語が「全体」と「部分」の状態変化の結果のいずれも表せると言える。一方、状態変化動詞にはこのような現象は見当たらない。

(43)　a.　木の枝が二つに折れた。
　　b.　木の葉が褐色に枯れた。

(43a) の「二つ」は「枝」が「折れた」結果を表し、「木」の変化結果と捉えられない。(43b) も同様に、「褐色」が修飾するのは「木の葉」である。このように、状態変化動詞文における結果補語は「部分」を示す名詞の状態変化の結果のみを表す。

4. 離脱動詞と移動動詞、状態変化動詞との関係

位置変化が焦点化された離脱動詞はカラ格を取ることができることから、離脱物が離脱元から位置変化する動作を表す。この点では、物の位置変化を表す移動動詞と共通する。一方、移動動詞は着点、または方向を示すニ格、起点を示すヲを取ることができ、そして、テイル形が結果相と進行相を表すことが可能という点では、位置変化が焦点化された離脱動詞と異なる。これは、離脱動詞が過程性を持たないためであると考える。

また、状態変化が焦点化された離脱動詞は結果補語を取ることができる点では、状態変化動詞と共通する振る舞いが見られる。一方、状態変化が焦点化された離脱動詞は「(離脱物) が V」と「(離脱元) が V」が置き換えられ、そして、結果補語が離脱物、離脱元のいずれも修飾可能である点では、状態変化動詞と異なる。これは、状態変化が焦点化された離脱動詞は離脱元と離脱物のいずれの状態変化も表せるためであると考える。

以上から、位置変化が焦点化された離脱動詞、状態変化が焦点化された離脱動詞は、それぞれ、移動動詞、状態変化動詞と共通点と相違点があるため、独自の一類をなしているが、それぞれと接点があると考える。

また、第 4 章で述べた離脱動詞が移動動詞、状態変化動詞と違いが存在することは、離脱動詞が離脱物の位置変化と離脱元の状態変化という 2 つの事象を

含むことの裏付けになる。位置変化が焦点化された離脱動詞は離脱物の位置変化のみを焦点化するが、焦点化されていない状態変化の事象も存在する。一方、状態変化が焦点化された離脱動詞は離脱元の状態変化を焦点化するものの、焦点化されていない位置変化の事象も存在する。このため、位置変化が焦点化された離脱動詞は位置変化のみを表す移動動詞と相違点があり、状態変化が焦点化された離脱動詞は状態変化のみを表す状態変化動詞と相違点があると考える。

5. まとめ

以上から、位置変化が焦点化された離脱動詞と移動動詞、状態変化が焦点化された離脱動詞と状態変化動詞との比較を通して、それぞれの共通点と相違点を明らかにした。移動動詞、状態変化動詞との関係を図 3 に示す。そして、それぞれの差異が生じる原因は離脱動詞が 2 つの事象を含むということにある。

移動動詞	離脱動詞	離脱動詞	状態変化動詞
事象 I のみを意味する。	（位置変化が焦点化された類） 意味構造の中で事象 I が焦点化される。	（状態変化が焦点化された類） 意味構造の中で事象 II が焦点化される。	事象 II のみを意味する。
出発以降の段階を表せる。	離脱段階のみ表し、過程性を持たない。	「全体」と「部分」の両方の状態変化を表せる。	ガ格名詞の状態変化のみ表せる。

図 3　日本語の離脱動詞の特徴及び移動動詞、状態変化動詞との関係

第５章
中国語の離脱動詞“掉”の意味分析及び日本語との対応

1. はじめに

中国語では、離脱物が離脱元から離脱するという事象を“掉”と“落”で表現する。

（１） a. 衬衫　的　扣子　掉　了。
シャツ　の　ボタン　diao　た
（シャツのボタンがとれた。）

b. 瓶子　的　塞子　掉　了。
瓶　の　栓　diao　た
（瓶の栓がぬけた。）

c. 桌子　的　油漆　掉　了。
机　の　ペンキ diao　た
（机のペンキがはげた。）

d. 叶子　掉　了。
葉　diao　た
（葉がおちた。）

（２） a.＊衬衫　的　扣子　落　了。
シャツ　の　ボタン　luo　た
（シャツのボタンがとれた。）

b.＊瓶子　的　塞子　落　了。
瓶　の　栓　luo　た
（瓶の栓がぬけた。）

c.＊桌子　的　油漆　落　了。
机　の　ペンキ　luo　た
（机のペンキがはげた。）

d.　叶子/花　　落　　了。
　　葉／花　　luo　た
　（葉／花がおちた。）

(1) (2) は、それぞれ“掉、落”を用い、離脱動作を表す。“掉”は (1) に示すように、「ボタン、栓、ペンキ、葉」などを離脱物に取ることができ、一方、“落”は、「ボタン」などを取ることができず、「葉」のようなもののみが取れる。

中国語では、以上のように、一般的な物の離脱動作は“掉”を用い、「葉」のような植物系の物の離脱動作は、“掉、落”のいずれも使用できる。本章では、まず“落”の用法が限られるため、本研究の分析対象としないことを述べる。次に“掉”は離脱動詞の“掉”と移動動詞の“掉”の用法を持つことを示した上で、離脱動詞の“掉”の文法的な振る舞いを述べ、さらに、共起する離脱物から、日本語の離脱動詞との対応関係を検討する。

2.　先行研究

従来の研究では、“掉、落”は移動動詞と扱われ、田 (2015) では、移動動詞である“掉、落”を“谓语＋宾语（述語＋目的語）”、“谓语＋场所宾语（述語＋場所名詞）”という 2 つの構文から、意味の違いを考察している。表 4 にその結論を示す。

表 4　“掉”と“落”の意味特徴

落	重量が軽いものが元の位置から離脱して、ゆっくり下降する。 下降しつづける。 だんだん着点につく。
掉	ものは元の位置から離脱して、重力により、下降運動をする。 ものの重量が重いため、他の事物に攻撃やダメージを与える。

(田 2015: 125)（日本語訳は本論文筆者による）

表 4 から見ると、“掉”は「ものは元の位置から離脱して、重力により、下降

運動をする」という意味を表しており、これは移動の全過程を表すと言える。しかし、(3) の場合は、「毛、ペンキ」が「兎、机」から離脱するという出発段階の位置変化のみを表し、それ以降の過程を表さない。本章では、“掉”には、移動動詞のほか、離脱動詞である“掉”があることを示し、文法的な振る舞いを検討した上で、離脱動詞の“掉”は、過程性を持たない瞬間動詞であることを指摘する。

（３）　a.　兎子　　毛　　掉　　了。
　　うさぎ　毛　　diao　　た
　　（うさぎの毛がぬけた。）
　　b.　桌子　的　油漆　　掉　　了。
　　机　　の　ペンキ　　diao　た
　　（机のペンキがはげた。）

3.　“落”について

前述したが、中国語では、離脱を表す自動詞は“掉”と“落”がある。本節では、“落”の用法を検討し、限定された場合のみに使われることを示す。

“落”は、“花、叶子、泪/眼泪、灰/灰尘（花、葉、涙、埃）”などの名詞しか主語に取らないが、以下に述べるように、「涙、埃」を取る場合は移動動詞の意味を表す。

（４）　a.? 眼泪　落　了。
　　涙　　luo　た
　　（涙がおちた。）
　　b.　眼泪　落　　下来　　了。
　　涙　　luo　てくる　た
　　（涙がおちてきた。）
（５）　a.? 灰尘　落　了。
　　埃　　luo　た
　　（埃がおちた。）

b. 灰尘　落　　下来　　了。
埃　　luo　てくる　た
（埃がおちてきた。）

“落”は「涙、埃」を取ることができるが、無標形式の述語の場合にはやや不自然である。意味的に考えると、(a) の文はある物が下方向へ位置変化することを表す。このため、(b) のように、方向補語である“下来”を付けることができ、物が下方向、且つ話者に向かって移動することを表す。以上から、「涙、埃」と共起する“落”は、あるものが下へ向かって移動することを表し、あるものから離脱する段階を表さないと考える。このため、この場合の“落”を離脱動詞とみなさず、移動動詞と捉える。

次に、「花、葉」を取る場合を見ていく。（6）のように、“落”は「花、葉」を取ることができ、離脱物の離脱段階を表すことができる。ただし、これらの文は、エッセイや詩などによく出現し、文学性が強いと考えられる。このように、この場合の“落”は、かなり限定的な用法であるため、本論文では扱わないことにする。

（6）　a. 花　落　了。
花　luo　た
（花がおちた。）
b. 叶子　　落　　了。
葉　　luo　　た
（葉がおちた。）

4. 離脱動詞である“掉”の文法的振る舞いについて

4.1 移動動詞の“掉”と離脱動詞の“掉”について

本節では、移動動詞の“掉”と離脱動詞の“掉”の違いを検討する。まず、移動動詞の“掉”を見る。

（7）　a.　手机　掉　了。

携带　diao　た

（携帯がおちた。）

b.　书　从　桌子　上　掉　了。

本　から　机　上　diao　た

（本が机の上からおちた。）

(7a) は、移動物である「携帯」のみが明示されるが、「携帯」が「床」に移動することを表す。(7b) は移動物である「本」と起点の「机」が明示され、「本」が「机」から「床」に移動することを表す。いずれも着点が明示されていないが、下方向、つまり「床」へ向かって移動することを表す。このように、移動動詞である“掉”は、物が下方向に向かう移動を表すと考える。この点について、丸尾 (2004) でも指摘されているように、移動動詞である“掉”は「下」という固有の絶対的方向が意味に含まれている。一方、(8) のように、離脱動詞である“掉”は移動動詞の“掉”と異なり、方向性が含まれていないと考えられる。

（8）　a.　兔子　毛　掉　了。

うさぎ　毛　diao　た

（うさぎの毛がぬけた。）

b.　椅子　的　油漆　掉　了。

椅子　の　ペンキ　diao　た

（椅子のペンキがはげた。）

(8a) は「毛」が「うさぎ」から離脱することを表すが、「毛」が移動した後の着点は問題にされない。(8b) も同様で、「ペンキ」が「椅子」から離脱し、どこに移動するかは問題にされない。つまり、離脱動詞の“掉”は、離脱物が離脱元から離脱することのみを表し、着点がなく、方向性がないと考える。このため、以下のように、方向補語“下来”“下去”を付けた場合は、移動動詞の“掉”と離脱動詞の“掉”に差異が見られる。

（9）　a.　手机　掉　　下来　　了。　　【移動動詞の“掉”】
　　携帯　diao　てくる　　た
　　（携帯がおちてきた。）
　　b.　手机　掉　　下去　　了。　　【移動動詞の“掉”】
　　携帯　diao　ていく　た
　　（携帯がおちていった。）
（10）　a.??椅子　的　油漆　　掉　　下来　　了。　　【離脱動詞の“掉”】
　　椅子　の　ペンキ　diao　てくる　　た
　　（椅子のペンキがはげていた。）
　　b.??椅子　的　油漆　　掉　　下去　　了。　　【離脱動詞の“掉”】
　　椅子　の　ペンキ　diao　ていく　　た
　　（椅子のペンキがはげていた。）

(9a) は「携帯」より下に話者が位置し、「携帯」が下へ（話者に近づいて）移動することを表し、(9b) はものの移動する起点に話者が位置し、「携帯」が下へ（話者から遠ざかって）移動することを表す。移動動詞の“掉”は下へ移動するため、方向補語である“下来、下去”を付けた場合は、下方向に向かっていく移動過程を表す。一方、離脱動詞の“掉”は方向性がなく、下方向に向かって移動することを表せず、“下来、下去”と組み合わせた場合は許容度が落ちる。

4.2　離脱動詞である“掉”の文法的振る舞いについて

本節では、文法的な振る舞いから“掉”の特徴を検討する。まず、離脱を表す“掉”は、以下のように、中国語“着”と共起しにくい。

（11）＊树　的　叶子　掉　　着。
　　木　の　葉　　diao　ている
　　（木の葉はおちている。）
（12）＊墙纸　掉　　着。
　　壁紙　diao　ている
　　（＊壁紙ははがれている。）

木村 (1981) は、進行を表す“着 p”は、仕手が主要である一方、持続を表す“着 d”は、受け手が主要と見て取れるとしている[38]。このように、持続を表す“着 d”を付けた“V 着 d”は、「動作の結果としての受け手の具体的な状態」を表す。このため、V は［＋消失 or 離脱］の動詞と接続不可能であると主張している。具体的には以下のように述べている。

> “V 着”は、VtR と同様に、常に「動作の結果としての受け手の具体的な状態」を表すものである、という点である。こう主張することの妥当性は次の事実からも裏付けられる。即ちそれは、“着 d”と結合する V が、その意味するところの動作の遂行が何らかの形で受け手を或いは場所に「付着」させたり或いは「留存」させたりするという結果をもたらす、というようなそういう意味の動詞［以下『［＋付着 or 留存］の動詞』と呼ぶ］でなければならない；そして逆に受け手を或は場所から「消失」或いは「離脱」させてしまうような結果をもたらす動作を意味する動詞［以下『［＋消失 or 離脱］の動詞』と呼ぶ］は“着 d”と結合し得ないという事実である。 (木村 1981: 25)

そして、木村 (1981) は、(13) の例を挙げて、以下のように説明している。

(13) a. 他戴着 d 帽子。
b. ＊他摘着 d 帽子。

> ［＋付着 or 留存］の動詞に属する“戴”から成る (6a)［＝(13a)］から、われわれは受け手の“帽子”が仕手の“他”の頭の上に付着している状態を知り得る。一方、(6b)［＝(13b)］の“摘”は受け手の「消失」もしくは「離脱」をもたらす動作であるがゆえに、その動作の遂行の結果受け手の“帽子”が如何なる具体的な状態にあり続けるかをわれわれは知り得ない。仮に「彼ハ帽子ヲ脱イダ／デイル」という表現は仕手の「彼」

[38] 木村 (1981) は、進行の“着”を“着 p”、持続の“着”を“着 d”と呼んでいる。

が“光着头”という状態にあることこそ伝え得ても、受け手の「帽子」が如何なる具体的状態にあり続けるのかは伝え得ない。即ち帽子は帽子掛けに掛けられているのか、あるいは床の上に脱ぎ捨てられているのか……？このように動作の結果としての受けての具体的状態を伝え得ない[＋消失 or 離脱]の動詞は (6b) [＝(13b)] に見られるように“着 d”との結合が許されない。

(木村 1981: 25)

多和田 (2001) は、動作の持続であるのか、その結果の持続であるのかの違いは、“着”の違いというよりも、むしろ“着”と共起する動詞の意味に起因すると指摘している。結論を述べると、動作がその「達成完了状態」においてもなお続くものであれば「進行」を表し、「達成」の瞬間後もその結果が続くものであれば「状態の持続」を表すとしている。さらに、この観点から考えると、木村 (1981) で指摘された仕手と受け手の優位性に関する相違は、動作における達成完了状態に着目すれば、至極自然であるとしている。

動作の「達成完了状態」でその結果が続くということを述べる際、話し手の視点はその結果の所在である受け手に向けられ、また動作がその「達成完了状態」においてもなお続くということを述べる際、話し手の視点がその動作等の仕手に向けられるのは極めて自然なことである。

(多和田 2001: 101)

また、“死（死ぬ）、断（折れる）、丢（なくす）、塌（崩れる）”などが“着”と共起しないのは、瞬間的に完成する意味を表す動詞は、動作の達成後にも持続することはあり得ないと説明している。“通过（通過する）、停止（停止する）、打倒（打ち倒す）、离开（離れる）、失掉（失う）”などが“着”と共起しないのは、“着”を付加する以前にすでに何らかの結果の意を表していると指摘している。

本研究は多和田 (2001) に同意し、“死、断、丢、塌”などは、瞬間的であり、動作が終わった後の事柄を表さず、過程性も持たない動詞であるため、“着”と

共起しないと考える。また、“停止、打倒、离开”などに関しては、ある結果の意を表すとされている。結果の意を表すというのは、一般的にある結果に達するという瞬間的な事柄を表すと考えられる。例えば、“停止”はあるものが動いた状態から止まった状態に達することのみを表し、その後「止まっている」という持続状態を表せない。このため、以上の動詞が“着”と共起しない理由は、瞬間的で過程性を持たないためであると考える。

また、尹 (2015) は、“离开（離れる）”、“死（死ぬ）”の例を挙げ、これらは瞬間動詞であるため、持続性を表す“着”と共起しないことを指摘している。

(14) ＊李　老师　离开　　着　　学校。
　　李　先生　離れる　ている　学校
　　（李先生は学校からはなれている。）
(15) ＊老王　　死　　着。
　　王さん　死ぬ　ている
　　（王さんは死んでいる。）

以上から、“着”と共起しない動詞は過程性を持たない動詞であると考える。このように、離脱動詞である“掉”は、離脱元から離脱する段階のみを表すため、瞬間的な動作で、過程性を持たないと考えられる。つまり離脱動詞である“掉”は、“离开”“死”と同様に、動作の開始と終了はほぼ重なり、時間幅を持たないため、“着”と共起しないと考える。

これは、(16) ～ (19) のように、“正在（しているところだ）”や“开始（しはじめる）”と共起しにくいということからもうかがえる。“正在”は、動作が進行していることを表す副詞であり、“开始”は、ある動作の始まり段階に注目させ、「～しはじめ／はじまる」という意味を表す副詞である。

(16)　a. 我　伤　　好　　得　　差不多 了、　结的痂　　掉　　了。

私　怪我　よく　COM[39]　ほぼ　た　　かさぶた　diao　た

（私の怪我はたいぶよくなりました。かさぶたがとれた。）

b.＊我　伤　　好　　得　差不多 了、　结的痂　　正在　　掉。

私　怪我　よく　COM　ほぼ　た　　かさぶた　している　diao

（私の怪我はたいぶよくなりました。かさぶたがとれている。）

(17)　a. 墙纸　有些　潮湿、　有些　　地方　　掉　　了。

壁紙　少し　湿った　いくつか　ところ　　diao　た

（壁紙は少し湿ったので、いくつかのところははがれた。）

b.＊墙纸　有些　潮湿、　有些　　地方　　正在　　掉。

壁紙　少し　湿った　いくつか　ところ　している　diao

（壁紙は少し湿ったので、いくつかのところははがれている。）

(18)　＊我　伤　　好　　得　　差不多 了、 结的痂　　开始　　掉　了。

私　怪我　よく COM　ほぼ　　た　かさぶた　しはじまる diao　た

（私の怪我はたいぶよくなりました。かさぶたがとれはじまった。）

(19)　＊墙纸　有些　潮湿、　有些　　地方　　开始　　掉　　了。

壁紙　少し　湿った　いくつか　ところ　しはじまる　diao　　た

（壁紙は少し湿ったので、いくつかのところははがれはじめた。）

以上から、離脱動詞である“掉”は、“着”“正在”“开始”と共起できず、過程性を持たない動詞であると考える。このように、前述した日本語の離脱動詞は過程性を持たず、離脱という瞬間的な動作のみを表すという点では日中で共通すると言える。

[39] 補語“complement”の略語である。“得”は「V＋得＋補語」という構造を持ち、後ろには様態補語、程度補語、可能補語を付けることができる。(16) では、程度補語である。

5. 日本語との対応関係

第 3 章で考察した日本語の各離脱動詞が取る離脱物の特徴を以下にまとめる。

(20)

とれる：離脱元に付属している固体、離脱元に付着しているもの、一種の状態

例：表紙、メイク、疲れ…

おちる：離脱元に付属している固体、離脱元に付着しているもの

例：葉っぱ、メイク…

ぬける：離脱元と一体化するもの

例：髪の毛、空気…

はずれる：離脱元に固定されたもの

例：チェーン、タイヤ…

もげる：離脱元に繋がっている連続体でありながら、それとは独立しているもの

例：首、足…

むける：離脱元の表面に付いている離脱元の一部分

例：皮、かさぶた…

はがれる：密着的に接触しているもの

例：皮、塗装、ポスター…

はげる：離脱元に密着的に接触しているもの

例：塗装、ペンキ…

(20) に示される離脱物の離脱動作を表すのに、中国語では、ほとんどの場合、“掉”で表すことができる。

(21) a. 本の表紙がとれた／おちた。

b. 书 的 封皮 掉 了。

本 の 表紙 diao た

(22)　a.　メイクがとれた／おちた。

b.　妆　　掉　　了。

メイク　diao　た

(23)　a.　髪の毛がぬけた。

b.　头发　　掉　　了。

髪の毛　diao　た

(24)　a.　自転車のチェーンがはずれた。

b.　自行车　的　链子　　掉　　了。

自転車　の　チェーン　diao　た

(25)　a.　机の足がもげた。

b.　桌子　腿　　掉　　了。

机　　足　　diao　た

(26)　a.　シールがはがれた。

b.　贴纸　　掉　　了。

シール　diao　た

(27)　a.　踵の皮がむけた。

b.　后脚跟　的　皮　　掉　　了。

踵　　の　皮　　diao　た

(28)　a.　机のペンキがはげた。

b.　桌子　漆　　掉　　了。

机　　ペンキ　diao　た

以上から、日本語の離脱動詞は離脱物と離脱元により各動詞が使い分けられるのに対し、中国語では、区別されず、より包括的に“掉”を使用すると考えられる。このように、離脱物という観点から見ると、“掉”は日本語の離脱動詞と一対多の対応関係にあると言える。

一方、「疲れ、水分、匂い、空気」のような、抽象物が離脱物になる場合には、“掉”を使わない。(29) に示すように、「とれる、ぬける、おちる」は抽象物を取ることが可能である一方、“掉”に置き換えると不自然になる。このような「とれる、ぬける、おちる」は (30) に示すように、“没（なくなる）”、“跑（ぬ

ける)”といった動詞で表現する[40]。

(29)　a.＊肩膀　的　疲労感　掉　了。
　　肩　の　疲労感　diao　た
　　(肩の疲れがとれた。)
　　b.＊菠菜　的　水分　掉　了。
　　ほうれん草　の　水分　diao　た
　　(ほうれん草の水分がぬけた。)
　　c.＊烟　的　臭味　掉　了。
　　煙草　の　臭い　diao　た
　　(煙草の臭いがとれた。)
　　d.＊气球　的　气　掉　了。
　　風船　の　空気　diao　た
　　(風船の空気がぬけた。)

(30)　a.　疲労感　没　了。
　　疲労感　mei　た
　　(疲れがとれた。)
　　b.　菠菜　的　水分　没/跑　了。
　　ほうれん草　の　水分　mei/pao　た
　　(ほうれん草の水分がぬけた。)
　　c.　烟　的　臭味　没　了。
　　煙草　の　臭い　mei　た
　　(煙草の臭いがとれた。)
　　d.　气球　的　气　没/跑　了。
　　風船　の　空気　mei/pao　た
　　(風船の空気がぬけた。)

[40] 日本語では、「とれる、ぬける」は「疲れがとれた」や「空気がぬけた」のように、消滅とも捉えられる例が存在する。それに対応する中国語の文は離脱動詞である“掉”で表さない。このような日中の違いは消滅動詞の位置づけ、離脱動詞との関係とかかわっていると考える。

中国語では、「疲れ」などの抽象物が離脱物になる場合は離脱動作と捉えにくいと考えられる。離脱物が具体物である場合は、離脱物が離脱元から位置変化するという事象Ⅰと、離脱物がなくなることで離脱元が状態変化するという事象Ⅱを含む。一方、「疲れ」などの場合は、一文に 2 つの事象が同時に含まれない。(30) の文に示すように、2 つの事象をそれぞれ“没（なくなる）”“跑（ぬける）”で表す。すなわち“没”を使用する場合は、離脱物がなくなることで、離脱元の変化を表す。つまり、離脱元の離脱物がなくなることを表し、あくまで離脱元の範囲内で行われる事柄である。このため、離脱物が離脱元から移動するという位置変化が含まれない。一方、“跑”を使用する場合は、離脱物が離脱元から、他のところに移動することを表し、離脱元の変化が含まれない。

また、第 3 章で確認したが、日本語の各離脱動詞は、自然に起こる事態にも、外力により引き起こされる事態にも使用することが可能である。同様に、一見すると、中国語の離脱動詞“掉”も自然に起こる事態にも、外力により引き起こされる事態にも使用可能である。

(31) a. 自行车 的 链子 掉 了。
自転車 の チェーン diao た
（自転車のチェーンがはずれた。）

b. 桌子 漆 掉 了。
机 ペンキ diao た
（机のペンキがはげた。）

(31a) は、「チェーン」が自然にはずれた場合にも、誰かに引っ張られてはずれた場合にも使用できる。(31b) も同様に、「机」が古くなり、「ペンキ」が自然にはげたという場合にも、誰かが「ペンキ」を擦ることにより「はげた」という場合にも使える。しかし、問題は外力がないと起こらない場合である。(32) のように、外力がないと「彼の足」が離脱しない場合は“掉”が用いられない。

(32)　＊因为 10 年　前　的　爆炸、他　的　腿　掉　　了。
　　から 10 年　前　の　爆発　彼　の　足　diao　　た
　　（10 年前の爆発で、彼の足がもげた。）
(33)　a.??（用大树雕成的一体的桌子）　桌子　腿儿　掉　了。
　　（木で作られた木彫りテーブル）机　　足　diao　た
　　（(木で作られた木彫りテーブル）机の足がもげた。）
　　b.（组装的桌子）　　桌子　　腿儿　掉　　了。
　　（組み立て式のテーブル）テーブル　足　　diao　た
　　（(組み立て式のテーブル）テーブルの足がとれた。）

この点について、(33) のような対比も存在する。(33a) は「木彫りテーブルの足」の例であり、「彼の足」と同様に、外力がないと離脱できないものであると考えられる。この場合には、“掉”が不自然である。一方、「組み立て式のテーブルの足」は、古くなる等の原因で離脱する可能性があり、つまり離脱する際に、外力が必ずしも存在するわけではない。この場合には“掉”の使用が可能である。以上から、外力がなければ離脱動作が起こらない場合は、“掉”を使いにくいと言える。このような離脱動作を中国語では、“V 掉”で表す、これについて、次章で議論する。

6. まとめ

本章では、中国語の離脱動詞を検討した。まず、中国語においては、離脱動作を“掉”と“落”で表現することができるが、“落”は「花、葉」の離脱動作のみを表し、文学性が強く、用法が限られるため、離脱動詞としては“掉”が多用されることを示した。従来移動動詞と扱われてきた“掉”は移動動詞のほか、離脱動詞である“掉”の用法も存在することを明らかにした。次に、文法的な振る舞いと日本語との対応から、離脱動詞の“掉”を検討した。“掉”の文法的な振る舞いに関しては、進行や開始を表す“着、正在、开始”と共起しないことを示した。このことから、“掉”は、過程性を持たない動詞であると考え、この点では日本語の離脱動詞と共通すると考える。また、共起する離脱物から“掉”と日本語の対応を検討し、日本語の各離脱動詞は、離脱物と離脱元の関係により使用

する動詞が使い分けられる一方、“掉”は、それらの離脱物を幅広く取ることができることを明らかにした。ただし、「疲れ、空気」などの抽象物を離脱物に取る場合と、外力がないと離脱が起こらない場合は、“掉”を使わないことを示した。

第６章
離脱動詞“V 掉”、及び“掉”“V 掉”と移動動詞、状態変化動詞との関係

1. はじめに

前章で述べたように、“掉”は日本語の離脱動詞と一対多の関係にあるが、外力がないと起こらない離脱動作を表せない。このため、(1) のような場合には、“掉”を用いることができない。

（１） a. 彼の足がもげた。

b.＊他　的　脚　掉　　了。

彼　の　足　diao　た

（２） a. 彼の足がもげた。

b. 他　的　腿　　被　　炸掉　　了。

彼　の　足　られる　　V（爆発する）diao　た

このような場合には、(2) のように“V 掉”で表す必要がある。本章では、中国語では、他動詞の離脱動詞“V 掉”があることを示し、日本語の離脱動詞との対応関係を考察する、さらに、“掉”“V 掉”が取れる構文を明らかにし、両者が離脱物の位置変化と離脱元の状態変化を焦点化できることを示し、移動動詞と状態変化動詞との共通点、相違点が存在することを指摘する。

2. “V 掉”と“掉”、日本語の離脱動詞との対応関係

まず、以下の文を見られたい。

（３） a. みかんの皮がむけた。

b.＊橘子　　皮　　掉　　了。

みかん　皮　　diao　た

（4）　a.　爆発で、彼の足がもげた。

b.＊因为　爆炸、他　的　脚　掉　　了。

から　爆発　彼　の　足　diao　た

(3) (4) が表す離脱動作は、外力を使用しないと起こらない事柄である。(3) は、一般的には、「みかんをむく」ことにより「皮がむけた」ということを引き起こし、自然に起こらない事柄である。また、(4) は、「爆発」が離脱の原因であるため、外力で起こる事柄である。このため、これらの場合では、“掉”を使用することができない。日本語の離脱動詞の文に対応する中国語の表現として、以下に示すように、“V 掉”が用いられる。“V 掉”は、ある動作 V を行い、対象物を離脱させることを表す他動詞であるが、受身形式を取り、対格を昇格することで、以下のように、日本語の自動詞の離脱動詞と対応する。

（5）　桔子　　皮　　被　　剥掉　　了。

みかん　皮　　られる　　V（剥く）diao　　た

（みかんの皮がむけた。）

（6）　他　的　腿　　被　　炸掉　　了。

彼　の　足　　られる　　V（爆発する）diao　た

（彼の足が爆発でもげた。）

(5) は、“剥（むく）”と組み合わさることで、「みかんの皮」が「むく」動作により離脱することを表している。(6) も同じく、“炸（爆発する）”と組み合わさって、「彼の足」が「爆発する」動作により離脱することを表す。いずれの場合も、“掉”の前に V を付加し、V という行為により、離脱動作が引き起こされることを表す。また、以下に示されるように、“V 掉”は他動詞であるため、自然に起きる離脱動作を表さない。

（7）　a.　踵の皮がカサカサになって、むけた。

b.＊后脚跟　的　皮　　干干的，　　被　　弄掉　　了。

踵　　の　皮　　カサカサ　　られる　　V（する）diao　た

(7b) は「踵の皮」がカサカサになり、自然に離脱した事柄である。このような場合は“V 掉”で表現することができない。よって、“掉”“V 掉”の使用は以下のようにまとめられる。

・“掉”: 自然に引き起こされる離脱事態を表し、外力がないと離脱できない離脱事態を表さない。
・“V 掉”: 外力で離脱させる離脱事態を表す。

このように、“掉”と“V 掉”は外力が必要であるかどうかという点で使い分けられている。一方、日本語の各離脱動詞においては、この特徴は弁別的な特徴ではない。

以下では、“V 掉”における V と“掉”の関係を確認しておきたい。まず、V と“掉”の関係が“致使（使役）”にあると考える。中国語では、“使”や“让”のような使役マーカーの他、“打破（打ち壊す)、哭湿（泣き濡らす)”のような結果複合動詞も使役の意を表すことが可能である。「使役」関係の捉え方は研究によってさまざまではあるが、本研究では「広義の概念であれ、狭義の概念であれ、『使役』は使役者のある行為によってある事物を変化させるという意味は変わらないと考えられる (楊 2014)」という立場を取る。つまり、V という行為によって離脱物を離脱させるという意味を表す。そこで、どのような動詞が V に来るかを検討するため、“北京大学中国语言学研究中心 CCL”コーパスで“掉”を検索した。“V 掉”の例を 200 件確認した結果、“逃掉（逃げる＋diao)、跑掉（走る＋diao)”のような「非能格動詞＋diao」、“烂掉（腐る＋diao)、冷掉（冷める＋diao)”のような「非対格動詞＋diao」、“除掉（取り除く＋diao)、吃掉（食べる＋diao）[41]”のような「他動詞＋diao」の件数が多かった。そのうち、離脱を表す“V 掉”は“敲掉、摘掉”のような「他動詞＋diao」がほとんどである。その他、“吹掉（拭く＋diao)”と“笑掉（笑う＋diao)”はそれぞれ 1 件が存在し、

[41] 離脱を表す“V 掉”と同じ構造を持つように見えるが、消滅を表す“V 掉”であると考える。6 節で述べるが、劉 (2007) に従い、このような“V 掉”を「客体消失」であると考え、離脱動詞（劉 (2007) では「客体脱離」）と区別する。また丸尾 (2017) の指摘にあるように、“掉”が“了”と同様に完了を表す点から、文法化したものであると考える。

「非能格動詞＋diao」に当たるものである。そのうち、“笑掉大牙（大いに笑われる）”は慣用句であるため、例外であると考える。また、“吹掉（吹く＋diao）”は、以下のように、風が吹くことでシャツのボタンがとれたという場面を表す場合には使うことができる。

（8） a. 衬衫 的 扣子 被 吹掉 了。
シャツ の ボタン られる V（吹く）diao た
b. 衬衫 被 吹掉 了 扣子。
シャツ られる V（吹く）diao た ボタン

この場合には、V は他動詞とは言いにくいが、離脱物が自然に離脱するのではない点で“撕掉（はがす＋diao）、摘掉（ちぎる＋diao）”などと共通する。また、CCL で“吹掉（吹く＋diao）”を検索すると、4 例が見られ、そのうち、古語である 1 例を除き、残り 3 例はすべて“被”や“给”など受身や使役マーカーを使用するものである。このため、この場合の“V 掉”は他動詞であると考えられる。

また、200 例の中には見られなかったが、以下のように、離脱を表す“磕掉（ぶつかる＋diao）”が存在する。(9) のような“V 掉”は“被”が用いられずとも容認できる点で自動詞的な用法であると考える。

（9） a. 他 的 牙 （被） 磕掉 了。
彼 の 歯 （られる） V（ぶつかる）diao た
b. 他 （被） 磕掉 了 牙。
他 （られる） V(ぶつかる)diao た 歯

この場合は、無意志的な動作である「ぶつかる」という行為により、「歯」の離脱が起きることを表すと考えられる。ただし、これは (8) と同様に、V は他動詞ではないが、離脱物が自然に離脱することができない点から、外力が必要であると考える。以上から、“V 掉”における V は一般的には他動詞であるが、(8) (9) のように離脱を引き起こす外部の要因を表す自動詞もわずかではあるが存

在する。いずれも離脱物が自然に離脱しないという点でVが必要であると考え、上記のVを合わせて外力と呼ぶことにする。さらに、Vが自動詞である例について、CCLの“V掉”の500件を確認したところ、離脱を表す“V掉”で(9)のような自動詞と見なせるものは、管見の限り“磕掉”と慣用句的な用法である“笑掉（笑う＋diao)”“老掉（老いる＋diao)”のみであった。このため、離脱を表す“V掉”はほぼ他動詞の用法であると考える。

次に、離脱物との共起から“V掉”を見ると、“掉”と同様に、日本語の各離脱動詞が取る離脱物をほとんど取ることが可能であることがわかる。

(10)　书　的　封皮　被　撕掉　了。
　　本　の　表紙　られる　V（はがす）diao　た
　　(本の表紙がはがしとられた。)

(11)　妆　被　蹭掉　了。
　　メイク　られる　V（擦る）diao　た
　　（メイクがこすり落とされた。)

(12)　头发　被　拔掉　了。
　　髪の毛　られる　V（抜く）diao　た
　　(髪の毛が抜かれた。)

(13)　自行车　的　链子　被　扯掉　了。
　　自転車　の　チェーン　られる　V（引っ張る）diao　た
　　（自転車のチェーンが引っ張り取られた。)

(14)　后脚跟　的　皮　被　撕掉　了。
　　踵　の　皮　られる　V（むく）diao　た
　　（踵の皮がむかれた。)

(15)　桌子　漆　被　磨掉　了。
　　机　ペンキ　られる　V（擦る）diao　た
　　（机のペンキがこすり取られた。)

以上から、中国語において、“V掉”という離脱動詞が存在し、一般的には他動詞の用法しか持たないが、日本語の自動詞の離脱動詞に対応することを明ら

かにした。また、日本語の各離脱動詞は、離脱物と離脱元の関係により使い分けられるのに対し、中国語の離脱動詞は表す事態が外力により引き起こされるかどうかという離脱事態の起因によって使い分けられる。

また、“V 掉”は、以下のように「疲れ、空気」といった抽象物が離脱物である場合は離脱動作と捉えにくい。

(16) a. 水分　被　　挤掉　　了。
水分　られる　V（搾る）diao　た
（水分が搾られた。）

b. 气球　的　气　　被　　放掉　　了。
風船　の　空気　られる　V（放す）diao　た
（風船の空気が開け放された。）

c. 疲劳感　被　　消除掉　　了。
疲労感　られる　V（除く）diao　た
（疲労感が除かれた。）

そして、(16) の場合は、以下のように“掉”を削除しても同じ意味を表す。このため、この場合の“掉”は文法化されており、完了を表すと考える。

(17) a. 水分　被　　挤　了。
水分　られる　搾る　た
（水分が搾られた。）

b. 气球　的　气　　被　　放　了。
風船　の　空気　られる　放す　た
（風船の空気が開け放された。）

c. 疲劳感　被　　消除　了。
疲労感　られる　除く　た
（疲労感が除かれた。）

離脱動詞である“V 掉”は、“掉”を削除すると意味が変わってしまう。(18a) は、「表紙」が「はがす」動作によって「本」から離脱することを表す。一方、“掉”を削除した (18b) は、「表紙」が破られたということを表し、「本」から離脱しなくても良い。(19) も同様である。(19a) は「チェーン」が「引っ張る」動作により「自転車」から離脱することを表す。それに対し、(19b) は「チェーン」が引っ張られたということのみを表し、「自転車」から離脱しなくても良い。このことから離脱動詞である“V 掉”における“掉”は、位置変化の意味を含むと考える。

(18) a. 书 的 封皮 被 撕掉 了。
本 の 表紙 られる V（はがす）diao た
（本の表紙がはがしとられた。）
b. 书 的 封皮 被 撕 了。
本 の 表紙 られる はがす た
（本の表紙が破られた。）

(19) a. 自行车 的 链子 被 扯掉 了。
自転車 の チェーン られる V（引っ張る）diao た
（自転車のチェーンが引っ張り取られた。）
b. 自行车 的 链子 被 扯 了。
自転車 の チェーン られる 引っ張る た
（自転車 の チェーンが引っ張られた。）

3. “掉”“V 掉”が取る構文について

本節から、離脱動詞である“掉”“V 掉”が取る構文を確認する。まず、中国語の離脱動詞の例を再び見られたい。

(20) a. 兔子 的 毛 掉 了。
うさぎ の 毛 diao た
（うさぎの毛がぬけた。）

b. 后脚跟　的　皮　掉　　了。

踵　　の　皮　diao　た

（踵の皮がむけた。）

(21)　a. 布娃娃　　的　头　　被　　拧掉　　了。

ぬいぐるみ　の　頭　られる　V（もぐ）diao　た

（ぬいぐるみの頭がもがれた。）

b. 键盘　　的　回车键　　被　　抠掉　　了。

キーボード　の　エンターキー　られる　V（引っ掻く）diao　た

（キーボードのエンターキーが落とされた。）

(20a) は「毛」が「うさぎ」から位置変化することを意味するのに加え、「うさぎ」の「毛」がなくなったという状態変化も含まれる。(20b) と (21) も同様に考えられる。例えば、(20b) には、「皮」の位置変化と「踵」の状態変化が含まれる。また、(21a) には「頭」の位置変化と「ぬいぐるみ」の状態変化が含まれる。(21b) には「エンターキー」の位置変化と「キーボード」の状態変化が含まれる。上記のように、意味的な観点から見ると中国語の離脱動詞は日本語と同様に、以下の 2 つの事象を含むと考えられる。

(22)　事象Ⅰ：離脱物が離脱元から位置変化する。

事象Ⅱ：離脱物がなくなることで離脱元が状態変化する。

構文から見ると、以下のように、“掉”“V 掉”は「離脱物＋V」「離脱元＋V」を取ることができる。以下の (a) は「離脱物＋V」の文であり、(b) は、「離脱元＋V」の文である。

(23)　a. 兔子　　的　毛　　掉　　了。

うさぎ　の　毛　　diao　た

（うさぎの毛がぬけた。）

b. 兔子　掉　了　一撮　毛。
うさぎ　diao　た　一つまみ　毛
（うさぎは毛が一つまみぬけた）

(24) a. 布娃娃　的　头　被　拧掉　了。
ぬいぐるみ　の　頭　られる　V（もぐ）diao　た
（ぬいぐるみの頭がもがれた。）

b. 布娃娃　被　拧掉　了　头。
ぬいぐるみ　られる　V（もぐ）diao　た　頭
（ぬいぐるみは頭をもがれた。）

「離脱物＋V」の形を取る (a) の文は、離脱物を焦点化し、離脱物が離脱元から位置変化することを表す。(23a) (24a) は、離脱物である「うさぎの毛、ぬいぐるみの頭」が「うさぎ、ぬいぐるみ」からなくなったという位置変化を表す。一方、(b) の文は、離脱元を焦点化し、離脱物がなくなることで、離脱元が状態変化することを表す。(23b) (24b) は、離脱元である「うさぎ、ぬいぐるみ」の状態変化を表す。「離脱物＋V」と「離脱元＋V」構文について、動詞が表す事象と合わせて考えると、「離脱物＋V」は事象Ⅰ、「離脱元＋V」は事象Ⅱを焦点化すると考えられる。行為連鎖の意味構造で表示すると以下のようになる。他動詞である“V 掉”はある行為により離脱動作を起こすため、(26) のように、〈行為〉を連鎖に加える。

(25)

	〈移動物の動き〉	→	〈場所の結果状態〉
「離脱物＋V」	○		
「離脱元＋V」			○

(26)

	〈行為〉	→	〈移動物の動き〉	→	〈場所の結果状態〉
「離脱物＋V」			○		
「離脱元＋V」					○

以上をまとめると、“掉”“V 掉”は、離脱物、離脱元のいずれも主語に立つことができ、どちらが主語であるかにより、離脱物の位置変化か、離脱元の状態変

化のどちらを焦点化するかが変わってくる。従って、“掉”“V 掉”は交替型であると捉えられる。以下では、「離脱物＋V」と移動動詞、「離脱元＋V」と状態変化動詞の関係を検討していく。

4. 「離脱物＋V」と移動動詞について

前述したように、「離脱物＋V」を取る文は、離脱物の位置変化を焦点化することから、本節では、「離脱物＋V」を移動動詞と比較する。

以下の文は、意味的に考えると、離脱物の位置変化と離脱元の状態変化の両方の事象を表すが、構文的な表れとしては、離脱物が主語であるため、離脱物の位置変化を焦点化している。

(27) a. 兔子 的 毛 掉 了。
うさぎ の 毛 diao た
（うさぎの毛がぬけた。）

b. 后脚跟 的 皮 掉 了。
踵 の 皮 diao た
（踵の皮がむけた。）

(28) a. 布娃娃 的 头 被 拧掉 了。
ぬいぐるみ の 頭 られる V（もぐ）diao た
（ぬいぐるみの頭がもがれた。）

b. 键盘 的 回车键 被 抠掉 了。
キーボード の エンターキー られる V（引っ掻く）diao た
（キーボードのエンターキーが落とされた。）

(27) (28)はそれぞれ“掉”“V 掉”の例を挙げている。(27a) は、意味的に考えると、「うさぎの毛」が「うさぎ」からなくなったという位置変化を表すのに加え、「うさぎ」の「毛」がなくなった状態変化も表す。構文的には、離脱物である「うさぎの毛」が主語であるため、「毛」の位置変化が焦点化される。(27b) も同様である。(28) の“V 掉”に関しても“掉”と同じく、意味的には 2 つの事象を含むが、構文的には、離脱物を主語に取るため、離脱物の位置変化を焦点化す

る。

以下では、「離脱物＋V」を取る“掉”“V 掉”と位置変化のみを含む移動動詞との違いを検討する。中国語の移動表現について、呉 (2000) では以下のような指摘がある。

> 移動とは時間の経過に伴って起こる物体の位置の変化である。従って、移動体・位置変化・移動時間は移動三要素といわれている。しかし、言語で移動を表現するとき、その三要素をすべてならべだすわけではない。
>
> ［中略］
>
> 位置変化の有無を計る基準物は移動体の移動軌跡を記する場所で[42]、その場所は普通、移動の起点・通過点（通過部分）・到着点の三点に集約される。 (呉 2000: 167)

さらに、呉 (2000) は、移動動詞を文中に用いたときには、移動軌跡の一点だけを補えば、移動表現は成立すると指摘する。しかも、その移動軌跡の要素は基本的には必須であると述べている。また、起点、到着点、通過点をそれぞれ補う必要がある動詞をそれぞれ「出発型（以下「起点指向移動動詞」と呼ぶ)」、「到達型」、「通過型」移動動詞としている (呉 2000:168-169)[43]。このように、起点指向移動動詞は、起点が移動軌跡の一点として顕在する必要があり、物が起点から移動することを表すと考える。これらの動詞は、物の位置変化の出発段階を表す点で「離脱物＋V」を取る離脱動詞“掉”“V 掉”と共通すると考えられるため、以下では、“掉”“V 掉”を起点指向移動動詞と比較する。

---

[42] 呉 (2000) では、「移動軌跡」に関する具体的な説明が見当たらないが、物がどこから出発し、どこを通り、どこに到達するかなど、物が移動する際に残された跡が移動軌跡であると考えられる。

[43] 移動動詞は、物の移動軌跡の一点を補う必要があるが、二つの場合が例外であるとされている。一つは、“请进（お入りください)”のような命令形は除外される。呉 (2000) は、“请进”の元の形式が“请进来”“请进去”といった方向補語を付けた形であるとしている。このことから、“请进”は話者の視点とかかわるため、着点が顕在しなくても文は成立すると考える。また、もう一つは、「到着型」の“来”と“去”である。これも話者の視点と関わるため、着点が顕在しなくても文は成立するとしている。詳細は、呉 (2000) を参照されたい。

(29)　a.　他　离开　　学校　了。

　　彼　はなれる　　学校　た

　　（彼は学校からはなれた。）

　b.　他　下　　车　了。

　　彼　降りる　　車　た

　　（彼は車から降りた。）

(30)　a.　他　从　　学校　离开　　了。

　　彼　から　学校　はなれる　た

　　（彼は学校からはなれた。）

　b.? 他　从　　公交车　上　下　　了。

　　彼　から　バス　　上　降りる　た

　　（彼はバスから降りた。）

(29) (30) は典型的な起点指向移動動詞の例である。いずれも「彼」が起点である「学校、車」から移動することを表す。(29) は移動動詞の後ろに起点を示す場所名詞を付加し、(30) は、日本語のカラ格に相当する“从”を用い、起点を明示する。このように、起点指向移動動詞における起点の示し方は、「V＋トコロ」と「从＋トコロ＋V」がある。また、姚 (2008) は、起点指向移動動詞の場合は、起点を示す形式として、「从＋トコロ＋V」という介詞構造より、「V＋トコロ」形式が適合すると述べている。

一方、離脱動詞の事情は異なる。“掉”“V 掉”は離脱物の出発段階のみを表すという点では起点指向移動動詞と共通するが、起点の示し方において差異が見られる。

(31)　a.＊兔子　　毛　　掉　　兔子　（上）　　了。

　　うさぎ　毛　diao　うさぎ（上）　　た

　　(?うさぎの毛がうさぎからむけた。)

　b.＊干　　皮　　掉　　嘴唇　上　了。

　　カサカサ　皮　diao　唇　上　た

　　(??カサカサの皮が唇からむけた。)

c.＊头　被　　拧掉　　了　布娃娃。

頭　られる　V（もぐ）diao　た　ぬいぐるみ

（頭がぬいぐるみからもがれた。）

d.＊回车键　　被　　抠掉　　了　　键盘。

キーボード　　られる　V（引っ掻く）diao　た　　エンターキー

（エンターキーがキーボードから落とされた。）

(32)　a.??桌子腿　　从　　桌子上　　掉　　了。

机の足　　から　　机の上　　diao　　た

（足が机からとれた。）

b.??干　　皮　从　　嘴唇　上　掉　　了。

カサカサ　皮　から　唇　　上　diao　　た

（??カサカサの皮が唇からむけた。）

c.??头　被　　从　　布娃娃　　身　上　拧掉　　了。

頭　られる　から　ぬいぐるみ　体 上　V（もぐ）diao　た

（頭がぬいぐるみからもがれた。）

d.??回车键　　被　　从　　键盘　　上 抠掉　　了。

エンターキー られる　から キーボード 上 V（引っ掻く）diao た

（エンターキーがキーボードから落とされた。）

(31) は、“掉”“V 掉”が「V＋トコロ」を取る文であり、いずれも不自然である。(32) は、「从＋トコロ＋V」を取る文であり、いずれもかなり不自然である[44]。このように、“掉”“V 掉”は、「V＋トコロ」、「从＋トコロ＋V」という起点の形式とは共起しないことがわかる。それは、離脱動詞は、離脱物と離脱元の関係が「全体―部分」にあることから、“掉”“V 掉”の起点は「離脱元“的”離脱物」で表されるためである。これは日本語の「離脱元の離脱物」の形式に相当する。ただし、中国語においては、所属を示す“的”は省略される場合がある。以下のように、離脱動詞においても、省略される場合は多々ある。

[44] 離脱の“掉”が“从”と共起する例に関する判断は揺れが見られ、やや不自然「?」という内省も存在するが、起点指向の移動動詞と比較すると離脱の方が落ちるということが確認できた。

(33)　书　皮　　掉　　了。
　　本　表紙　diao　た

以上から、“掉”“V 掉”は物の位置変化の出発段階を表すという点で移動動詞と共通するが、離脱元が動詞の後ろに付加されない点、“从”と共起すると許容度が低いという点において、起点指向の移動動詞と異なることがわかる。これは、次節で議論するが、離脱元は単純に離脱物の位置変化の起点ではなく、その所有者であるからであると考えられる。

5.　「離脱元＋V」と状態変化動詞について

前述したように、「離脱元＋V」を取る文は、離脱元の状態変化を焦点化する。本節では、「離脱元＋V」構文に関する先行研究を概観した上で、離脱動詞が取る「離脱元＋V」は増減型状態変化動詞と共通することを述べる。

まず、離脱動詞の文を見られたい。以下の文は、意味的に考えると、離脱物の位置変化と離脱元の状態変化を表すが、構文的な表れとして、離脱元が主語に立つことで、離脱元の状態変化を焦点化している。

(34)　a.　兔子　　掉　　了　一撮　　毛　。
　　うさぎ　diao　た　ひとつまみ　毛
　　（うさぎはひとつまみの毛がぬけた。）

　　b.　脚后跟　　掉　　了　　一块　　皮。
　　踵　　diao　た　一ヶ所　　皮
　　（踵は皮が一箇所むけた。）

　　c.　布娃娃　　被　　拧掉　　了　　头。
　　ぬいぐるみ　られる　V（もぐ）diao　た　　頭
　　（ぬいぐるみは頭をもがれた。）

　　d.　键盘　　被　　抠掉　　了　回车键。
　　キーボード　られる　V（引っ掻く）diao　た　エンターキー
　　（??キーボードはエンターキーを落とされた。）

(34ab) は“掉”の例、(34cd) は“V 掉”の例である。意味的に考えると、(34ab) は、「うさぎの毛、踵の皮」が「うさぎ、踵」からなくなったという位置変化を表すのに加え、「うさぎ、踵」の「毛、皮」がなくなったという状態変化も表す。構文的には、離脱元である「うさぎ、踵」が主語に立つことで、離脱元の状態変化を焦点化する。(34cd) の“V 掉”も“掉”と同じく、意味的には 2 つの事象を含むが、離脱元を主語に取る構文により、離脱元の状態変化が焦点化される。

離脱動作は離脱物の離脱により引き起こされる動作であると考えられるため、基本的には離脱物が主語に立つが、離脱元が主語に立つ文も存在する。馬 (1992) は、このような文を「主体が目的語に来る構文」とし、文頭の名詞が時間や場所、または動詞の後の名詞の所有者であり[45]、文末名詞が「動作主、変化の主体あるいは性質変化の主体である[46]」と述べ、さらに、文中に用いられる述語は (35) の 3 種類があるとしている。

(35)

a. 移動動詞、有無や出現または消失を表す動詞：

来（来る）、去（行く）、出来（出る）、跑（逃げる）、飞（飛ぶ）、溜（逃げる）、死（死ぬ）、生（生む）、短（足りなくなる）、少（減る）

b. 状態を表す動詞（以下では状態動詞）：

坐（座る）、躺（横になる）、蹲（しゃがむ）、站（立つ）、趴（はいつくばる）、睡（寝る）、挤（押し合う）、挂（かかる）、搁（置く）、放（置く）、点（つける）、写（書く）、画（描く）、盖（かぶる）、夹杂（混ざる）

c. 性質変化を表す一部の形容詞：

坏（壊れる）、臭（臭い、腐る）、烂（腐る）、红（赤い、赤くなる）、黄（黄色い、黄色くなる）

(馬 1992: 96（日本語訳は本論文筆者による）)

---

[45] 馬 (1992) は「所持者」としているが、本論文は「所有者」と呼ぶことにする。

[46] “博物馆来了一个访客（博物館に一人の客が来た）”における“访客（客）”は動作主であり、“海里沉了一艘船（海には船が一艘沈んでいる）”における“船（船）”は変化の主体であるであるとしている。

馬 (1992) では (a) のように移動動詞としながら、“死（死ぬ)、生（生む)、少（減る）”のような性質が異なる動詞が混在している。本研究は、“死、生、少”といった動詞は物の状態や数量の変化を表すという点から、移動動詞と異なり状態変化動詞であると考える。そして、(c) の形容詞は物の状態変化を表すため、状態変化動詞に入れる。以下では、文頭名詞の観点から、移動動詞、状態動詞、状態変化動詞を離脱動詞と比較する。移動動詞と状態動詞の場合は、(36a) のように、場所を表す名詞、または (36b) のように、「物＋方位詞」を文頭名詞に取る。そして、(36c) に示すように、「物＋方位詞」の場合は方位詞が不可欠である。このように、移動動詞の場合は、文頭名詞が場所として機能すると考える。

(36) a. 博物馆　来　　了 一个　访客。　【場所を表す意味を含んだ名詞】
博物館　来る　た　一人　客
（博物館に一人の客が来た。）
b. 桌子 上　放　　了　一支　笔。　【名詞＋方位詞】
机　　上　置く　た　一本　ペン
（机の上にペンが一本置いた。）
c.＊桌子　放　　了　一支　笔。
机　　置く　た　一本　ペン

それに対し、状態変化動詞は、(37a) のように、方位詞を付加できない名詞を取ることが可能である。また、(37b) のように、方位詞を付けた場合においても、省略可能である。このように、状態変化動詞の場合は、文頭名詞が場所化する必要がなく、所有者として機能すると考える。

(37) a. 他　少　　了　一条　胳膊。　（＊他上（面）/ 里（面））
彼　減る　た　一本　腕
（彼は腕が一つなくなった。）
b. 衣服（上）　少　　了　一颗　扣子。
服　（上）　減る　た　一つ　ボタン
（服はボタンが一つ少なくなった。）

さらに、離脱動詞の場合は、(37a) に示すように、「彼」のような方位詞を付加できない名詞を文頭に取ることができる。そして、(37b) のように、「物＋方位詞」を取る場合は、方位詞が省略可能である。この点から、離脱動詞は状態変化動詞に近いと考えられる。以上から、離脱動詞の文頭名詞、すなわち離脱元は移動動詞のような場所ではなく、状態変化の主体としての所有者の機能を果たしていると考える。

(38)　a.　他　掉　了　一撮　头发。　（＊他上（面）/ 里（面））
　　彼　diao　た　ひとつまみ　髪
　　(彼の髪がひとつまみぬけた。)
　　b.　脚后跟（上）　掉　了　一块　皮。
　　踵　（上）　diao　た　一か所　皮
　　（踵は皮一か所がむけた。）

また、離脱動詞は以下の増減型変化動詞と相似した構文を取る。張 (2009) では、増減型変化動詞は、「当事者の一部分、または量が増減する」ことを表すとされている。このことから、増減型変化動詞は物の状態変化を表す動詞の一種であると考えられる。

(39)　増減型変化動詞：当事者＋変化＋数量／内容　(張 2009: 28)
(40)　a.　体重　减　了　两公斤。　(張 2009: 28)
　　体重　减る　た　2 キロ
　　（体重が 2 キロ減った。）
　　b.　他　家　添　了　孙子。
　　彼　家族　増える　た　孫
　　（彼は孫が増えた。）

(40a) は、「体重」が「2 キロ」が減ったという体重の変化を表し、(40b) は「孫」が増えたという「彼の家族」の変化を表す。以下の (41) を見ると、離脱の“掉”“V 掉”も同様の意味を表す。

(41) a. 桌子　掉　了　漆。

机　diao　た　ペンキ

（机のペンキがはげた。）

b. 衣服　掉　了　一颗　扣子。

服　diao　た　ひとつ　ボタン

（服のボタンがひとつとれた。）

c. 布娃娃　被　拧掉　了　头。

ぬいぐるみ　られる　V（もぐ）diao　た　頭

（ぬいぐるみは頭をもがれた。）

d. 键盘　被　抠掉　了　回车键。

キーボード　られる　V（引っ掻く）diao　た　エンターキー

（??キーボードがエンターキーを落とされた。）

(41a) は、離脱元である「机」の構成部分である「ペンキ」がなくなったという「机」の状態変化を表し、(41b) は、離脱元である「服」の構成部分である「ボタン」が 1 つなくなることで、服の状態変化を表す。(41cd) も同様であり、離脱元の状態変化を表す。このように、“掉”“V 掉”には離脱物がなくなることで、離脱元が状態変化するという意味があると言える。以上から、“掉”“V 掉”は、離脱物の所有者である離脱元の状態変化を表すと考え、そして、物の状態変化を表す点では状態変化動詞と共通性があると考える。

一方、増減型状態変化動詞は、物の増減という状態変化を表すため、増減した部分は消失したり、出現したりするが、位置変化により起こされる動作ではない。このため、以下のように、増減された部分が主語になる場合は、表す意味が異なってくる。

(42) a. 衬衫　少　了　扣子。

シャツ　少なくなる　た　ボタン

（シャツはボタンが少なくなった。）

b. 衬衫　的　扣子　少　了。
シャツ　の　ボタン　少なくなる　た
（シャツのボタンが少なくなった。）

(42) の文はいずれも成立するが、意味が異なる。(42a) は、シャツに付着していた「ボタン」の量が少なくなったということを表すが、(42b) は、単に、ボタンの量が少なくなったことを表し、「シャツ」に付着していない「シャツのボタン」の量が減少すると解釈されやすい。一方、離脱動詞は、これまで議論してきたように、「離脱物＋V」「離脱元＋V」の置き換えが可能である。

6. その他の“V 掉”について

6.1 “V 掉”の先行研究

“V 掉”における“掉”の文法的意味をめぐる研究は豊富であり、“掉”が表す文法的意味という観点から、“V 掉”を分類している。主要なものを以下のようにまとめる。

呂 (1984) は、単音節動詞である“掉”は、“动结式（動詞＋結果補語）”の第二成分を担うことが可能であるとし、他動詞の後ろに付加した場合は「除去」を表し、自動詞の後ろに付加した場合は「はなれる」の意味を表す、としている。

周 (1999) は、“掉”は他動詞につけた場合は、物体がある特定の主体から離脱することを表し、自動詞につけた場合は、動作主のみに関与し、動作主がある空間から離脱することを表すとしている。そして、周 (1999) は“V 掉”の文法的意味は「完成」に帰結することができるとしている。

劉 (2007) では、“V 掉”の“掉”には「掉 1：客体脱離」、「掉 2：客体消失（主体消失も含め）」、「掉 3：出来事の完成、状態変化」という三種類の文法的意味があるとされ、そのうち、“掉 2、3”は“掉 1”から派生したものであると述べられている。

丸尾 (2017) は、“V 掉”の従来の先行研究はそれぞれ異なる部分があるが、

以下のようにまとめられるとしている[47]。

補語“掉”の表す文法的意味については研究者によって表現の異同は見られるものの、先行研究に基づいて大きく次の 3 つに区分できる。

i）移動（“位移/离开/脱离”）
（「変位/離れる/離脱」）
ii）結果（“去除/消失”）
（「除去/消失」）
iii）完了（“动作过程的完成/事件完成”）
（「動作過程の完了/出来事の完了」）
(丸尾 2017: 48（日本語訳は本論文筆者による）)

以下では、例文と合わせて、先行研究の分類を整理していく。

(43) a. 那家伙 溜掉 了。
あいつ V（逃げる）diao た
（あいつが逃げてしまった。） (周 1999: 62)
b. 气 得 谢队长 拔起 腿 走掉 了。
怒る de 謝キャプテン 引き抜く 足 V（歩く）diao た
（謝キャプテンが怒って、歩いていった。） (劉 2007: 134)
(44) a. 他 把[48] 芭比娃娃 的 头 拧掉 了。
彼 を バービー人形 の 頭 V（もぐ）diao た
（彼はバービー人形の頭をもいだ。）

[47] 丸尾 (2017) は、“V 掉”は従来記述されていない「完遂義（動作の完全な遂行）」という文法的な意味を持つとし、従来記述されていた“V 掉”の文法的意味である「結果（除去・消失）」と「完了（動作過程の完成・出来事の完成）」とも関連すると指摘している。ただし、“V 掉”の「完遂義」の用法は南方方言の影響が強いとされていることが多いため、本研究は、「完遂義」の典型的な例 (46a) を対象外とする。
[48] “把”は目的語に対して処置を加えたり、何らかの結果を生じさせたりすることを表す。

b. 李芒　　全身　的　怒火　都　　燃烧　起来，
李芒さん　全身　の　怒り　全て　燃え　ている
奋力　　一　　脚　踢掉　　了　他的枪！
力を入れて　一つ　足　V（蹴る）diao　た　彼のピストル
（李芒さんは烈火のごとく怒り、足に力を入れて、彼のピストルを蹴落とした。）　(劉 2007: 134)

(45)　a. 他　把　我　的　饭　　吃掉　　了。
彼　を　私　の　ご飯　V（食べる）diao　た
（彼は私のご飯を全部食べてしまった。）

b. 花费　　了　几代人　心血　　建造　　的　　塔房
かかる　た　何世代　心尽くし　建造する　の　タワーハウス
就　　这样　　一把　火　都　　烧掉　　了。
ただ　このような　一束　火　全て　V（燃やす）diao　た
（何世代もの人々が心尽くして建造したタワーハウスはこの火で全て燃やしてしまった。）　(劉 2007: 134)

(46)　a. 他　答应　母亲　2006 年　一定　把　房子　买掉，
彼　約束　母親　2006 年　必ず　を　家　　V（買う）diao
把　婚　　结掉，　　把　孩子　　生掉。
を　婚姻　V（結婚）diao　を　子供　　V（うむ）diao
（彼は母親の求めに応じて、2006 年に必ず家を買って、結婚して、子供を生むことにした。）　(劉 2007: 135)

b. 菜　　冷掉　　了。
料理　V（冷める）diao　た
（料理が冷めてしまった。）　(丸尾 2017: 56)

(43) の“V 掉”において、V を担う動詞は、自動詞の移動動詞であるため、呂 (1984)、周 (1999) では、「離れる」の意味を表す類に分類される。これは、劉

(2007) では、上位の「客体消失」の下位分類である「主体消失」に分類され[49]、丸尾 (2017) のまとめから見ると、i) 移動(“位移/离开/脱离”) に入ると考える。(44) (45) において、V を担う動詞は他動詞であるため、呂 (1995)、周 (1999) では、「除去」を表す類に入れられる。また、劉 (2007) では、(44) (45) を分けて考察し、(44) は、「客体脱離」と呼ばれ、ある外力により、客体（離脱物）が元に付着していた基体（離脱元）から離脱して、さらに下へ落ちることを表すとされている。一方、(45) は、ある外力により客体が消失することを表すとされ、下位「客体消失」と呼ばれている。丸尾では、(44) が、ii) 結果(“去除/消失”) に分類され、(45) (46) は同類と扱われ、iii) 完了(“动作过程的完成/事件完成”) に分類されている。劉 (2007) は、(46) を「出来事の完成、状態変化」に入れ、(46ab) をそれぞれ「出来事の完成」、「状態変化」であると述べている。

上記の“V 掉”の分類に関する先行研究を表 5 にまとめる。

表 5　“V 掉”の分類に関する先行研究

	呂 (1984)	周 (1999)	劉 (2007)	丸尾 (2017)
(43)	「はなれる」類	「はなれる」類	「主体消失」類	「移動」類
(44)	「除去」類	「除去」類	「客体脱離」	「結果」類
(45)			「客体消失」	「完了」類
(46)	—	—	「出来事の完成、状態変化」類	

以上から、先行研究は、“掉”の文法的な意味という観点から“V 掉”を整理しているが、それぞれの説明には食い違いが生じている。本論文では、位置変化、状態変化の有無という観点から、各“V 掉”を整理し、“V 掉”の各用法が連続している可能性を提示する。

[49] 劉 (2007) では、「客体消失」が「客体消失」と「主体消失」に分けられている。上位分類と下位分類は同じ名称を使用しているが、本論文では、「客体消失」を用いる場合は、上位、下位を付けて説明する。

6.2 離脱動詞である“V 掉”

前節での整理を見ると、離脱の意味を表す“V 掉”は (47) (＝(44)) のみである。

(47) a. 他 把 芭比娃娃 的 头 拧掉 了。
彼 を バービー人形 の 頭 V（もぐ）diao た
（彼はバービー人形の頭をもいだ。）

b. 李芒 全身 的 怒火 都 燃烧 起来，
李芒さん 全身 の 怒り 全て 燃え ている
奋力 一 脚 踢掉 了 他的枪！
力を入れて 一つ 足 V（蹴る）diao た 彼のピストル
（李芒さんは烈火のごとく怒り、足に力を入れて、彼のピストルを蹴落とした。） (劉 2007: 134)

劉 (2007) では、(47) のような例について、(48) と合わせて考察し、以下のように述べている。

(48) 家珍 脱掉 了 旗袍，
家珍さん V（ぬぐ）diao た チャイナドレス
也 和 我 一样 穿上 粗布衣服。
も と 私 同じ 着る 粗服
（家珍さんはチャイナドレスを脱いで、私と同じく粗服を着た。）
(劉 2007: 134)

(49) 李芒 全身 的 怒火 都 燃烧 起来，
李芒さん 全身 の 怒り 全て 燃え ている
奋力 一 脚 踢掉 了 他的枪！
力を入れて 一つ 足 V（蹴る）diao た 彼のピストル
（李芒さんは烈火のごとく怒り、足に力を入れて、彼のピストルを蹴落とした。） (劉 2007: 134)

この場合は“掉”は「客体脱離」を表し、ある外力の作用で、客体を元に付着した基体から離脱し、さらに下へ落ちることを表す。例えば、(6)［＝(48)］は、「脱ぐ」動作が発生する前には、客体「チャイナドレス」は基体である「家珍さん」の体に付着している。動作が発生すると、客体「チャイナドレス」が体から離脱し、下へ向かって、落ちる。動作の終了後、「チャイナドレス」が再び他の基体に付着する。(49) も同様である。

(劉 2007: 134（日本語訳は本論文筆者による）)

しかし、(48) から見ると、「チャイナドレス」が「家珍さん」から離脱した後の動作については表現していない。そして、離脱した後に、下方向に落ちるということも、「チャイナドレス」を脱いだ後、常識的には下に落ちると考えられるためである。(49) も同様であると考えられる。本研究では、(48) (49) のような離脱の意味を表す“V 掉”は、離脱物が離脱した後の動作を表さないと考える。例えば、以下の例では、「うさぎの毛」が「うさぎ」から離脱した後に、下方向に落ちるということと、他の基体に付着することがあるとは考えにくい。

(50)　兔子　毛　被　拔掉　了。
　　うさぎ　毛　られる　V（抜く）diao　た
　　（うさぎの毛が抜かけた。）

6.3　位置変化、状態変化の有無とその他の“V 掉”

6.1 節で示した (43) ～ (46) から離脱動詞である“V 掉”を除くと、以下の 3 類が残される。

(51)　a.　那家伙　溜掉　了。
　　あいつ　V（逃げる）diao　た
　　（あいつが逃げてしまった。）　(周 1999: 62)

　　b.　气　得　谢队长　拔起　腿　走掉　了。
　　怒る de　謝キャプテン　引き抜く　足　V（歩く）diao　た
　　（謝キャプテンが怒って、歩いていった。）　(劉 2007: 134)

(52) a. 他 把 我 的 饭 吃掉 了 。 (＝(45))

彼 を 私 の ご飯 V（食べる）diao た

（彼は私のご飯を全部食べてしまった。）

b. 花费 了 几代人 心血 建造 的 塔房

かかる た 何世代 心尽くし 建造する の タワーハウス

就 这样 一把 火 都 烧掉 了。

ただ このような 一束 火 全て V（燃やす）diao た

(劉 2007: 134)

（何世代もの人々が心尽くして建造したタワーハウスはこの火で全て燃やしてしまった。）

(53) a. 他 瞎掉 了。

彼 V（失明する）diao た

（彼は失明してしまった。）

b. 菜 冷掉 了。

料理 V（冷める）diao た

（料理が冷めてしまった。） (丸尾 2017: 56)

以下では、位置変化、状態変化の有無からこの 3 類を検討していく。まず、(51) の類は、主体がある場所 A から、A 以外の場所に位置変化することを表す。呂 (1984) でも指摘されているが、この類の“V 掉”は「はなれる」という意味を表す。そして、周 (1999) では、“V 掉”は、話者が想定する空間から離れることを表すとされる。また、主体が離脱することにより、場所 A に何らかの状態変化が起きると考えにくいため、(51) 類は、位置変化のみを表すと考える。

次に、(52) 類を見ていく。(52a) は「私のご飯、タワーハウス」がなくなったことを表す。(52a) は「ごはん」が食べる動作により、ある状態からなくなった状態への変化を表し、(52b) は「タワーハウス」が燃やす動作により、ある状態からなくなった状態への変化を表す。そして、以下のように動詞の後ろに状態変化した量や部分を付加することができる。

(54)　a. 我　的　饭　　被　　吃掉　　了　一半。
私　の　ご飯　られる　V（食べる）diao　た　半分
（私のご飯が半分食べられた。）
b. 塔房　　被　　烧掉　　了　屋顶。
タワーハウス　られる　V（燃やす）diao　た　屋根
（タワーハウスの屋根が燃やされた。）

(54a) は、「私のご飯」の「半分の量」が減ったという状態変化を表し、(54b) は「タワーハウス」の「屋根」がなくなったという状態変化を表す。また、この場合の“V 掉”は、“掉”を削除しても同様の意味を表し、“了”と同様に、完了という意味を持つため、呂 (1984) も指摘しているように、文法化していると考えられる。ただし、この場合には、「屋根、半分の量」が位置変化すると考えにくいため、状態変化を表すと考える。

最後に、(53) 類を見られたい。(52) と同様に、“掉”が文法化し、あるものの状態変化が完成したという意味を表す。ただし、この場合は、“V 掉”における V が状態変化動詞であるため、“V 掉”の状態変化の意味は V から生じると考えられる。また、(53a) では、「彼」が「失明」したという状態変化を表し、(53b) では、「料理」が「冷めた」という状態変化を表しており、何かが位置変化すると考えられない。

このように、離脱動詞の“V 掉”も含め、位置変化、状態変化の有無から、各類の“V 掉”を表 6 にまとめられる。(52) (53) は位置変化を含まず、状態変化を含むという点で同様ではあるが、(52) は「他動詞＋掉」であり、(53) は「自動詞＋掉」であることに差異があると考える。このように、位置変化、状態変化の観点から“V 掉”を再検討する可能性が残る。

表 6　“V 掉”の位置変化、状態変化の有無

	(51)	離脱動詞“V 掉”	(52)	(53)
位置変化	○	○	×	×
状態変化	×	○	○	○

7. まとめ

本章では、中国語の離脱動詞には“掉”のほかに、“V 掉”が存在することを示した。また、日本語の離脱動詞は、離脱物と離脱元の関係によって動詞を使い分けるのに対し、中国語の離脱動詞は、表す事態が自然に起こるか、外力により引き起こされるかによって使い分けることを明らかにした。

また、中国語の離脱動詞は、「離脱物＋V」、「離脱元＋V」という構文により位置変化が焦点化されたものと状態変化が焦点化されたものに分けられることを指摘した。そのうち、「離脱物＋V」は物の位置変化の出発段階を表す点において、起点指向移動動詞と共通するが、“从”、「V＋トコロ」を取りにくい点において、起点指向移動動詞と異なる。「離脱元＋V」は、離脱元の状態変化を表す点で状態変化動詞と共通し、「離脱元＋V」と「離脱物＋V」が置き換えられる点においては異なることを示した。このように、「離脱物＋V」、「離脱元＋V」はそれぞれ移動動詞と状態変化動詞と共通点があることから、図 4 のように、離脱動詞は独自の一類であり、移動動詞、状態変化動詞と接点がある。

また、位置変化、状態変化の有無から、“V 掉”の各用法を再検討する可能性があることを述べた。

移動動詞	離脱動詞である “掉”“V 掉”: 「離脱物＋掉」	離脱動詞である “掉”“V 掉”: 「離脱元＋掉」	状態変化動詞

図 4　中国語の離脱動詞と移動動詞、状態変化動詞との関係

第 7 章

離脱動詞の日中対照

1.　はじめに

意味的に考えると、日本語の離脱動詞と中国語の離脱動詞は、「事象Ⅰ：離脱物の位置変化」と「事象Ⅱ：離脱元の状態変化」という 2 つの事象を表す。構文的に見ると、日本語の離脱動詞は、「おちる、とれる、ぬける、はずれる、もげる、むける、はがれる、はげる」があり、カラ格を取るか、結果補語を取るかにより離脱物の位置変化が焦点化された類と離脱元の状態変化が焦点化された類に分けられる。一方、中国語の離脱動詞は“掉”“V 掉”があり、いずれも「離脱物＋V」と「離脱元＋V」を取ることができ、「離脱物＋V」という構文を取ることで、離脱物の位置変化を焦点化し、「離脱元＋V」を取ることで、離脱元の状態変化を焦点化する。

また、日本語の位置変化が焦点化された類、中国語の「離脱物＋V」は、移動動詞と共通点、相違点を持ち、日本語の状態変化が焦点化された類、中国語の「離脱元＋V」は、状態変化動詞と共通点、相違点を持つということから、日中離脱動詞は一類の動詞をなし、移動動詞、状態変化動詞と接点がある。そして、両言語の離脱動詞は過程性を持たない点で共通している。前述したように、日本語の離脱動詞は過程性を持たず、瞬間的な動作を表す。中国語の場合は、“正在”“开始”“着”と共起しないことから、過程性を持たず、瞬間的な動作を表すと考える。以上から、過程性を持たない点で日中は共通すると言える。

しかし、位置変化、状態変化が焦点化された場合は、両言語の離脱動詞の振る舞いには差異が見られる。以下では、その差異を述べていく。

2.　位置変化が焦点化された場合

日本語では、位置変化が焦点化された類は、起点を示すカラ格を取ることができる。一方、中国語では、位置変化が焦点化された「離脱物＋V」は、カラ格に相当する“从”を取らない。

王 (2009) は、カラと“从”の用法に関する先行研究をまとめた上で、カラ格は“从”より意味用法が広いとしている。さらに、(1) (2)のような壁塗り交替構文において、日本語では、カラ格を使用するのに対し、対応する中国語では“从”を使用しない現象を取り上げ、中国語の場合は、場所の状態変化の意味しか表さず、“从”は不自然であると指摘している。

（1） a. 彼女はゴミ箱から生ゴミを空けた。

b.＊她　从　垃圾箱　倒空　了　垃圾。

彼女　から　ゴミ箱　空ける　た　ゴミ

c. 她　倒空　了　垃圾箱　里　的　垃圾。

彼女　空ける　た　ゴミ箱　中　の　ゴミ

（2） a. 彼女はゴミ箱を空けた。

b. 她　倒空　了　垃圾箱。

彼女　空ける　た　ゴミ箱

(王 2009: 48-49)

(1) は位置変化を表す文であり、日本語はカラ格を問題なく使用できるのに対し、(1b) に示すように、“从”を用いるとかなり不自然である。日本語の位置変化を表す文に対応する中国語は“从”を用いない (1c) になる。一方、状態変化を表す (2) は日中問題なく対応している。このように、位置変化を表す文において、起点を示すカラ格と“从”の使用には差異が存在する。離脱動詞が位置変化を表す場合も、(1) と同様の振る舞いが見られる。

（3） a. 表紙が本からとれた。

b.??封皮　从　书　上　掉　了。

表紙　から　本　上　diao　た

c. 书　的　封皮　掉　了。

本　の　表紙　diao　た

（4）　a.　エンターキーがキーボードからはずれた。

b.??回车键　　从　　键盘　　上　掉　　了。

エンターキー　から　キーボード　上　diao　た

c.　键盘　　的　回车键　　掉　　了。

キーボード　の　エンターキー　diao　た

日本語の場合には、構文的な表れとして、位置変化、状態変化の一方のみが焦点化され、位置変化が焦点化された類と状態変化が焦点化された類に二分される。このため、位置変化が焦点化された類の場合は、離脱元が離脱物の位置変化の起点として捉えられる。一方、中国語の場合は、“从”を使えないことから、状態変化の意味が位置変化より優先的であると考えられる。

以上から、日中の位置変化を焦点化する類は起点の示し方では対応しない例が見られることを明らかにした。その相違が生じる要因は、中国語では状態変化の意味が優先されるということである可能性があると考えられる。

3.　状態変化が焦点化された場合

日本語では、状態変化が焦点化された場合は、「離脱物ガ V」「離脱元ガ V」の構文を取ることができ、離脱物、離脱元のいずれの状態変化も表すことができる。中国語では、離脱元の状態変化が焦点化された場合は、「離脱元＋V」という構文を取る。このように、日中のいずれも、状態変化が焦点化された場合は、離脱元が主語に立つことができる。

しかし、離脱元が主語に立つ場合では、離脱物が構文に出現するかどうかという点で違いがある。日本語の場合は、離脱物が出現しないのに対し、中国語の場合は、離脱物を動詞の後ろに付加する必要がある。

（5）　a.　踵がむけた。

b.　メタルがはげた。

（6）　a.　脚后跟　掉　　皮　了。

踵　　diao　皮　た

（踵は皮がむけた。）

b.　金属　掉　膜　了。

メタル　diao　メッキ　た

（メタルはメッキがはげた。）

（7）　a.＊脚后跟　掉　了。

踵　diao　た

b.＃金属　掉　了

メタル　diao　た

日本語の場合、(5) のように、「皮、メッキ」が明示されていないが、「踵の皮、メタルのメッキ」が「むけた、はげた」という離脱動作により、「踵、メタル」が状態変化することを表す。中国語では (6) のように離脱物を動詞の後ろに取り、(7) のように、離脱物を明示しない場合には文が成立しない。ただし、(7b) は、「メタルが地面に落ちた」という意味を表し、移動動詞の“掉”の解釈は取れる。つまり、中国語では「離脱元＋V＋離脱物」というように、離脱物が出現しないと、離脱動詞に含まれる状態変化の意味を焦点化することは不可能である。これは、日本語の場合は、状態変化が焦点化された類は、「～ガ V」の構文によって状態変化のみを焦点化することが可能であり、主語が状態変化することを表すためであると考えられる。一方、中国語の場合は、「～ガ V」の構文では位置変化、状態変化のいずれも焦点化することが可能であるため、構文だけでは主語が位置変化するか、状態変化するかを決定できない可能性があると考えられる。

（8）　a.　布娃娃　被　拧掉　了　头。

ぬいぐるみ　られる　V（もぐ）diao　た　頭

（ぬいぐるみは頭をもがれた。）

b.＊布娃娃　被　拧掉　了。

ぬいぐるみ　られる　V（もぐ）diao　た

中国語の場合は、状態変化が焦点化された「離脱元＋V」において、離脱物も出現しなければならないことは、離脱元の状態変化が全体的解釈もしくは部分

的解釈になるかという点とも関連する。

（９）　指がむけた。

(10)　脚后跟　掉　皮　了。

　　踵　　diao　皮　た

　　（踵は皮がむけた。）

(9) (10) はそれぞれ日本語と中国語の状態変化が焦点化された場合である。日本語の場合は、前述したが、「指」は「すべての皮」がなくなったという全体的解釈を取る。一方、中国語の場合は、全体的解釈、部分的解釈のいずれも取ることが可能である。これは、中国語の場合では、離脱物が目的語であり、全体的解釈を受けるため、離脱元の状態変化が部分的解釈でも、全体的解釈でも良いと考える。

4.　日中離脱動詞における自動詞と他動詞のずれ

4.1　日本語の無対他動詞

日本語の場合は、(11ab) のように、自動詞が自然に起きる離脱動作も、外力により引き起こされる離脱動作も表すことが可能である。しかし、(12) に示すように、自動詞を持たない無対他動詞の離脱動詞も存在する。「はげる」は自他対応しないことを 4.2.1 節で述べる。

(11)　a.　木の皮がむけた。

　　b.　みかんの皮がむけた。

(12)　木の皮をはいだ。

(12) は、「はぐ」動作を行い、「皮」を「木」から離脱させることを表す。柴田編 (1976) は、「はぐ」について「力を入れて」するほどの、〈無理やりに〉分離する行為を表すと指摘している。さらに、坂東 (1979) は、「はぐ、はがす、むく」を考察し、「はぐ」は力を入れて、本体から対象物を引き離す行為と記述している。そして、「行為に伴う力」の点から考えると「はぐ」が一番大きく、「む

く」が一番小さく、「はがす」がその中間に位置するとしている。この点から見ると、日本語の自動詞は外力で行われる動作を表すことが可能であるとしても、無理矢理の外力という他動性が極めて高い動作とは適合しないと考えられる。

以上から、日本語では、自然に起こる動作も、外力により起こされる動作も自動詞で表すことが可能であるが、無理矢理な力が使用される場合は自動詞で表現することは難しいと考えられる。

4.2　日中離脱動詞における自動詞と他動詞のずれについて

以下では、例を取り上げ、日中離脱動詞の対応を改めて整理する。(13) は日本語の文であり、(13ab) は外力がなくても起こる離脱動作を表す自動詞文、(13cd) は外力がないと起こらない離脱動作を表す自動詞文である。(13e) は無理矢理な外力を使用する他動詞の文である。(14) は (13) に対応する中国語の文であり、(14ab) のみが自動詞を使用することが可能であり、(14cde) は“V 掉”で表現しなければならない。以上のように、なぜ日中で自他の対応が一致しないかについて反使役化、脱使役化とナル型、スル型言語という観点から説明を与える。

(13)　a.　木の皮がむけた。

　　b.　バービー人形の足がとれた。

　　c.　みかんの皮がむけた。

　　d.　彼の足がもげた。

　　e.　太郎が木の皮をはいだ。

(14)　a.　树 皮　掉　　了。

　　木 皮　diao　た

　　b.　芭比娃娃　　的 腿　掉　　了。

　　バービー人形 の 足　diao　た

　　c.　桔子　皮　被　　剥掉　　了。

　　みかん 皮　られる　V（むく）diao た

　　d.　他 的 腿　被　　拧掉　　了。

　　彼 の 足　られる　V（もぐ）diao　た

e.　太郎　扯掉　　了　树　皮

　　太郎　V（はぐ）diao　た　木　皮

4.2.1　反使役化と脱使役化について

影山 (1996) は、他動詞から自動詞への転換には反使役化と脱使役化の操作が存在するとし、以下のように指摘している。

反使役化：自動詞化接辞-e-は、使役主を変化対象と同定することで自動詞化を行う。

脱使役化：自動詞化接辞-ar-は、使役主を意味構造で抑制し統語構造に投射しないことで自動詞化を行う。

(影山 1996: 184)

さらに、反使役化は対象自身の内在的な性質によるものであり、脱使役化は外在的な要因によるものであると指摘している。影山 (1996) によれば、本論文で取り上げた離脱動詞「とれる、おちる、ぬける、はずれる、もげる、はがれる、むける、はげる」はほとんど反使役化に属する。「おちる」は形態上からは判断できないが、自然に起きる離脱動作を表す点から、対象自身の内在的な性質により起こる動作を表すことが可能である。この点で、反使役化に近いと考える。「はげる」は形態上から見ると「はぐ」が反使役化した自動詞に見えるが、影山 (1996) は「＊ペンキをはぐ（はげた)」、「木の皮をはぐ（＊はげた)」の例を挙げ、「はぐ」と「はげる」は別々の動詞であるとしている。さらに、「『はげる』は自然発生的な出来事を表し、『難なく』や命令形を受け付けない (影山 1996: 181)」と述べている。本研究では、「はげる」は自然発生する離脱動作を表すことができるという点で、反使役に近いと考える。一方、脱使役化は動作主が背景に隠れ、以下の「植わる」のような動作主がないと、つまり外力がないと起こらない事態を表す。

(15)　木が植わった。

一方、中国語では、日本語の反使役化と脱使役化に対応する現象があるが、李 (2008)、申 (2009) で指摘されたように自由に変換できるというわけではなく、制限がある[50]。以下では単音節動詞と複合動詞に分けて中国語の反使役化、脱使役化に関する先行研究を紹介していく。まず、単音節動詞は両方の使役化が可能であるが、数が少ない。これは、中国語の単音節動詞は少ないためであると説明されている。李 (2008) は、単独の動詞に見られる自他交替は日本語の反使役化に対応すると指摘している。なお、離脱動詞の“掉”は自他交替できず、単独で他動詞として機能しない。

次に、複合動詞の場合を見ていく。李 (2008) は、(16) のように“打、弄”のような軽動詞を前項動詞とするものは日本語の反使役化に当たるとし、(17) のように、“好、完”のような限界点を表す補語を後項動詞とするものは日本語の脱使役化に当たるとしている。

(16)　玻璃　打碎　了。
　　ガラス　割れる　た
　　(ガラスが割れた。)
(17)　树　种好　以后　我们　走　吧。
　　木　植える　後　私たち　行く　よう
　　(木が植わったら行こう。)　(李 2008: 33)

さらに、「他動詞＋結果補語」の複合動詞では、例えば、(18) のように中国語で「枝が折れた」と言う場合は、動詞には能格動詞“断 duàn”の他に、複合動詞の“折断（折る―折れる）”“砍断（切る―切れる）”を反使役化することも不可能ではない。この現象は、「主語の動作主性が高ければ高いほど反使役化の容認度が下がるのである」と動作主性の観点から説明づけられている。つまり、“吹断”は「風などの自然現象を主語に取り得るからである (李 2008: 30)」として

[50] 秋山 (1998) や石村 (2000) も中国語の結果複合動詞を考察し、自動詞化を分析しているが、“张三笑醒了李四（张三が笑って、李四を起こした）”“张三闹累了李四（张三が騒いで、李四を疲れさせた）”“树刮倒了（木が（風に）吹かれて倒れた）”“小王切断了刀（王君は包丁の切れ味を悪くした）”など内省が異なる判断が多いため、本論文では李 (2008)、申 (2009) を参考にする。

いる。

(18)　树枝 {断/吹断/?折断/*砍断} 了。
　　この枝（折れる／吹く-折れる／折る-折れる／切る-折れる）た
　　（枝が折れた。）　(李 2008: 30)

申 (2009) は日本語の反使役化に当たる操作については、中国語では自動詞から他動詞に変換するため存在しないと主張している。また、脱使役化に関しては、以下の (19) のように、「V 1 が V 2 の結果状態を目的として活動を行ったのではなく、むしろ偶発的な結果を招いたという事象構造 (申 2009: 180)」である場合は脱使役化が可能であると指摘している。さらに、以下のように述べている。

(19)　a. 他们　把　这本　教材　编浅　了。
　　彼ら　を　この　教材　編集し-浅い　た
　　（彼らはこの教材を編集したが、内容が浅すぎた。）
　　b. 这本　教材　编浅　了，不　适用　于　大学　学生。
　　この 教材　編集し-浅い　た、ない 適用する に　大学　学生
　　（この教材は編集内容が浅すぎて、大学生に合わない。）
　　(申 2009: 178)

V1 の行為が V2 結果状態を目的としているか否かという要因は、動作主を背景化し、具現化させず、結果状態を前景化して状態変化を被る対象物を主語に置いた脱使役化された自動詞構文の成立を決定する第一の要因であると思われる。　(申 2009: 180)

そして、以下の (20) について、「V1 が V2 の結果状態を目的として活動するという場合は、脱使役化が許されないと予測される (申 2009: 180)」とし、「V1 が V2 の結果状態を意図しており、他動性が高いため、脱使役化が起こらず、〈被 bei〉という受け身標識がなければ文法的ではない (申 2009: 180)」と述べている。

(20) a. 他 气 得 把 墙上 的 画 都 扯掉 了。
彼 怒る de を 壁上 の 絵 全部 引っ張る-落ちる た
（彼は怒りのあまりに、壁にかけてあった絵を引っ張り落としてしまった。）

b. 墙上 的 画 不小心 *(被 他) 扯掉 了。
壁上 の 絵 うっかり (られる 彼) 引っ張る-落ちる た
（壁の絵はうっかり彼に引っ張り落とされてしまった。）

(申 2009: 181-182)

さらに、中国語の結果複合動詞における脱使役化の第二の要因として、「起因事象の動作が特定化されていない場合が挙げられる (申 2009: 182)」と以下のように指摘している。

> 中国語の結果複合動詞では、V1 に〈打-da〉が用いられたときに、脱使役化が起こりやすい。[略]〈打-da〉は、具体的な様態・手段指定がなく、「何らかの力を加える」という抽象的動作だけを表すため、原因事象における動作主性が背景化され、脱使役化が起こると考えられる。しかし、V1 に具体的様態・手段を表す他動詞がくる場合、例えば〈推开 tui-kai〉（押し開ける）では、脱使役化はおこらない。
>
> Levin and Rappaport Hovav (1995: 106-107) では、break 類動詞のように、「脱他動化」(detrasiribization) が起こる条件として、起因事象が「未指定」(unspecified) であることを挙げている。起因事象が未指定とは、起因事象の動作主、動作の手段、様態等が未指定ということである。
>
> (申 2009: 182-183)

李 (2008)、申 (2009) は同じ現象について、反使役化か脱使役化かという判断に相違が見られるが、軽動詞以外の動詞が V1 を担う場合は自動詞化できないという点では共通している。つまり、V1 の他動性が高いほど自動詞化が起こりにくいと言える。例えば、(21) のような文について、李 (2008) では反使役化であるとされ、申 (2009) では脱使役化であるとされているが、(21b) が言えない理

由は「押す」のような動詞は具体的な動作を表さない軽動詞と異なり、特定の動作を表すことであるとされている。特定の動作を表す動詞は具体的な動作、即ち特定の動作主、動作の手段、様態を持つため、この点から考えると軽動詞より他動性が高いと言える。このように、中国語では複合他動詞から自動詞へ変換する操作は、前項動詞の他動性が低くなければ変換できないと帰結できる。つまり、例外を除けば、前項動詞が具体的な動作を表す動詞であると自動詞化できない。

(21)　a.　门　　打开　了。
　　ドア　開く　た
　　（ドアが開いた。）
　　b.＊门　　推开　　了。
　　ドア　　押す-開く　た
　　（ドアが押し開けた。）

以上の例を踏まえて、日中の自動詞化について考える。まず、日本語より中国語は自動詞化する操作が厳しいと考えられる。日本語の場合は、他動性が極めて高い「はぐ」のような無対他動詞が自動詞を持たない。一方、中国語は、軽動詞に近いような他動性が低い動詞のみが自動詞化できる。このように、ある特定の外力が必要である場合は、中国語において自動詞で表現することができないと考えられる。従って、「みかんの皮がむけた」などの事態は中国語では他動詞でしか表せない。

次に、他動詞の離脱動詞である“V 掉”について見られたい。申 (2009) は、離脱を表す“V 掉”の他動詞の例 (20) を取り上げ、V1 が V2 の結果を目的とした動作を表し、他動性が高いため、脱使役化ができないと説明している。

そこで、本論文で取り上げた“V 掉”を (22) に整理し確認した結果、“炸掉（爆発する-diao）”以外は、申 (2009) の説明に合致すると考えられる。

(22)　炸掉（爆発する-diao）、剥掉（剥く－diao）、撕掉（はがす－diao）、
蹭掉（擦る－diao）、拔掉（抜く－diao）、扯掉（引っ張る－diao）、
拧掉（もぐ－diao）、抠掉（引っ掻く－diao）、踢掉（蹴る－diao）、
脱掉（脱ぐ－diao）

“炸掉（爆発する－diao）”は、爆発により“掉”になるということを表し、爆発の目的は“掉”にあるかどうかは判断しづらい。しかし、このような“V 掉”の V はある特定の動作を有する動詞であるため、自動詞化できないと考える。

また、軽動詞として挙げられた“弄、打”が“掉”と結合する場合を見ていく。(23) は「軽動詞＋掉」であるが、いずれも不自然である。これは“弄、打”の目的は“掉”であるためであると考えられる。

(23)　a.＊墙纸　弄掉　　了。
壁紙　V（する）diao　た
b.＊扣子　打掉　　了。
ボタン　V（する）diao　た

4.2.2　ナル型言語とスル型言語

池上 (1983) では、日本語はナル型言語であり、英語はスル型言語であると指摘されている。さらに池上 (2011) では中国語はスル型である英語に近いと示唆されている。

また、金 (1999) は、ナル的表現とスル型表現を以下のように定義している。

ナル的表現：動作主にはあまり関心を持たず、事柄が起った結果やその結果生じた状態に視点をおいて表現すること。

スル的表現：その動作主を中心にして事柄を能動的・主体的に把握し、その動作の進行過程に視点をおいて表現すること。

(金 1999: 62)

禹 (2014) はナル型、スル型の観点から日本語、中国語、韓国語を考察し、日本語は「〈非自発的変化〉の場合でも〈自発的変化〉として捉えられる素質をもともと持っており、主体の行為を希薄化し自然な成り行きで事が運んでいったというふうに表現しようとする、いわば『ナル』的表現への志向が見て取れる(禹 2014: 73)」としている。一方、中国語は「〈非自発的変化〉の場合は、主体による『行為』とその「結果」を言及しなければならず、事態に関与する主体の行為に注目し、それを際立たせるような形で表現しようとする、いわば『スル』的表現への志向が見て取れる (禹 2014: 73-74)」と指摘している。

以上の先行研究によれば、同じ事態に対し、日本語は自発的変化と捉える一方、中国語は行為に注目する。このように、同じ事柄を表す際に、日本語では自動詞が好まれる一方、中国語では他動詞が好まれると考えられる。この点から考えれば、離脱動詞においても、日本語では自動詞で表現されるのに対し、中国語では他動詞で表現される現象も理解できるようになる。

5. まとめ

本章は日本語と中国語を対照し、以下のことを明らかにした。

(24) 位置変化が焦点化された類においては、日本語は起点を示すカラ格を取ることができる一方、中国語はカラ格に対応する“从”を取らない。この現象から、位置変化が焦点化された中国語の離脱動詞は、日本語より状態変化に重きがあると考えられる。

(25) 状態変化が焦点化された類においては、日本語は全体的解釈を取る一方、中国語の場合は、全体的解釈、部分的解釈のいずれも取ることが可能である。これは、中国語の場合では、離脱物を目的語に取る必要があり、全体的解釈を受けるため、離脱元の状態変化が部分的解釈でも、全体的解釈でも良いためと考えられる。

(26) 日本語の離脱動詞は自他が対応していることが多く、無理矢理な外力が必要である動作を表す動詞に限り、無対他動詞も存在する。一方、中国語は“V 掉”の方が多い。この現象について反使役化、脱使役化とナル型言語、スル型言語という観点から説明を行った。

1) 日本語では自動詞化の操作はより自由であるのに対し、中国語では自動詞化の操作には厳しい制限がある。

2) 日本語はナル型言語に属するため、事態を自発的変化と捉え、自動詞で表現する方が好まれるに対し、中国語はスル型言語に属するため、行為に注目し、他動詞で表現する方が好まれる。

第８章　結論

1.　各章のまとめ

本論文は、離脱動詞が位置変化、状態変化と関係する現象であることを指摘し、離脱動詞の体系を明らかにすることを目的とした。特に、日中の各離脱動詞の意味特徴、及びそれぞれの内部体系、さらに、移動動詞、状態変化動詞と比較し、その関係を議論した。

以下、第３章以降の議論についてまとめる。

第３章では、日本語の各離脱動詞の意味特徴を分析し、その内部体系を検討した。結果としては、日本語の各離脱動詞は離脱物と離脱元の関係により使い分けられることを明らかにした。また、自然な離脱事態か外力により引き起こされる離脱事態かということは日本語の各離脱動詞にとって、弁別的な特徴ではないことを示した。また、離脱動詞は、1)、構文的な特徴から見ると、「離脱元の離脱物がＶ」を取ること、2)、離脱物と離脱元の関係から見ると、離脱動詞が取る離脱物と離脱元が「全体－部分」の関係にあること、3)、意味的には「事象Ⅰ：離脱物が離脱元から位置変化する」と「事象Ⅱ：離脱物がなくなったことで、離脱元が状態変化する」という２つの事象を含むことを明らかにした。そして、離脱動詞には、カラ格を取ることができる位置変化が焦点化された離脱動詞と結果補語を取ることができる状態変化が焦点化された離脱動詞と、「むける、はがれる」のような２つの事象を焦点化できる交替型があることを明らかにした。

第４章では、位置変化が焦点化された離脱動詞と移動動詞、状態変化が焦点化された離脱動詞と状態変化動詞との比較を通して、位置変化が焦点化された離脱動詞は、離脱後の段階を表さず、過程性を持たない点で移動動詞と異なることを明らかにした。状態変化が焦点化された離脱動詞は、「全体」と「部分」のいずれの状態変化も表せる点で状態変化動詞と異なることを明らかにした。

第５章では、中国語の離脱動詞“掉”を検討し、文法的な振る舞いから、“掉”は瞬間動詞であり、過程性がない日本語の離脱動詞と共通することを論じた。また、“掉”は日本語の各離脱動詞が取れる離脱物の多くを取れることが示した。また、外力がないと引き起こされない離脱動作の場合は“掉”が使用できないこ

とを明らかにした。

第６章では、中国語の離脱動詞には“掉”のほか、“V 掉”が存在することを論じ、日本語の離脱動詞は、離脱物と離脱元の関係により使い分けるのに対し、中国語の離脱動詞は、表す事態が自然に起こるか、外力により引き起こされるかによって使い分けることを明らかにした。また、中国語の離脱動詞は、「離脱物＋V」、「離脱元＋V」という構文により位置変化が焦点化されたものと状態変化が焦点化されたものに分けられることを指摘した。そのうち、「離脱物＋V」は物の位置変化の出発段階を表す点において、起点指向移動動詞と共通し、“从”、「V＋トコロ」を取りにくい点において、起点指向移動動詞と異なることを示した。また、「離脱元＋V」は、離脱元の状態変化を表す点で状態変化動詞と共通し、「離脱物＋V」「離脱元＋V」が表す事柄が同様であるかどうかという点で異なることを示した。また、位置変化、状態変化の有無から、“V 掉”の各用法を再整理したことで、“V 掉”が連続する可能性を示唆した。

第７章では、日本語の位置変化が焦点化された類と中国語の「離脱物＋V」、状態変化が焦点化された類と「離脱元＋V」を照らし合わせて、それぞれの共通点と相違点を示した。また、中国語では他動詞が多いことを、自動詞化の制限とスル型言語という観点から説明した。

以上から、日本語の離脱動詞はカラ格を取るか、結果補語を取るかにより位置変化が焦点化された類と状態変化が焦点化された類に分けられ、それぞれ移動動詞と状態変化動詞と共通点、相違点が存在することから、独立の一類の動詞であり、移動動詞と状態変化動詞と接点があることを示した。一方、中国語では“掉”“V 掉”しかないが、「離脱物＋V」、「離脱元＋V」という構文により位置変化と状態変化に分けられ、「離脱物＋V」は、離脱物が離脱元から移動するという位置変化を焦点化して表し、他方、「離脱元＋V」は離脱物がなくなることで離脱元が状態変化することを焦点化して表す。そして、「離脱物＋V」、「離脱元＋V」は、それぞれ移動動詞、状態変化動詞と共通点、相違点が存在することから、独自の一類をなし、両者と接点があることを示した。

2. 今後の課題と展望

本論文では、自動詞の離脱動詞の特徴を考察することで、これらの動詞は移動動詞でもなく、状態変化動詞でもない一類の動詞をなすという位置づけを行った。そして、位置変化と状態変化の事象を含むという点から、移動動詞と状態変化動詞と接点があることを論じた。

本研究は、このような分析を通して、壁塗り交替が起こる現象を広く捉える可能性を提示できたと考える。並びに、移動動詞、状態変化動詞との関係、及び動詞全体の分類・体系を考察するための一つの手がかりになると考える。また、カラ格と“从”の使用から、日中において位置変化と状態変化の見方にずれがあることが見られる。位置変化、状態変化と関わりがある離脱動詞を考察することをはじめ、日中における位置変化、状態変化の捉え方を論じることが今後求められる。

一方、多くの課題も残すことになった。まず、本論文は移動動詞、状態変化動詞そのものについて厳密に立ち入らなかった面があった。移動動詞、状態変化動詞を再考し、離脱動詞との接点を細かく見ることで、離脱動詞は移動動詞と状態変化と連続しているのかということを考える必要がある。さらに、消滅動詞との関係をどのように捉えるかは重要である。特に、消滅動詞を考察することで、日中の対応関係が一層明確になると思われる。例えば、日本語の場合は、離脱動詞「おちる」を用い「汚れがおちる」のような消滅の意味も含むような曖昧な例が存在する。中国語では離脱動詞“掉”と消滅動詞である“没”は明確に区別されている。この対応関係をどのように捉えるか、なぜこのような差異が生じるのかを検討することが求められている。

また、本研究は他動詞を研究対象としなかったが、他動詞を視野に入れることで、日中自動詞、他動詞の対応関係を明確にできる可能性があると思われる。“V 掉”は日本語の他動詞のみに対応するのか、他動性が弱い“V 掉”は日本語の自動詞と対応する場合があるのかなどの課題が残される。このような問題を考察することにより、さらに、日中の自動詞と他動詞の対応の違いの解明に発展させることができるのではないかと考える。

参考文献

Benom, Carey (2012) The Semantics of some Verbs of Separation in Japanese『九州大学言語学論集』33, pp.107-132, 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室.

Levin, Beth and Malka Rapapport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press.

Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: TheAcquisition of Argument Structure,* MIT Press.

秋山淳（1998）「語彙概念構造と動補複合動詞」『中国語学』245、pp. 32-41

荒井清秀・劉青然（1982）「中国語動詞の意味記述 1」『愛知大学文学論叢』68、pp. 195-214、愛知大学文学論叢

池上嘉彦（1975）『意味論　意味構造の分析と記述』大修館書店

池上嘉彦（1983）『「する」と「なる」の言語学―言語と文化のタイポロジーへの試論― 再版』大修館書店

池上嘉彦（2011）「言語研究のおもしろさ」大津由紀雄（編）『ことばのワークショップ―言語を再発見する―』第Ⅰ部、pp. 1-45、開拓社

井島正博(2005)「変化動詞文の格構造」『日本語学論集』創刊号、pp. 56-82、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室

石村広(2000)「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」『中国語学』247、pp. 142-157

尹美蓮（2015）「進行相における“在～”、“～着”の特徴と意味分析」『現代社会文化研究』60、pp. 1-16、新潟大学大学院現代社会文化研究科

禹昊穎（2014）「東アジア諸語の発想と表現 ：「スル」的言語と「ナル」的言語をめぐって」『人文』13、pp. 57-79、学習院大学人文科学研究所

王軼群（2005）「起点を表す日本語の「から」と中国語の“从（cong）”：状態・状態変化を表す場合を中心に」『国際文化学』12、pp. 89-103、神戸大学

王軼群（2009）『空間表現の日中対照研究』くろしお出版

大河内康憲（1990）「日本語と中国語の語彙の対照」玉村文郎（編）『講座日本語と日本語教育 7 日本語の語彙・意味（下）』pp. 54-80、明治書院
太田真由美（2012）「移動動詞「おちる」の意味分析」『言葉と文化』3、pp. 9-26、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
岡田幸彦（2013）『語の意味と文法形式』笠間書院
沖森卓也・蘇紅（編）（2014）『中国語と日本語』朝倉書店
奥津敬一郎（1981）「移動変化動詞文－いわゆる spray paint hypallage について－」『国語学』127、pp. 48-60
影山太郎（1996）『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版
影山太郎（1999）『形態論と意味』くろしお出版
川野靖子（1997）「位置変化動詞の接点：いわゆる「壁塗り代換」を中心に」『筑波日本語研究』2、pp. 28-40、筑波大学日本語学研究室
川野靖子（2003）「位置変化動詞と結果の副詞句」『筑波日本語研究』8、pp. 39-48、筑波大学日本語学研究室
川野靖子（2006）「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象―格成分の対応の仕方―」『日本語の研究』2-1、pp. 32-47
川野靖子（2009）「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞―交替の可否を決定する意味階層の存在―」『日本語の研究』5-4、pp. 47-61
川野靖子（2017）「「グラスから水を空ける」と「グラスを空ける」―離脱型壁塗り代換の分析―」『埼玉大学紀要（教養学部）』52-2、pp. 121-134
岸本秀樹（2001）「壁塗り構文」影山太郎（編）『日英対照動詞の意味と構文』、pp. 100-126、大修館書店
木村英樹（1981）「『付着』の“着/zhe/”と『消失』の“了/le/”」『中国語』258、pp. 24-27
金賢珍（1999）「日本語の『ナル的表現』と韓国語の『スル的表現』の対照考察」韓國外國語大學校大學院修士学位論文
国立国語研究所編（1964）『分類語彙表』秀英出版
国立国語研究所編（2004）『分類語彙表増補改訂版』大日本図書
國廣哲彌（1982）『意味論の方法』大修館書店
国広哲弥（2006）『理想の国語辞典Ⅱ　日本語の多義動詞』大修館書店

國廣哲彌（編）（1982）『ことばの意味 3：辞書に書いてないこと』平凡社
呉念聖（2000）「中国語の移動表現」『法政大学教養部紀要』111、pp.167-179、法政大学教養部
柴田武(編)（1976）『ことばの意味 1：辞書に書いてないこと』平凡社
柴田武(編)（1979）『ことばの意味 2：辞書に書いてないこと』平凡社
柴田武・山田進（編）（2002）『類語大辞典』講談社
島村典子（2016）『現代中国語の移動を表す述補構造に関する研究』好文出版
申亜敏（2009）「中国語結果複合動詞の意味と構造:日本語の複合動詞・英語の結果構文との対照及び類型的視点から」東京外国語大学博士学位論文
菅井三実（1999）「日本語における空間の対格標示について」『名古屋大学文学部研究論集文学』45、pp.75-92
杉本武（1983）「はなれる・はずれる・とおざかる」『日本語研究』6、pp.17-26、東京都立大学日本語研究会
杉本武（2005）「動詞の意味分析:「はがす」と「むく」」『文藝言語研究　言語篇』47、pp.33-43、筑波大学文藝・言語学系
鈴木さかゑ（1981）「はぐ・そぐ」『日本語研究』4、pp.25-27、東京都立大学日本語研究会
鷲見幸美（2000）「現代日本語移動動詞の意味論」名古屋大学大学院文学研究科博士学位論文
戦慶勝（2002）「中日両語の対照研究方法について」『地域総合研究』30-1、pp.51-68、鹿児島国際大学附属地域総合研究所
戦慶勝（2005）「中国語の動詞と日本語の動詞の対照研究（1)」『国際文化学部論集』6-2、pp.67-89、鹿児島国際大学国際文化学部
戦慶勝（2005）「中国語の動詞と日本語の動詞の対照研究（2)」『国際文化学部論集』6-3、pp.181-214、鹿児島国際大学国際文化学部
田中茂範・松本曜（1997）『空間と移動の表現』中右実（編）『日英語比較選書 6』研究社出版
多和田峰子（2001）「“着”の意味の連続性」『多元文化』1、pp.91-103、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻
丹保健一（1998）「「ヲ出る」「カラ出る」の文法（その 2）―「物理的意味」と

「抽象的意味」の間―」『三重大学教育学部研究紀要』49、pp.17-25
角田大作（2009）『世界の言語と日本語―言語類型論から見た日本語―（改訂版）』くろしお出版
鄭瓊花（2017）「“着”の基本的な文法的意味と意味特徴」『現代社会文化研究』64、pp.183-197、新潟大学大学院現代社会文化研究科
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅰ巻』くろしお出版
中島悦子（2007）『日中対照研究　ヴォイス―自・他の対応・受身・使役・可能・自発―』おうふう
西川賢哉（2003）「「NP1 の NP2」タイプ F　譲渡不可能名詞 NP2 とその基体表現 NP1」西山裕司(編)『名詞句の世界―その意味と解釈の神秘に迫る―』、pp.65-82、ひつじ書房
仁田義雄（1993）「日本語の格をめぐって」仁田義雄（編）『日本語の格をめぐって』pp.1-37、くろしお出版
日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法 2 第 3 部格と構文 第 4 部ヴォイス』くろしお出版
服部四郎（1964）「言語の音声と意味」『国語学』56、pp.1-16
服部四郎（1968）『英語基礎語彙の研究』三省堂
坂東多衣子（1979）「はぐ・はがす・むく」『日本語研究』2、pp.35-39、東京都立大学
古川裕（2007）「「中国語らしさ」の認知言語学的分析―日本語から見える中国語の世界―」彭飛（編）『日中対照言語学研究論文集』225-260、和泉書院
方美麗（2004）「中国語の「的」と日本語の「の」の意味用法の考察―日中対照研究―」『外国語教育論集』26、pp.91-103、筑波大学外国語センター
方美麗（2005）『「移動動詞」と空間表現―統語論的な視点から見た日本語と中国語―』白帝社
丸尾誠（2004）「現代中国語の空間移動表現に関する研究」名古屋大学国際文化研究科博士学位論文
丸尾誠（2014）『現代中国語方向補語の研究』白帝社
丸尾誠（2017）「中国語の結果補語“掉”の用法―完遂義を中心に―」『言語文化論集』38-2、pp.47-60

三宅知宏（1995)「ヲとカラ―起点の格標示―」宮島達夫・仁田義雄（編)『日本語類義表現の文法（上）単文編』pp.67-73、くろしお出版
宮島達夫（1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
村木新次郎（2000)「第２章 格」仁田義雄・村木新次郎・柴田方良・矢澤真人（著)『日本語の文法１ 文の骨格』pp.49-115、岩波書店
森田耕平（2017)「現代日本語における動詞の中止形の記述的研究」大阪大学大学院文学研究科博士学位論文
森田良行（1977)『基礎日本語―意味と使い方』角川書店
森田良行（1989)『基礎日本語辞典』角川書店
姚艶玲（2008)「日本語と中国語における「移動事象」の言語化に関する対照研究」『東海大学紀要』29、pp.115-127、外国語教育センター
楊麗栄（2014)「中国語の結果構文の使役化成立条件について」『現代社会文化研究』58、pp.109-121
李文超（2008)「現代中国語と日本語における反使役化と脱使役化」東北大学国際文化研究科修士論文
劉媛莉（1998)「方向補語の派生法について」『長崎大学総合環境研究』1-1、pp.91-96
林玉恵（1999)「日中語彙の比較研究―感情語彙を中心に―」『日本語論究６語彙と意味 研究叢書』pp.217-258、名古屋・ことばのつどい編集委員会

成春有（1998)〈中日动词得几个特征－中日语言对照研究－〉《桜美林大学中国文学論叢》23、pp.139-152
戴耀晶（1991)〈现代汉语表示持续体的“着”的语义分析〉《语言教学与研究》2、pp.92-106
刘淼（2007)〈“V 掉”的语义类型与“掉”的虚化〉《中国语文》2、pp.133-143
吕叔湘（1984)《现代汉语八百词》北京商务印书馆
马庆株（1992)《汉语动词和动词性构造》北京语言学院出版社
田硕（2015)〈移动性同义动词“落”“掉”的含义区别〉《黑龙江教育学院学报》34-10、pp.124-125
张晓静（2009)〈现代汉语单音节动词研究〉四川师范大学汉语言文字学修士论

文

周磊磊（1999）〈“V 掉”的语法意义及其他〉《六安师专学报》15-1、pp.61-68

朱德熙（1982）《文法讲义》商务印书馆

用例出典

「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」、(NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)を使用)、国立国語研究所.

「筑波ウェブコーパス」(NINJAL-LWP for TWC (NLT)を使用)、筑波大学.

各章と既発表論文及び口頭発表の関係

第１章　序論

新規執筆

第２章　先行研究と問題の所在

新規執筆

第３章　日本語の各離脱動詞の意味特徴及び離脱動詞の内部体系

李響（2016）「現代日本語における離脱動詞の意味分析」筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科中間論文

李響（2016）「離脱動詞と移動動詞の比較―「とれる」「おちる」を中心に―」『言語学論叢オンライン版』9（通巻 35 号）、pp.75-86、筑波大学一般・応用言語学研究室

李響（2019）「コーパスに基づく類義語の意味論的研究」東アジア国際言語学会（旧称：国際連語論学会）第 7 回大会口頭発表

第４章　日本語の離脱動詞と移動動詞、状態変化動詞との関係

李響（2019）「離脱動詞のタイプと移動動詞、状態変化動詞との関係－「とれる、はずれる、むける」などを中心に－」*KLS Selected Papers*1、pp.61-72、関西言語学会

第５章　中国語の離脱動詞“掉”の意味分析及び日本語との対応関係

李響（2017）「中国語の“掉、脱落”について」筑波大学日本語日本文学会第四十回大会口頭発表

第６章　離脱動詞“V 掉”、及び“掉”、“V 掉”と移動動詞、状態変化動詞との関係

李響（2019）「中国語の離脱動詞“掉”について－日本語の離脱動詞との対照を通して－」『日中言語対照研究論集』21、pp.90-107、日中対照言語学会

第７章　離脱動詞の日中対照

新規執筆

第８章　結論

新規執筆